大学進学塾　灘ゼミ　二〇二〇年度　関関同立古文　実践・基礎古文単語演習（　　月　　日配布）　氏名〔　　〕

○同志社大学を志望するなら、解いておきたい過去問６０回分（１０年分）１２０語（立命・関学や、基礎固めにも効果的です）

演習問題　目次

□【一】2021 **同志社大学** 2/5, 全学部(文系) 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（4）

□【二】2021 **同志社大学** 2/6, 学部個別 文　経済〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（6）

□【三】2021 **同志社大学** 2/7, 学部個別 政策　文化情報　スポーツ健康科〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（8）

□【四】2021 **同志社大学** 2/8, 学部個別 法　グローバル・コミュニケーション〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（10）

□【五】2021 **同志社大学** 2/9, 学部個別 神　商　心理　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（12）

□【六】2021 **同志社大学** 2/10, 学部個別 社会〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（14）

□【七】2020 **同志社大学** 2/5, 全学部(文系) 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（16）

□【八】2020 **同志社大学** 2/6, 学部個別 文　経済〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（18）

□【九】2020 **同志社大学** 2/7, 学部個別 政策　文化情報　スポーツ健康科〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（20）

□【十】2020 **同志社大学** 2/8, 学部個別 法　グローバル・コミュニケーション〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（23）

□【十一】2020 **同志社大学** 2/9, 学部個別 神　商　心理　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（25）

□【十二】2020 **同志社大学** 2/10, 学部個別日程 社会〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（27）

□【十三】2019 **同志社大学** 2/5, 全学部(文系) 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（29）

□【十四】2019 **同志社大学** 2/6, 学部個別日程 文　経済〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（31）

□【十五】2019 **同志社大学** 2/7, 学部個別日程 政策　文化情報　スポーツ健康科〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（33）

□【十六】2019 **同志社大学** 2/8, 学部個別日程 法　グローバル・コミュニケーション　〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（36）

□【十七】2019 **同志社大学** 2/9, 学部個別日程 神　商　心理　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（38）

□【十八】2019 **同志社大学** 2/10, 学部個別日程 社会〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（40）

□【十九】2018 **同志社大学** 2/5, 全学部(文系) 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化〔課題：　　月　　日まで〕〔済：　　月　　日〕……（42）

□【二十】2018 **同志社大学** 2/6,学部個別日程 文 経済〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（44）
□【二十一】2018 **同志社大学** 2/7,学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（46）
□【二十二】2018 **同志社大学** 2/8,学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（48）
□【二十三】2018 **同志社大学** 2/9,学部個別日程 神 商 心理 グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（51）
□【二十四】2018 **同志社大学** 2/10,学部個別日程 社会〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（53）
□【二十五】2017 **同志社大学** 2/5,全学部(文系) 神 文 社会 法 経済 商 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（55）
□【二十六】2017 **同志社大学** 2/6,学部個別日程 文 経済〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（57）
□【二十七】2017 **同志社大学** 2/7,学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（59）
□【二十八】2017 **同志社大学** 2/8,学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（61）
□【二十九】2017 **同志社大学** 2/9,学部個別日程 神 商 心理 グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（64）
□【三十】2017 **同志社大学** 2/10,学部個別日程 社会〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（66）
□【三十一】2016 **同志社大学** 2/5,全学部(文系) 神 文 社会 法 経済 商 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（69）
□【三十二】2016 **同志社大学** 2/6,学部個別 文 経済〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（72）
□【三十三】2016 **同志社大学** 2/7,学部個別 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（75）
□【三十四】2016 **同志社大学** 2/8,学部個別 法 グローバル・コミュニケーション〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（77）
□【三十五】2016 **同志社大学** 2/9,学部個別 神 商 心理 グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（79）
□【三十六】2016 **同志社大学** 2/10,学部個別 社会〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（81）
□【三十七】2015 **同志社大学** 2/5,全学部日程(文系) 神 文 社会 法 経済 商 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（84）
□【三十八】2015 **同志社大学** 2/6,学部個別日程 文 経済〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（87）
□【三十九】2015 **同志社大学** 2/7,学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（90）
□【四十】2015 **同志社大学** 2/8,学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（93）
□【四十一】2015 **同志社大学** 2/9,学部個別日程 神 商 心理 グローバル地域文化〔課題: 月 日まで〕〔済: 月 日〕……（96）

□【四十一】2015 **同志社大学** 2/10, 学部個別日程 社会〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（９９）
□【四十三】2014 **同志社大学** 2/5, 全学部日程(文系) 神 文 社会 法 経済 商―商学総合(昼主) 商―フレックス複合(昼夜) 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕（１０１）
□【四十四】2014 **同志社大学** 2/6, 学部個別日程 文 経済〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１０３）
□【四十五】2014 **同志社大学** 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１０６）
□【四十六】2014 **同志社大学** 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１０８）
□【四十七】2014 **同志社大学** 2/9, 学部個別日程 神 商―商学総合(昼主) 商―フレックス複合(昼夜) 心理 グローバル地域文化〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１１０）
□【四十八】2014 **同志社大学** 2/10, 学部個別日程 社会〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１１２）
□【四十九】2013 **同志社大学** 2/5, 全学部日程(文系) 神 文 社会 法 経済 商―商学総合(昼主) 商―フレックス複合(昼夜) 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１１４）
□【五十】2013 **同志社大学** 2/6, 学部個別日程 文 経済〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１１７）
□【五十一】2013 **同志社大学** 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１１９）
□【五十二】2013 **同志社大学** 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１２１）
□【五十三】2013 **同志社大学** 2/9, 学部個別日程 神 商―商学総合(昼主) 商―フレックス複合(昼夜) 心理 グローバル地域文化〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１２３）
□【五十四】2013 **同志社大学** 2/10, 学部個別日程 社会〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１２６）
□【五十五】2012 **同志社大学** 2/5, 全学部日程(文系) 神 文 社会 法 経済 商―フレックスA(昼主) 商―フレックスB(昼夜) 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１２８）
□【五十六】2012 **同志社大学** 2/6, 学部個別日程 文 経済〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１３０）
□【五十七】2012 **同志社大学** 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１３２）
□【五十八】2012 **同志社大学** 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１３４）
□【五十九】2012 **同志社大学** 2/9, 学部個別日程 神 商―フレックスA(昼主) 商―フレックスB(昼夜) 心理〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１３６）
□【六十】2012 **同志社大学** 2/10, 学部個別日程 社会〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……（１３８）
○解答 ……（１４０）

地域文化

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いづれの御代にか、坊門の中納言と聞こえしは、三条坊門なる所に広くおもしろき家づくりして住みたまひけり。才などもすぐれて、時世のおぼえはなやかなるに、非違の別当をさへかけて、装束清らにしなしたまへれば、もてはやされたるかたちのうるはしきに、心ばへ、はたすくよかにて、ァあだめいたる方はすさまじげに思ひつつ、けざやかなるもてなしなれば、なかなかさうざうしきさまに、世の人は言ひなやむめり。時の大臣、親王たちなど婿にせまほしう気色ばみたまへど、いかなるにか心とどめて承け引くこともなく、独り住みの心やすきにならひて、まだきに、やんごとなきわたりにしも取りこめられたらんは、いと煩はしかりぬべしとて、ィどかく逃れつつ過ぐしたまひぬ。

文月初め、嵯峨の御寺に詣でたまふ帰さに、こなたかなた見めぐりたまへば、黄昏近うなれり。道の程、蜩（ひぐらし）の声いと涼しう、木の間を渡る風も身にしみて心細きに、今行く末の秋の気色思ひやられて、「写し得たり巌松の韻」と口ずさびつつなほさまよひたまふ。かたへの山陰のいとｂかごかなる所に、田舎びて結ひわたしたる竹垣のまばらなるを囲ふばかり、朝顔の心地よげにはひかかりたる夕影なれば、見所もなけれど、「おのれはあだの」など思ひ出でられつつ、夕顔ならませば今すこし心のとまりぬべく、また小薄（をすすき）の穂に出でたらん所やあると、例ならず今めかしう思ひ続けて、これもゆゑなきにはあらじと目とまりぬるに、ものふりたる木立もよしありて、こちたきにはあらぬ檜皮屋（ひはだや）のさまもｂゆゑづきたるは、何人の住みかならんとゆかしきに、人影などもせず、むごに下ろしこめられて、いとしめやかなり。御前（おまへ）より出づる細き流れの、垣根をめぐれるもかすかなるに、浮かびて流るる物は桐の葉なめりと見ゆ。文字など書きたるやうなれば、取り上げてみるに、

ｕ落ちそむる桐の一葉はなべて世の秋のあはれのはじめなりけり

ほのかなれど女手と見おほせたまへるに、いひ知らず心動きておぼゆるものから、透垣の陰によりて、やをらのぞきたまへば、かすかに経読む声の聞こえつる、いとあはれに尊げなり。御供なる人々は、「暮れ過ぎぬ」と声作（こわづく）るも煩はしく、またすきずきしきやうならんもつつましくて帰りたまふ。道すがら何となく心にかかりて、

いかなる好き者のつどへるならん、尋ね知らではあるまじきわたりかなと思ひつつ殿におはしぬ。ありつる桐の葉は取りて帰りたまひけるが、大殿油近くて見たまふに、けしうはあらぬもののさまなれば、心にくくてうち置きがたくおぼえたまへり。殿の内に案内知れる者もやとおぼせど、うときは恥づかしうて、えうち出でたまはず。

（荒木田麗女『桐の葉』）

注

非違の別当　検非違使の長官。

写し得たり巌松の韻　「涼風写得巌松韻　暮雨偸将滝水声」（『新撰朗詠集』）の一部。

おのれはあだの　「色かへぬ竹の籬の朝顔もおのれはあだの花にぞありける」（『土御門院御集』）の一部。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　かごかなる

1　まずしい　　2　荒れはてた　　3　こみ入った　　4　かぐわしい

5　ひっそりした

b　ゆゑづき

1　不吉そうで　　2　傾いていて　　3　由緒ありげで

4　きらびやかで　　5　見覚えがあって

次の文章は、中納言が、初瀬寺で出会った山伏の消息を、阿闍梨から聞く場面である。この山伏は、実は中納言の父親であった。これを読んで、後の設問に答えよ。

（阿闍梨）「さても、つねに行方たづねよ、とうけたまはる初瀬に侍りし山伏、そののちは絶えてまかりあふことも侍らざりしを、このほど亡くなりにけるにや、とうけたまはり侍りしになん。過ぎぬる八月の十五日、名高き空もことに限なく侍りしに、終はり侍りけるよし、高野に侍りし大徳の語り侍りしなり。あやしく。なべての人に変はりて、かはらかに、けはひをかしく侍りしのみならず、かの行基菩薩の変化し給ひけるにや、とあやしく侍りしは、露霜にのみ濡れそほちたる藤の衣なれど、すべて身にふれぬるもののかをりは、なべての人に変はりてなむ侍りける。四、五日、心地、例ならざりけるにや、うち臥しがちに侍りけれど、宵、暁のつとめ、怠ること侍らざりき。毎日のつとめに読み侍りける、法華経一部、読み果てて、『即往安楽世界阿弥陀仏』と、数珠おしすりて、今ともおぼえ侍らぬに、息絶え、まなこ閉ぢ侍りにし、とぞ①うけたまはる。ことのさま、かたがたあやしくおぼえ侍りて、こまかにたづね侍りしかば、いかなるものとも知り侍らず。ただ、この一両年、この御寺に籠りあひ侍りしなり。誰の人といふ名のりも、さらに申し侍らざりき。ことのついでに②申し侍るは、月ごろ、かく定めたる住処もなくまどひ歩けど、我と起こせる道心ならねばにや、詮なき妄執のみありて、ひとへに後生のみもおぼえざりしを、初瀬寺になんまかり籠れることありしよりぞ、さらにこの世のことはおぼえずなりにし。ｱかかる身となりて、何ごとをか、と我ながらおぼえしかど、なほかかりけり、と身に思ひ知れば、ｂさかしらの道心こそありがたかるべけれ、とぞ侍りし。いにしへ、四国に修行し侍りしに、ある深山に籠り侍りし聖にあひて、学問すること三年侍りし。そののちは、さらに一巻も身にそへ侍らねば、聖教にまなこを当つること侍らず、とは申しながら、くらき所なく、問ふことの問答は侍りしなり。かの人にあひて、才学つくことのみ侍りき、など、ことのありさま語り侍りしに、ｲいかにも、さにや、と思ひあはせられて、あはれに思ひ給へられ侍るを、今うけたまはることのさまのよそへられ侍るかな。いかで、さもあらば、この僧正、語らひ寄り侍りけん。まかりかくれてのち、見侍りければ、蓑の裏になむ、結びつけて侍りしものなり、とて持て侍りしを、御覧ぜさせん、とて取りてしなり」とて、さし置くものを③見給へば、

したはばや憂き世離るるしるべにも誰とは知らぬ人の行方を

と書きたるは、我が御手なり。いと不思議にて、とばかりものも言はれず。

おぼし出づれば、かの初瀬にて、この阿闍梨に「護身つかうまつりてんや」と言はれて、「かかるかたのことは、いと知り侍らず。ただ、後世を思ふばかりにまどひ歩くものなり」とありしことの、いとうらやましかりしかば、つぎの夜、畳紙に書きて見せしを、取りて去にけるなるべし。傍らに書かれたるものを見れば、

高野山のぼる煙をそれとだにみやこよ誰か思ひあはせん

返事とは見えねど、限りとおぼえ給ひけるに、さすが、かくとも知らじかし、と思ひ出で給ひけるにやと、その奥にぞ終はり給ひける時日、書かれたる。かねてこそ知り給ひけれ、といとあはれなり。

（『藤の衣物語絵巻』）

注

聖教　仏教の経典。

護身　護身法。密教の加持の法の一つ。

この僧正　山伏とともに修行をしていた僧正。

設　問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　なべて

1　他国　　2　全て　　3　近く　　4　かつて　　5　普通

b　さかしらの

1　善人ぶった　　2　大人ぶった　　3　体裁ぶった　　4　利口ぶった　　5　上品ぶった

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今川了俊は、協力を依頼した武士団(松浦党)がいる肥前松浦(まつら)に向かう軍船を弟に率いさせ、自らは陸路を進んで長門国府に滞在していた。弟の船団は数日前に近くの福浦島に着いている。

この船ども、今日も出で侍らずとて、福浦の島より使ひ来たり。「小舟にて、天の川といふ渡(わたり)をして参りたり」と申ししかば、ここにもかかる渡のありけるよと思ふにも、あはれ星逢の浜のつづきに、この渡のあらましかばとぞ覚え侍る。このついでに、また歌三首、

秋にしもかぎらざらなむ天の川海人の小舟は今も通ふを

松浦船はや漕ぎつけよ天の川まれなる中の渡なりとも

諏訪明神と七夕は同体とかや申すめれば、ことにこの諏訪・住吉の二つの御神は、ア軍の船のまぼりにてわたらせ給ふぞかしと覚えてよみ侍るなり。

霜月十八日、この歌奉りて七日になり侍るほどに、今日、皇后宮の御祭とて、神供など奉る日しも、朝より東風(こち)吹き出でて、松浦船はや出でぬと申す。ひとへに神々に祈り申すしるしと、かたじけなく覚えて、重ねて詠歌二首、

神まつる今日ぞ吹きける朝東風の便り待ちつる旅の船出は

勝つことは千里のほかにあらはれぬ浦吹く風の[a]しるべ待ちえて

この歌ども、神の御心にかなひけるやらむ、かく船出も思ふままに侍るに、十二月五日、松浦よりの使ひに、僧たち来たり給ひて、語り給ふを聞き侍れば、イこれより の船ども、あまりに待久なりけるほどに、松浦の男ども、うち寄りて、とかくまた心々の議定どもし侍りける折節、この浦の沖に、大船四十余艘通りけるを、はやこなたの船の着きぬと思ひて、人々何の定めもなく、立ちあかれて待ちけるほどに、また船は[b]よしもなき知らぬ船どもにて、行方なくきこえける。またの日、この船ど

も着き侍りけるとかや。ひとへに松浦の軍の定めを、また改めさせじと、神々のはからはせ給ひけるなるべし。こなたの船出の日しも、かかる船の松浦を通りけること、疑ひ侍るべくもなき神道の御計らひなるべし。歌は必ず神に通ずることと申せば、かく愚かなる詞の花も、神々の手向にうけひき給ふにこそ。この知らぬ船の通りける日は、霜月十八日なるべし。こなたの船は、十九日、松浦には着きけるなり。

（今川了俊『道ゆきぶり』）

注

歌三首　現在残っている歌は二首。

松浦船　松浦に向かう弟の軍船。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　しるべ

1　みちびき　　2　ゆくえ　　3　お供　　4　うわさ

5　証し

b　よし

1　訳　　2　趣　　3　縁　　4　術　　5　益

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

この入道殿の御弟にて、その頃、右大臣実雄と聞こゆる、姫君あまた持ち給へる中に、すぐれたるをらうたき者に思しかしづく。今上の女御代に出で給ふべきを、やがてそのついで、文応元年、入内あるべく思しおきてたり。院にも御気色たまはり給ふ。入道殿の御孫の姫君も、参り給ふべき。聞こえあれど、さしもやはと、押し立ち給ふ、いとたけき御心なるべし。

この姫君の御兄あまた物し給ふ中の、このかみにて、中納言公宗と聞こゆる、いかなる御心かありけむ、したたく煙にくゆり侘び給ふぞいとほしかりける。さるは、いとあるまじき事と思ひ放つにしも従はぬ心の苦しさを、起き臥し芦の根なきがちにて、御急ぎの近づくにつけても、我かの気色にて惚れ過ぐし給ふを、大臣はまた、いかさまにかと、苦しう思す。

初秋風の気色だちて艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君うす色に女郎花など引き重ねて、几帳に少しはづれて居給へるさまかたち常よりも言ふ由もなく、あてに匂ひ満ちてらうたく見え給ふ。御髪いとちごちたく、五重の扇とかやを広げたらんさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに額より裾まで、迷ふ筋なくうつくし。ァただ人にはげに惜しかりぬべき人柄にぞおはする。几帳押しやりて、わざとなく拍子うち鳴らして御箏弾かせ奉り給ふ。折しも中納言参り給へり。「こち」と宣へば、うち畏まりて御簾の内にさぶらひ給ふさまかたち、この君しもぞまたいとめでたく、飽くまでしめやかに心の底ゆかしう、そぞろに心使ひせらるるやうにて、細やかになまめかしう澄みたるさましてあてにうつくし。ィいとどもて鎮めて騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。笛少し吹き鳴らし給へば、雲居に澄み昇りていとおもしろし。御箏の音のほのかにらうたげなるを掻き合はせのほど、なかなか聞きも止められず、涙浮きぬべきをつれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小桂に、御髪はこぼれかかりて、少し傾きかかり給ふ傍ら目、まめやかに光を放つとはかかるをやと見え給ふ。よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたぐひなき御有様どもなめれば、世に知らぬ心の闇にまどひ給ふも、ことわりなるべし。

（『増鏡』）

注

入道殿　西園寺実氏。

文応元年　一二六〇年。

この姫君　実雄の娘の佶子。

心の闇　「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰和歌集』）をふまえる。

今上　亀山天皇。

院　後嵯峨上皇。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　聞こえ

1　命令　　2　噂　　3　希望　　4　約束　　5　嘘

b　こちたく

1　黒く　　2　細く　　3　美しく　　4　多く　　5　硬く

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

享保元文の頃、柳瀬美仲といふ歌よみありけり。いささか復古の志もありけるとぞ。

ある時の歌に

ア初瀬路やはつ音きかまくたづねてもまだこもりくの山ほととぎす

といふ歌をよみて、おのれもいみじうよみ得たりと思ひて、日頃したしう物学び聞こえまゐらする某大納言殿の御許に参りて、この歌見せ奉るに、いとめでくつがへらせ給ひて、「今の世にかくばかりの歌よみ出づべき人またあるべし」とも覚えず。かのいにしへの待宵の侍従、ものかはの蔵人、伏柴の加賀、沖の石の讃岐などがa「ためし」にならひて、今よりこもりくの美仲とあざ名つくとも、誰かは点つかん」とほめ給はせしかば、美仲身に余るうれしさに、帰るすなはち、しれる限りの人々にも、しかじかのよし語り聞かせてほこりけるを、イ稲荷山の神職羽倉東満このよしを聞きて、をこがましきことと思ひつつ、b「やがて」大納言殿の御許に参りて、雑掌某とかいへるに逢ひて申しけるやうは、「伝へうけたまはるに、このごろ美仲が歌に、まだこもりくのといふ歌よみて、いたく殿の御褒詞にあづかり侍りしよし、誠さることや侍りし。おのれもものの心しりそめしほどより、歌の事に深く心をよせ侍るが、こもりくといふ詞は、古く『古事記』『日本紀』『万葉集』にわたりて、みな初瀬の枕詞にて侍るを、その枕詞をかく秀句にいひかくるのみならず、五言にのみいふべき詞を、上にまだの二言をそへて七言の句に用ゐ侍ること、古歌にたえてためしなきことに侍り。いかでこの歌をほめさせ給ひて、おほけなくこもりくの美仲などいふあざ名つけとはのたまはせしならん。こはさだめて、辻大路の浮きたる語り言にこそは侍らめ。ウ殿ののたまはせしならば、歌の事地に落ちたりとや申し侍らん。いと歎かはしくこそ。この疑ひうけたまはり、晴るけたくて、ことさらにまでき侍りしなり」と申しければ、雑掌も答にさしつまりて、「いかでさること侍らん。そは美仲が弟子どもなどが、おのが師の歌をかがやかさんとて、殿の御名をかりて、浮きたることをかまへ出でたるにこそ侍りけめ」とて、そこそこにしておくつ方へはひ入りて、またと出でざりければ、東満もをかしさをこらへて家に帰りけるとぞ。

（清水浜臣『泊洌筆話』）

注

某大納言殿　武者小路実陰。歌人。

待宵の侍従、ものかはの蔵人、伏柴の加賀、沖の石の讃岐　詠んだ名歌の言葉を冠して呼ばれた歌人。

羽倉東満　荷田春満。

雑掌　雑務に奉仕する者。

『日本紀』　『日本書紀』。

秀句　わざとらしさの目立つ掛詞。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ためし

1　妙技　　2　試練　　3　象徴　　4　霊験　　5　故事

b　やがて

1　さらに　　2　そのまま　　3　たまたま　　4　しぶしぶ

5　なんとかして

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、震旦の江都に孫宝といふ人ありけり。若くして死して、その身なほ暖かにして四十余日を経たり。

遂によみがへりて、みづから語りていはく、「我、初めて死せし時、人来たりて、我を捕へて官曹の内にゐて至る。見れば、死にたる我が母、その中にありて苦を受く。孫宝、これを見て、[a]かつは母を見て喜ぶ、かつは苦を受くるを見て悲しぶ。母、孫宝を見ていはく、「我、死にてより後、久しくいましめられて、いささかに苦しび休まることなし。我、みづから訴ふるに、力及ばず」といふ。

明くるあしたに、官人ありて、孫宝を引きて、冥官に見しむ。冥官、孫宝を見ていはく、「汝、罪無かりけり。速やかに放ちゆるす、出でよ」と。孫宝、出でずして冥官に向かひていはく、「人生きたる時、つくれるところの罪も福も皆、その報ありや」と。冥官のいはく、「[b]さだめてあり」と。孫宝がいはく、「ァかねて罪をも福をもつくれるを、あひ分かち除くことありや」と。冥官のいはく、「あり」と。孫宝がいはく、「しからば、我が隣の里の人それがし、生きたりし時、罪は多く福は少なかりき。今見るに、その人ほかにあり。孫宝が母は、生きたりし時、福は多く罪は少なかりしに、それは久しく留められたり。もし定まりたる報あらば、何ぞかくある」と。

冥官、これを聞きて、驚きて主吏を召して、このことを問ふ。主吏のいはく、「その人の罪福を注せる案の無きなり」と。しかれば、冥官、孫宝が母を召して勘へ問ひて、その福多く罪少なきことを知りぬ。主吏を召して責むるに、主吏のいはく、「案を失へるがゆゑに、かの軽重を知らざるなり」と。冥官、さらに別の籍を勘ふるに、母がいふところのごとし。しかれば、仰せて、「孫宝が母を解きゆるして、楽堂といふ所にあらしめよ」といふ。しかれば、母子、共に門を出でつ。孫宝、母を送りてかの楽堂に至らしむ。その楽堂といふは、大きに善く荘厳せる宮殿・堂閣ありて、もろもろの人、男女、その中にして楽しびを受くる所なり。孫宝、このもろもろの堂閣を見て遊戯して、「かへらむ」と思ふ心なし。その間、四十日を経たり。

また、孫宝、伯父を見る。伯父、孫宝を責めていはく、「汝、ィいまだ死にかなはずして放免せらるるに、何ぞ早くかへらざるぞ」と。孫宝がいはく、「我、楽堂に

ありて、かへらむことを願はざるなり」と。伯父いかりていはく、「汝知らずや、人の死すること、おのおの、本の業によりてその報を受く。定めて、汝、報悪にして、楽堂に生まるることを得じ。ただし、いまだ死にかなはざるゆゑに、おのづからその中に遊ぶことを得たるなり。もし死なば、冥官、まさにその報を収め録さむ。豈に、母を見ることを得むや。汝、極めて愚かなり」といひて、瓶の水を取りて、孫宝が頭よりはじめて足裏に至るまで、あまねくその身にそそく。ただし、臂（ひぢ）の間に少しそそかずして水尽きぬ。その後、一つの空しき屋のあるを指さして、孫宝をその中に入れしむ。すでに入ると思ふ程によみがへるなり」と語る。ただし、そのそそきつる水のあまねからざる臂の所には、遂に肉ただれて堕落して、今に骨見えけり。

ただし、孫宝、冥官に訴へて、母が苦を抜きたる、限りなき孝養にあらざらむやとなむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』）

注　官曹　冥界の役所。　主吏　文書を管理する役人。冥官に仕える。　案　札。文書。書類。「籍」も同じ意味。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　かつは

1　すぐに　　2　一方で　　3　そのうえ　　4　しっかり

5　ちょっと

b　さだめて

1　必ず　　2　決して　　3　昔から　　4　おそらく

5　どちらかは

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、大和の国の吉野の山に一つの山寺あり。海部の峰といふ。阿倍の天皇の御代に、一人の僧ありけり。かの山寺にとしごろ住す。清浄にして仏の道を行ふ。しかる間に、この聖人身に病ありて、身疲れ力弱くして起き居ること思ひのごとくにあらず。また、飲食心にかなはずして命存しがたし。しかるに、聖人の思はく、「我身に病ありて道を修するにたへず。病を癒えしめて快く行はむ。ただし、病を癒えしむることは、伝へ聞く、肉食に過ぎたるはなかんなり。しかれば、我魚を食せむ。ア[illegible]これ重き罪にあらず[illegible]」と思ひて、ひそかに弟子に語りていはく、「我病あるによりて、魚を食して命を存せむと思ふ。汝魚を求めて我に食はしめよ」と。

弟子これを聞きて、たちまちに紀伊の国の海の辺に一人の童子を遣はして魚を買はしむ。童子かの浦に行きて[a]あざやかなるなよし八隻を買ひ取りて、小さき櫃（ひつ）に入れて帰り来る間、道にして、もとより童子を相知れる男三人会ひぬ。男童子に問ひていはく、「汝が持ちたる物は、これ何物ぞ」と。童子これを聞きて、これ魚なりといはむことをすこぶる憚り思ひて、ただ口に任せて、「これは法花経なり」と答ふ。しかるに、男見るに、この小さき櫃より汁垂りて臭き香あり。[b]すでにこれ魚なり。しかれば、男のいはく、「それ経にあらず。まさしく魚なり」と。童、「なほ経なり」とあらそひて行き、具して行くに、一つの市の中に至りぬ。男等ここにやすんで、童を留めて責めていはく、「汝が持ちたる物は、なほ経にはあらず。まさしく魚なり」と。童は、「なほ魚にはあらず。経なり」といふ。男等これを疑ひて、「箱を開きて見む」といふ。童開かじとすれども、男等あながちに責めて開かしむ。童恥ぢ思ふことかぎりなし。しかるに、箱の内を見れば、法花経八巻まします。男等これを見て、恐れ怪しんで去りぬ。童も奇異なりと思ひて、喜びて行く。

この男の中に一人ありて、なほこのことを怪しんで、「これを見あらはさむ」と思ひて、うかがひて童の後に立ちて行く。童すでに山寺に至りて、師に向かひてつぶさにこのことのあり様を語る。師これを聞きて、一度は怪しび、一度は喜ぶ。「これひとへに天の我を助けて守護し給へりけるなり」と知りぬ。その後、聖人すでにこの魚を食するに、このうかがひて来れる一人の男、山寺に至りてこれを見て、聖人に向かひて五体を地に投げて、聖人に申してまうさく、「まことにこれ魚のす

がたなりといへども、聖人の食物とあるがゆゑに化して経となれり。愚痴邪見にして因果を知らざるによりて、このことを疑ひて度々責め悩ましけり。願はくは聖人この過(とが)を許し給へ。これより後は、聖人をもつて我が大師としてねむごろに恭敬供養したてまつらむ」といひて、ィ泣く泣く帰りぬ。その後は、この男聖人のために大檀越となりて、常に山寺に行きて心をいたして供養しけり。これ奇異のことなり。

これを思ふに、仏法を修行して身を助けむがためには、もろもろの毒を食ふといふとも返りて薬となる、もろもろの肉を食ふといふとも罪を犯すにあらずと知るべし。

しかれば、魚もたちまちに化して経となれるなり。ゆめゆめかくのごとくならむことを誘るべからずとなむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』）

注　なよし八隻　鰡(ぼら)八匹。　大檀越　多額の金品などを寺に寄進する有力な信者。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あざやかなる

1　香りがいい　2　味がいい　3　活きがいい　4　上等な　5　高価な

b　すでに

1　かつて　2　まさか　3　おそらく　4　まぎれもなく　5　なんとなく

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

田舎ほとりの一座は、昼つかたに過ぎ、遅きは未の刻などに退散す。これよりいささかも時移り侍れば、道ならぬやうにつぶめく人侍り。いかさまにあるべきやらむ。

人の語り侍りしは、二条の太閤さまなどのやむごとなき御一座は、毎々朝より深更におよび侍りしとなり。そればかりこそ侍らずとも、朝天より日晡にいたらざらむ一座は心にくくも侍らず。さやうにあはあはしく、満座の心をも恥ぢず申しつけ侍る人は、「沈思してもいかばかりのことか侍る。とざまかうざま案じたるもおなじことなり。ア沈思の人の句、ながながが心を得ず」など申し侍るなり。言葉は心の使ひと申せば、イこれらの人の胸のうち、つたなく、さわがしくこそおぼえ侍れ。

秀逸と申せばとて、[a]あながちに別のことにあらず。心をも細く艶にのどめて、世のあはれをも深く思ひ入れたる人の胸より出でたる句なるべし。されば、一字二字のかはりなり。しな・いう・たけ・やせ・さむく・らうらうしく、いはぬ心の匂ひあるは、閑人の口より出づるものなり。後京極摂政御歌、

人すまぬ不破の関屋の板びさし荒れにしのちはただ秋の風

この「ただ」の二字は、昔より玄妙不可説のことに侍るとかや。かの[b]かしこき和尚も、「誠におきがたきことなり。かの御胸にありけることよ。あな恐ろし」など仰せ給ひし。さては、迷へると悟れるとのさかひなり。堪能の人の句は、心とらけて、胸より出づるゆゑに、時もうつり日も暮れて侍るにや。不堪の人の句は、舌の上より出でぬるゆゑに片時なるらむ。劫は入りて耳はなきゆゑに、達者にのみなる人おほしとなり。

（心敬『ささめごと』）

注

一座　和歌の上の句と下の句を二人以上が交互によむ連歌を行う集い。

二条の太閤さま　二条良基のこと。

日晡　日暮れ。

しな・いう・たけ・やせ・さむく・らうらうしく　品位や風格、趣など、歌を評するときに使う用語。

和尚　歌人、正徹のこと。

劫は入りて耳はなき　長年にわたって経験を積んでいるだけで、鑑賞力がない。

設　問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あながちに

1　おりしも　　2　まだしも　　3　必ずしも　　4　もしも

5　少しも

b　かしこき

1　尊敬すべき　　2　身分が高い　　3　弁が立つ　　4　頑固な

5　心やさしい

次の文章は、明徳二年(一三九一)に、将軍足利義満に対して山名播磨守満幸らが起こした反乱を描いた軍記物語の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

さてもうたてかりしは、先年御所様に召し使はれける武田下条といふ者あり。

一旦昵近(じつきん)申しける間、上様の御覚えよかりければ、賞の甚だしきにおごつて、心中の不義もありけるにや、御所様御覧じ限らせ給ひて御追放ありければ、連々に嘆き申しけれども、つひに御免もなくして隠居したりけるが、今度の合戦をよき[a]便りありと心得て、御免もなきに便宜の勢に馳せ加はりて、内野の合戦を見物し居たるところに、出雲の国の住人塩冶信濃守といひしはこの下条がために年来の小舅(こじうと)なり。播州の手にあつて、ことの様をみるに、始終はかばかしからじと思ひければ、十二月二十七日峰の堂より姉婿の下条がもとへ、内々降参の志あるよしを申し送りたりけるに、「今はこと急になりて内々申し沙汰のこともかなふまじ。ア だいくさの日思ひの外に行き合ひたるほどにて申し沙汰すべし」と返事したりければ、互ひに内野口にて心にかけて尋ねけるほどに、合戦にうち負けて播州引き給ひける時分、気勢にかけまぎれてまはりけるが、乗りたる馬、急所を切られてはたらかざりけるほどに、いかがすべきと思ひけるところに、下条にきと見合ひけり。

塩冶申しけるは、「申し談じつる道も今はいらぬところなり。これにて腹を切るべし。この間の情けには雑人に引き散らさせずして、恥を隠してたびてんや」と申しければ、下条「さることや侍るべき。御分一人のことは勲功にも申しかへて助け申すべし。我が馬の後に乗れ」と申しければ、塩冶異議にも及ばずして、下条が馬の三頭(づ)に乗り直らんとするところに、イ 目にあまるほどの大男、鎧着ながら二人まで疲れたる馬に乗りたりければ、なじかは馬もこらふべき。

なづきを捨てて跳ねければ、二人ながら跳ね落とされて、すでに御方に討たれんとしけるところに、下条心とく起き直りて、とかく言ひ逃れて、塩冶が鎧を脱がせて、二人馬に乗り、御所の御陣へ走り参りて申しけるは、「御勘気の下条こそ山名播磨守の兵塩冶信濃守と申す者を組みて生け捕つて参りて候へ。この忠賞にはこの間の御不審を御免かうむりて、いよいよ忠節をいたすべき」よしを申しければ、いまだ御免もなきに参じて直に忠だてを申す条、奇怪なる者かなと思し召さるれども、戦場なれば力なしと思し召し許されて、召人(めしうど)をば、当職なれば赤松上総介のかたへ渡すべきよし管領より仰せ出だされしかば、さしも頼みて出でたりける小舅を召人になして縄をかけ、侍所へ渡しければ、塩冶これを聞きて申しけるは、「播磨守の芳恩も忘るべきにてはなけれども、上へ向け申されて、逆罪の弓を引き給へば、始

終は亡び給ふべしと思ひ定めて、この間内々下条に申し談じ降参のよしにて参りたれば、戦場において組み伏せて生け捕るよし申しつるこそ返す返すも無念なれ」と諸人の前にて申しければ、「さては下条うたてしきことをしたりけり。弓矢取る身は相互ひに降参すれば、助くるも助けらるるもaならひなり。まして所縁の中ならばあまりにざんなし」と諸人の沙汰になりしかば、はたして上の御耳に入り、いよいよ御勘気深くなりて、立ち寄る方もなかりしかば、正月二日の暮れほどに、もとどり切つて入道し、禅僧の衣の姿になり、泣く泣く都を迷ひ出でて、行方知らずなりしこそうたてかりしことどもなれ。

（『明徳記』）

注

御所様・上様・上　いずれも足利義満のことをいう。

昵近　貴人のそば近く仕えること。

内野　平安京大内裏が荒れ果てた後にできた野原。

播州の手にあつて　山名播磨守の軍勢に加わって。

三頭　背中のやや高くなった部分。

なづきを捨てて　頭を激しく振って。

召人　囚人。

当職　担当者。

管領　将軍の補佐役。

ざんなし　むごい。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a 便り

1 依頼

2 縁故

3 音信

4 配慮

5 機会

b ならひ

1 師の教え

2 世の常

3 仏の導き

4 時の運

5 人の噂

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

見しは今、庭に植ゑ置く木立色々ありといへども椿にますはあらじ。そのかみ勧学の文にも「草に霊芝、木に椿あり」とほめられたり。椿には異名多し。やつをの椿、浜椿、玉椿、はた山椿、八千とせ椿、春椿、かた山椿、山嶺椿、つらつら椿、いづれも古歌に見えたり。「川上のつらつら椿つらつらに見れどもあかぬ巨勢の春野は」と詠めり。このつらつら椿の説さまざまに記せり。当世皆人の好み給ひけるは、白玉こそ面白けれと尋ね求めて植うる。「白玉椿八千代へて」と詠ぜり。

されば当年の春、白き花の咲きたる椿一本持て来て売らんといふ。本両替町に甚兵衛といふ人、思ひまうけしことなりと、この白玉椿を買ひ取り、これこそ俗にいふまことの掘り出しなりとて庭に植うる。雨ふりければやがて花房おつる。惜しきものかなとて取りあげ見れば、花も咲かざる木に白玉をそくいひにて付けたり。たばかりにあひぬることの無念さよと思ふところへ、二十日程過ぎ、その花売り来て「ア白玉を召すならばまた持て参らん」といふ。甚兵衛出であひて後、「花売り盗人よ、しやつのがすな」とひしと捕らへ、「よくｂいましめよ」「縄をかけよ」「御奉行所へつれてゆかん」とひしめきけり。

となりの正兵衛といふ人、これを聞き、「いかに甚兵衛、腹立はことわりなり。もつともこの者は盗人なり。しかれども花盗人なれば華奢（きやしや）なる人にあらずや。さてこの者が花売り盗人ならば、買うたる甚兵衛も花の香盗人よ、それいかにとなればいかがなるか、これ華奢の賊」と問ふ。答へていはく「『イ水をきくすれば月手にあり、花をろうすれば香ころもにみつ』と古人もいへり。また、歌人は『香をだに盗め春の山風』と詠ぜり。花盗人ｃやさしき人なり」といへば、甚兵衛聞きて、「げに水をきくすれば月の威光を盗み、花をろうすれば花の香を盗む。いづれも月花の賊なり。この道理に負けたり」と、花盗人の縄をゆるされたり。

（三浦茂正『慶長見聞集』）

注

白玉椿八千代へて　『後拾遺和歌集』に「君が世は白玉椿八千代とも何かかぞへむ限りなければ」とある。

そくいひ　糊のこと。

香をだに盗め春の山風　『古今和歌集』に「花の色はかすみにこめて見せずとも香をだに盗め春の山風」とある。

設　問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　いましめよ

1　確認せよ　　2　謝罪せよ　　3　捕縛せよ　　4　徹底せよ　　5　決意せよ

b　やさしき

1　聡明な　　2　軽快な　　3　優美な　　4　温厚な　　5　柔和な

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、比叡の山の西塔に貞遠といふ僧ありけり。もと三河の国の人なり。幼くして生国を去りて比叡山に登りて出家して受戒して後、師に随ひて法花経を受け習ひて、昼夜に読誦する間に、皆、[a]空に浮かめおぼえにけり。極めて口早くして、人の一巻を誦する程に、二、三部をぞ誦しける。しかれば、一日、三十、四十部をぞ誦しける。また、真言の秘法を受け習ひて、日ごとに法を行ふこと断たず。おほよそ、三業を調へて六根に犯すところなし。

しかる間、長大に成りて後、たちまちに本山を去りて、生国に下りて、先祖の堂のありけるに籠り居てァ「静かに後世の勤めを営まむ」と思ひ得て、下りてある間に、要用あるに依りて、馬に乗りて里に出づるほどに、途中にしてその国の国司某といふ人、館を出でて行く間に、貞遠に会ひぬ。守、貞遠を見て、馬より下りざることをとがめて、人を以つて貞遠を馬より引き落とさしめて打つ。守、貞遠を召し寄せて恥ぢしめていはく、「汝は誰人ぞ。国の内の貴賤の僧俗、皆国司に随ふべきものなり。しかるに汝何に依りて、我に乗合をして無礼を致せるぞ」と怒りて、貞遠を馬の前に追ひ立てて、館にゐて行きて、すなはち御厩に下して、人を付けて 接躁(りようりやく) せしむ。貞遠我が果報の拙きことを観じて、心を致して法花経を誦す。

その夜の守の夢に、普賢菩薩の像を白象に乗らしめて、御厩に下して置きたり。ィその門の前に、また他の普賢菩薩、それも白象に乗りて、光を放ちて奥に向かひて本の普賢の捕らへ戒められ給へることをとぶらひ給ふと見て、夢覚めぬ。守大きに驚き恐れて、夜中に人を呼びて僧をゆるさしめつ。[b]すなはち僧を呼びて、たちまちに浄き畳に据ゑて、守向かひて問ひていはく、「聖人いかなる勤めかします」と。貞遠答へていはく、「我別の勤めなし。ただ年少の時より法花経をたもちて、昼夜に読誦す」と。守これを聞きていよいよ驚き歎きていはく、「凡夫の身、拙く愚かなるが故に、聖人の徳行を知らずして悩まし煩はし奉りけり。願はくはこの咎(とが)をゆるし給へ」といひて、見るところの夢を語る。

その後は、殊に帰依して、館に請じ入れて、日の供を宛て衣服を与へて、丁寧に供養しけり。国の内の人、このことを伝へて聞きて貴び敬ひけり。

しかれば、たとひ重き咎ありといふとも、僧をばあながちに接躁すべからずとなむ語り伝へたるとや。

注

法花経　八巻全体を一部と数える。

三業を調へて六根に犯すところなし　身・口・意を清潔に保ち、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの器官において戒を破ることがない。

捿躁　乱暴して痛めつけること。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　空に

1　天上に　　2　無心に　　3　尊敬して　　4　暗記して

5　浮遊して

b　すなはち

1　すぐに　　2　いいかえれば　　3　しばらくして

4　ついに　　5　そっと

（『今昔物語集』）

次の文章は、中世に編まれた聖徳太子の伝記の一節で、太子が九歳の時の出来事を記した箇所である。これを読んで、後の設問に答えよ。

夏六月のころ、一つの奇特はべり。摂津国難波浦の洲崎に家をつくり、心をすまし、歌を詠ずる人あり。この人、わが朝にはじめて今様を詠じ出だしける人なり。その姓名をば土師連八島と申すなり。わざと海辺を住所として昼はひねむすにうたひ暮らし、夜は夜もすがらうたひ明かす。松ふく風に琴をしらべ調子とし、岸打つ波を鼓として、この歌の音曲をたすけ、洲崎の千鳥の友よぶ声までも心をすます。[a]曲あるみぎりなり。かくのごとくふく風たつ波によそへていづれも流水の弁舌とどこほりなくおもしろく今様に詠じはべり。その声たへにしてまことにおもしろくはべりけるあひだ、夜な夜なに天より変化の物のあまくだり、その色五色にしてさうのまなこは明星のごとく光をはなてる鬼神にてはべりけり。八島が家のいらかのうへにゐて、歌の曲を聞きはべるなり。鬼神は歌の曲を聞いて感にたへず、ともに声を出だしてうたひはべれば、おもしろきことたとへんかたもなかりけり。天の明け方にはかきけすやうにうせはべりけり。[ア]人を出だして行末を見せしむれば、光をはなつて難波浦より南三十余町虚空にとび、住吉浦の海の中へとびいりはべり。

この鬼神さまざまの禁忌の歌をうたひはべれば、八島あやしくおもひ、このこと国の大事天下の御たたりなりとて、内裏に参じ、このよしを①奏聞す。時のみかど敏達天皇もろもろの臣下を召して、「先代の御代にかやうのことはべりけるなり。確かに例文を引きかんがへ申さるべし」と御たづねありければ、おのおの先規の例文を②引かるるといへども分明ならず。その時天皇、まことにや聖徳太子こそ未前方来の徳をそなへて、一切のことにおいてあきらかに③しろしめすことなれば、このことを太子に④とひたてまつらんとおぼしめして、太子にたづねたてまつりたまひければ、太子まことに鏡にかけたまふごとく、くもりもなくかんがへ奏したまへり。

「これは空に住む熒惑星（けいこくしやう）と申す星にてはべり。かの星、もし下界の人間にいくさ兵乱おこり、飢渇不熟等の災難出現せんとては、その星童子のかたちを現じて人間にあまくだり、世の中のをさなきわらはべの中にまじはつて、いまだきたらざる先に善悪のことを歌につくりて披露しはべるものなり。[イ]天に口なし、人のさへづりをもつてことどすといへり。もつてのほかの禁忌の歌どもをうたひけり。天下の乱れ日本の大難出できたるべくはべり。一定東方より千島のえびすわが朝にせめきたつて王位ののぞみをなすべきにや、[b]いかさま明年の春三月の中をよくよく御つつしみあるべし」と御奏聞ましましければ、君も臣も東夷兵難のおそれ、太子の御知恵

のやんごとなくましますことをたつとみたてまつりたまふ。この君は内典外典ことごとく通達したまふのみならず、かくのごとく天の変化を知り、天文地理冥道までもよくきはめてあきらかに達したまひけるありがたさよ、と万人たつとみをなしたてまつりたまふなり。

（『聖徳太子伝』）

注

今様　流行歌謡の一種。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　曲

1　変化　　2　法悦　　3　強弱　　4　陰影　　5　興趣

b　いかさま

1　なぜ　　2　まして　　3　ぜひとも　　4　おごそかに　　5　わざとらしく

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

中ごろに京中に、身は豊かにして貪欲極まり無く、知恵才覚無くて、しかもまた音声わるく、口もきかずしてある説法者一人候ひき。心請用の不浄説法は隙無くしけれども、人たのむ事努力なかりける間、もとよりもちたる者なれば、京中のあき地を六所かひて、六人の尼を語らひて、彼の地を一つづつとらせて、「我が説法の時、必ず聴聞につらなはりて、なきてたべ」といひければ、六人の尼思ふやう、ア心ならぬねをばいかがなくべきと思へども、この尼どもにさせる住所もなくて、うかれありく尼なれば、各々一つづつ主付きつ。

さてかの僧の説法の時は、必ず聴聞衆につらなりてなきけるに、ある時の説法に、六人の尼の中に、一人の尼、いまだ説法の始めなるに、ことさら声もをしまず、けたたましげになきけり。導師思ふやう、さいひたればとて、時をもしらず、機嫌もなく、早くなくものかなと思ひけり。聴聞の人々も、いかなる事ぞと思ひて、目も心も[a]あきれけり。あるは心になげきのあるかと思ひ、あるはかかる説法のにはをふむ事今生の楽しみにあらずと思ひてなくかと思ひ、あるは説法と思へばかねてたつとくおぼふる故になくかと思ひ、あるは[b]けしからず思ひて、にくむ者もあり、そしる者もありけり。

さてこの尼、説法のなかばばかりに、つい立ちて、たからかにいはく、「導師の御房きこしめし候へ。イ尼一人にはいとまだび候へ。さしたる悪しき事候ふ。かいはげみてよくなきて候ふぞ。しかも尼が地は一つ戸主(へぬし)と申しながら、よの尼御前たちの地よりも、はるかに少なく候ふ」といひて立ちぬ。この導師この事を聞くに、さすが人なれば身より火をいだす。諸人のききをおどろかす。

これすなはち十悪のいたす所なり。よくよく慚愧して、念仏を唱ふべしと云々。

（無住『雑談集』）

注

心請用の不浄説法　名利のための説法。

十悪　仏教における貪欲など十の罪悪のこと。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あきれ

1　呆然として　　2　愛想が尽き　　3　怒気を表し　　4　嫌気がさし

5　軽蔑を込め

b　けしからず

1　たいしたこともない　　2　つまらない

3　安心できない　　4　すばらしい

5　まっとうでない

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

同じ御時、小川滝口定継といふ。[a]御気色よきぬし侍りけり。四藺座にて、上藺を越して久しく奉公して候ひけり。

名月の夜、主上南殿に出御ありて、御遊ありけるに、かの定継が下人、黒戸のかたの御厩（うまや）の辺りに、いねぶりして候ひけるが、にはかに走り立ちて、中将実忠朝臣の綾小路の家へ、さかいきになりて走り向かひていふやう、「ただいま内裏へ、きと参らせたまへ。なほなほ、きときと」と①いひけり。

中将、さしもの急事、何ごとにかとあやしう思ひて、「たが奉行ぞ」と②尋ねられければ、「[ア]小川滝口殿のうけたまはらせたまひて候ふ」といひて、やがて走りかへりけるほどに、中将あわてさわぎて、はせ参りてうかがひければ、ただいま南殿にわたらせたまふよし、女房申せば、御後のかたにて[b]おとなふに、「たそ」と御尋ねあれば、実忠朝臣③めされ候ひつるほどに参りたるよし申しければ、[イ]おほかたさることなければ、ふしぎにおぼしめして、くはしく御尋ねありければ、使ひのいひつるごとく、定継がうけたまはるとて、やがてその下人にて候ふよし④申しければ、定継うけたまはりて相尋ぬるに、はやくかの下人ねぼけてかくめしたりけるなり。

あまりに走りけるほどに、二条油小路を南へかいおりける時、築地の角に走りあたりて、顔さき突き欠きてありけり。

そのよしを申し上げければ、比興のさたにてやみにけり。

定継が申しけるは、「これは勝事にて候ふ。ねぼけ候はんからに、さることやはつかうまつるべき。まさかさまのくせごとをもぞ引き出だし候ふ」とて、この下人をやがてつかはずなりにけり。

（橘成季『古今著聞集』）

注

同じ御時　順徳天皇の在位のとき。

滝口　警備の武士。

四藹座　第四番目の地位。　　黒戸　清涼殿の北、滝口の詰所近くの部屋。

さかいきになりて　息せききって。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　御気色

1　御趣味　　2　御容貌　　3　御意向　　4　御信任　　5　御人柄

b　おとなふ

1　問いただす　　2　音を立てる　　3　大人びる　　4　手紙を出す　　5　時を告げる

次の文章は、吉備大臣が唐に渡って学問をしていた時、才能を妬んだ唐の人々に、生還するのが難しいといわれる楼に閉じ込められ、生前に大臣だった鬼と出会う場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

夜中ばかりにはなるらむと思ふほどに、雨降り、風吹きなどして、身の毛だちておぼゆるに、乾の方より、鬼うかがひ来たる。吉備、身を隠す封(ふ)をつくりて、鬼に見えずながら、吉備のいはく、「いかなるものぞ。我はこれ日本国の王の御使なり。『王事(わうじもろ)監きこと靡(な)し』、鬼何ぞうかがふや」といふに、鬼答へていはく、「尤(もと)もうれしきことなり。我も日本国の遣唐使にて渡れりしものなり。物語せむと思ふ」といふに、吉備答へていはく、「あはむと思はば、鬼のかたちを変へて来たるべし」といふに、鬼帰り去りて、衣冠をして出で来たり。吉備あひぬ。鬼まづいはく、「我はこれ日本の遣唐使なり。我が子孫安倍氏侍りや。このごときがむと思ふに、今にかなはぬなり。我は大臣にて来たりて侍りたりしに、この楼にのぼせられて、食物を与へざりしかば、うゑ死にてかかる鬼となりて、この楼に住み侍るなり。ア人を害せむ心なけれども、我が姿を見るにたへずして死にあひたるなり。我が国のことを問はむとするにも、答ふることなし。けふ幸ひに貴下にあひ奉りたり。よろこぶところなり。我が子孫は官位は侍りや」といふ。大臣くはしくありさまを語るを聞きて、鬼大きによろこびていはく、「この恩には、この国のことを、みな語り申さむと思ふなり」といふ。大臣よろこびて、「ィ尤も大切なり」といふに、夜明けなむとすれば、鬼帰りぬ。

その朝に、楼を開きて、唐人食物をもて来たるに、大臣ことなくてあるをみて、唐人いよいよ怪しむ。「またこの日本の使、才能、人に過ぎたり。書をよませてそのあやまりを笑はむ」といふなり。このよしを鬼来て告ぐ。吉備「いかなる書ぞ」と問ふに、鬼のいはく、「この国にきはめてよみにくき書なり。文選といふなり」。大臣のいはく、「その書伝へ聞きて、語り給ひてむや」といふに、鬼「我はかなはじ。貴下を相具して、かの沙汰の所へいたりて、聞かせむと思ふなり。それに、楼を閉ぢたるはいかがして出で給はむずる」といふに、吉備のいはく、「我は飛行自在の術を知れり」といひて、楼の隙よりともに出でて、文選講ずる帝王の宮にいたりぬ。三十人の博士、よもすがらよむを聞きて帰りぬ。鬼のいはく、「聞き得たりや」。大臣のいはく、「聞きつ。ふるき暦十余巻[a]たづねて与へてむや」といふに、鬼すなはち求めて与へつ。吉備これを得て、文選の上帙十巻が端々を、三、四枚づつ書きて楼のうちにやり散らしつ。

そののち二両日を経て、文選三十巻を具して、博士一人勅使として楼に来たりてこころみむとするに、文選の端々を散らしおきたるを見て、唐人怪しみていはく、「この書はいづれの所に侍りけるぞや」と問へば、「この書は我が日本国に文選といひて、人のみなbくちづけたる書なり」といふ。唐人おどろきてもて帰るときに、吉備のいはく、「我がもちたる本に見合はせむ」といひて、文選をば借りとりつ。

（『吉備大臣入唐絵巻』）

注

王事盬（わうじもろ）きこと靡（な）し　『詩経』にある成句。国王の関与することは堅固であって、もろく敗れることはないという意味。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　たづね

1　探し　　2　調べ　　3　問い　　4　訪れ　　5　聞き

b　くちづけ

1　読みとばし　　2　習い始め　　3　廃れかけ　　4　忘れはて

5　言い慣れ

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

勅使の弁は薬師寺の法会に参列して帰京する途中、奈良坂で一行の先頭集団が持つ衣櫃（きぬびつ）を盗人に奪われたと知らされ、その対処を家来の久某に命じた。

それに仰せていはく、「汝馳せ行きて、矢頃を去りて、盗人に言ひかけて返り来たるべし。その言はむやうは、『盗人も人の物をせめてほしくすれば、ものの心は知りたらむ。公の御言を奉りて、御祈りの使ひとして、日頃薬師寺の大会（だいゑ）行ひて、今日内へ返り参りたまふ公の御使ひの衣櫃取りては、汝等ぱよき事ありてむや。その心を得て汝等取るべきなり』と峰に登りて叫びかけよ」と。

久某、弁の仰せを承りて馳せ行きて、峰にうち登りて声をあげて、遥かに盗人にかく仰せかく。盗人これを聞きて、「ｱこれ案内知らぬ旅人のつかうまつりたる事なり。その御衣櫃速やかに返し参る」と言ひて、制したりつる盗人どもは去りぬるに、向かひの峰に調度負ひて馬に乗りて立てる盗人の、「なほ取らむ」と思ひければ、「何しにゆるすぞ。ただとく追ひ立てて、奥ざまに行け」と声を高くして行ふに、他の盗人どもは、「やむごとなき人の御物取りてけり。ａよしなし」と思ひて、ゆるし申すままに、飛ぶがごとく逃げて行きぬるに、この「ゆるすな」と行ひつる馬の兵もあながちの盗人の逃ぐれば、「ｂやうのあるにや」と思ひて、馬を取りて返して逃ぐるほどに、遥かなる岸より馬を落としてさかさまに落ちぬれば、盗人腰を突き折りて立ち上がらずして臥せり。

久某その所に寄りて、枯れ枯れなる従者のありけるをもつて、盗人の弓胡籙（やなぐひ）を奪ひ取りて、盗人をば馬に引き乗せて、久某は盗人の弓胡籙を、盗人と衣櫃とをさきに立てて、奈良坂の北の口に出で来たるを、弁見れば、久某、者を搦めて馬に乗せて、従者をもつて口を引かせて、衣櫃は本の夫（ぶ）荷ひて出で来たり。久某、胡籙を脇に挟みてあり。

これを見てあさましく思ひて、「こはいかなる事ぞ」と問へば、久某いはく、「仰せのごとくに盗人に申しかくれば、道理とや思ひ渡りつらむ、御衣櫃をゆるして盗人皆逃げてまかりぬる。この搦めたる盗人の奴の『ゆるすまじ。なほ追ひもて行け』と行ひ候ひつるにあながちの盗人の皆逃げてまかりつれば、この男も、『一人

はよしなし』とや思ひ候ひつらむ、馬を押し返して逃げ候ひつる程に、遥かなる片岸より馬をまろばして落ち、腰を突き折りて臥して候ひつれば、まかり寄りて弓胡籙を奪ひ取りて、『重き犯しをなす奴は、かかる目を見るにはあらずや』と仰せかけて、捕らへて馬に引き乗せてゐて参りたるなり」と。

弁これを聞くに、「いとあさまし。盗人の体を見れば、若くして年三十ばかりなるが、いと恐ろしげなり。久某は年七十になりて風にあひたらむ尼をだに搦むべきにあらぬに、かく搦めて来たれば、まことに希有の事なり。これ他にあらず、薬師寺の三宝の助けたまふなり」と思ふに、たふとき事限りなし。ただし、ィ「この盗人を京にゐて上りて、検非違使にたまふべしといへども、宿世の敵にあらねば、無益なり」と思ひて、盗人を前に召し出でては、往還の多くの人に顔を見せて、弓胡籙をば「これをもつて悪事をせむに罪なり」と言ひて、散々に折り砕きて捨てつ。盗人をば馬をも具してゆるせれども、腰を動かさずして、馬に乗りても行かずして臥せれば、往還の人皆寄りて見ののしりけり。

弁は盗人に仰せかけていはく、「汝今よりかかる犯しをなす事なかれ。すべからくゐて上りて検非違使にたまふべしといへども、罪の得ぬべければゆるしつるなり」と仰せかけて、京に上りぬ。盗人はひねもす奈良坂の口に臥して、夜になりていかがしけむ、その夜逃げて失せにけり。

しかれば、かくのごとき盗人にあふといへども、三宝の加護あれば、おのづからかくぞありける、となむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』）

注

矢頃　矢の射程距離。

調度　弓矢などの武具。

胡籙　矢を入れて背に負う武具。

風　風邪などの病い。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　よしなし

b

やう

1 有様

2 方法

3 前例

4 事情

5 所用

1 具合が悪い

2 縁起が悪い

3 手段がない

4 利益がない

5 理由がない

次の文章は、阿仏尼『十六夜日記』に材をとった作品の一節である。夫・藤原為家の死後、遺産をめぐる訴訟のため、阿仏は鎌倉に下り、しばらくそこに滞在することになった。これを読んで、後の設問に答えよ。

さてここにしばらくおはして、鎌倉の公事ども聞き給ふに、まことに世のまつりごとつかさどり給ふとて、天が下の人々高きも賤しきも集まりて、権門の門に市をなせり。

ここに執政のゆかりにつきて、よきたよりありければ、ひそかにことのやうをいひ入れければ、よにあはれにとぶらひて、「気色をうかがひて沙汰にあづかり給へ」といふも頼もしく、ちからづきてぞ見給ひにける。

ア さるに心許しで、光陰送り給へるほどに、その年もはやうち暮れて、□春にもなりゆけば、東風吹く風もやはらかに、のどけき空にうぐひすのうら若き初声を軒端の梅におとづれて上枝をつたふもいとやさし。懸樋（かけひ）のつららとけぬれば、ゆく水の音ものどけくて、[a]むすぶもやすき心地せり。

A　人こころ懸樋の水にあるならば世はすぐさまにことや通らん

かかるほどに、君の北の方きこしめして、「あなあはれや。子を思ふ道には身の苦しびをも顧みず、はるばると東の奥に下り給ふことのはかなさよ。このみなし子の父は世に名を留めし和歌の秀者にて、みかどの御宝と聞こえし。イかかる人のあとなればいかでか遺跡を絶えしはてんとはおぼしすつべき。かひがひしくも足弱の身として東の旅におもむき給ふことこそ不憫にはおぼゆれ」とて、さまざまの物ども贈らせ給ひて、つねに訪はせ給ふぞありがたき。

ある時、侍従の局を御使にて御消息ありて、[b]奥に、

子を思ふ道には迷ふ親の身のそこはかとなくものや思はじ

「まことにあはれに訪はせ給ふもいとありがたし」とて、やがて御返し侍りけり。

かひもなき母を頼りに残りける子の身思へばあはれ知れ君

この御返しを御覧じて、不慣さはいよいよまさり給ふとなん聞こゆ。

（『阿仏東下り』）

注

公事　税金や労働負担、民事訴訟に関することがらの総称。

君の北の方　鎌倉将軍の奥方。

侍従の局　将軍の奥方に仕える女房。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　むすぶ

1　とめる　　2　すくう　　3　ながれる　　4　あわせる　　5　かたちづくる

b　奥

1　末尾　　2　屋内　　3　行く末　　4　心の内　　5　貴人の妻

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

さみだれの晴れ間ある夜、れいのたどたどしからで越えくるに、山のたむけ過ぐるほど、草たかく茂りあひて、風そよげるよと見る見る、いはほなりと見しもの、むくむくと起きあがりて、こなたざまにむかふを見れば、あないみじ、あなおそろし、大口の真神といふものなりけり。「あなや」といへど、人げとほければ、いかがはせん。ただわななくわななく、しりへにゐざるを、神ゆるすまじき眼つきして、くひつくとぞ見る。

かぎりなりと思ひて、このまへにうつ伏し、額に手をすりあはせて、いとかなしき声して、「大神聞こしめせ。生きての世に、命ばかりいつくしきものはあらぬを、それにかへんものは、思ふ男にあふことのうれしきなり。海人の子なれどたをやめなるを、神の占め給ふさがしき岩根ふみ越えて、夜とも昼ともわかずいきかふなん、身を[a]あたらしとにもあらず。されど道の空にてくはれんことのくちをしき。男のもとにいきて帰らんほど、しばし給へ。避き道だになきものから、明けぬさきにここにまうでて、必ず奉らん。神にてましませば、偽るともはたのがるまじきを」と、国の守に訴へごと申すがごとく、なくなくいふ。聞き入れたるにや、うちゆるび、くひつかんけしきなし。「さてこそたふとき御神にてましますれ。やがて奉らん」とて、はひはひもそこを逃れ去る。虎の口まぬがれしといふは、まさしうこのことなるべし。

さて男にあひて、このことうち出でんには、はたまずらを心して送らんに、うけひしことそむけりとて、男をもともにくらはんがいとほしき。ただなほざりにて別れんをと思ひ定めて、[A]またあふべきにあらねば、かぎりなりと思ふにぞ、さめざめとなく。男いぶかりて問へど、よくよく[b]ねんじてあかさず。ただ「母のおもき勘当にのたまへば、しばしはえこそ参らじ。さは浦よりをちにわすられなんことのかなしきこと」と、涙とどめかねたり。

男、さることいかで思ひしるべき。「あなはかなげ、[B]天の川瀬はへだつるとも、誰ゆゑにかみだれん。おのれひたすらに身をぬすみて、うとからず問ひゆかん。そも遠からぬほどに」と、いひなぐさめて別れぬ。

（『藤簍冊子』）

注

たむけ　峠。

勘当　叱責。

浦よりをちに　「みくまのの浦よりをちに漕ぐ舟の我をばよそにへだてつるかな」（新古今集・恋一）を踏まえる。

大口の真神　狼のこと。畏怖の対象として崇められている。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あたらし

1　卑しい　　2　好ましい　　3　美しい　　4　頼もしい　　5　惜しい

b　ねんじて

1　反抗して　　2　後悔して　　3　我慢して　　4　祈願して　　5　沈黙して

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、主計頭（かみ）にて小槻糸平といふ者ありけり。その子に算の先生なる者ありけり。名をば茂助となむいひける。主計頭忠臣が父、淡路守大夫史（さくわん）奉親が祖父なり。その茂助がいまだ若かりける程に、身の才極めて賢くして世に並びなかりければ、命あらば人に勝れてやむごとなくなりぬべき者なりければ、同じ程なる者ども、「いかでこれなくてもあれかし。これが出で立ちなば、主計・主税の頭・助（すけ）にも、大夫の史にも、異人（ことひと）はさらに競ふべきやうなきなめり。なり伝へ来たる孫なるに合はせて、かく才賢く、心ばへうるはしければ、ただ六位ながら、世に聞こえありて、おぼえ高くなりもてゆけば、なくてもあれかし」と思ふ人もあるにやあらむ。

しかる間、かの茂助が家に[a]さとしをなしたりければ、そのときのやむごとなき陰陽師に物を問ふに、極めて重く慎むべきよしを占ひたり。その慎むべき日どもを書き出だして取らせたりければ、その日は、門を強くさして物忌してゐたりけるに、かの敵に思ひける者は、しるしありける隠れ陰陽師をよく語らひて、かれが必ず死ぬべきわざどもをせさせける。このことする陰陽師の言はく、「かの人の物忌をしてゐたるは、慎むべき日にこそあるなれ。されば、その日呪ひあはせばぞしるしはあるべきなり。それに、[ア]おのれを具してその家におはして呼びたまへ。門は、物忌なればよも開けじ。ただ声をだに聞きてば、必ず呪ふしるしはありなむ」と。

しかれば、その人、その陰陽師を具してかれが家に行きて、門をおびたたしく叩きければ、下衆出で来て、「誰かこの御門をば叩くぞ」と問へば、「それがしが大切に申すべきことありて、参りたるなり」と、「いみじく固き物忌なりといふとも、門を細目に開けて入れたまへ。極めたる大切なり」と言はしむれば、この下衆返り入りて、「かくなむ」と言へば、「いとわりなきことかな。世にある人の身思はぬやはある。[イ]されば え開けて入れたてまつるまじ。さらに不用なり。とく帰りたまひね」と言はしめたれば、また言ひ入れしむるやう、「さらば、門をば開けたまはずといふとも、その遣戸より顔を差し出でたまへ。みづから聞こえむ」と。

その時に、天道の許しありて死ぬべき宿世やありけむ、「なにごとぞ」と言ひて、遣戸より顔を差し出でたれば、陰陽師その声を聞き、顔を見て、死ぬべきわざを、すべき限り呪ひつ。この具して会はむと言ふ人は、「いみじき大事言はむ」と言ひつれども、言ふべきこともおぼえざりければ、「ただ今田舎へまかる、そのよし申

さむと思ひて申しつるなり。されば入りたまひね」と言ひければ、茂助、「大事にもあらざりけることによりて物忌にかく人を呼び出でて、ｂ物もおぼえぬ主かな」と言ひて入りにけり。その夜より頭痛くなりてなやみて、三日といふに死にけり。

これを思ふに、物忌には、声を高くして人に聞かしむべからず。また、外より来たらむ人には、ゆめゆめ会ふべからず。このやうのわざする人のためには、それにつきて呪ふことなれば、極めておそろしきなり。宿報とはいひながらよく慎むべしとなむ、語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』）

注

隠れ陰陽師　公式の資格をもたない民間の陰陽師。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　さとし

1　導き　　2　便り　　3　祈り　　4　咎め　　5　兆し

b　物もおぼえぬ

1　屈託がない　　2　記憶がない　　3　見たことがない

4　分別がない　　5　予想がつかない

次の文章A・Bは、いずれも藤原家通の逸話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

A

長寛のころ、六角左衛門の督（かみ）家通、中将にて侍りけるに、仰せられて承香殿の梅を折らせられて、中宮の御方へまゐらせられて、内侍にたまはせけり。「ゆきて見ねど、をりて見るaよしを申すべし」と仰せられければ、すなはちもてまゐりて、そのよし申しければ、御返し、

（ア） 色も香もえならぬ梅の花なれや
家通朝臣帰りまゐりて、このよしを奏しければ、bやがて御返しつかまつるべきよし、仰せられければ、

（イ） にほひは千世もかはらざらなむ

B

永万元年九月十四日、五更（ごかう）におよびて、頭の亮（すけ）の書札とて、紙屋紙にたてぶみたる文を、頭の中将家通朝臣のもとへもてきたりけり。ひらきて見れば、紅の薄様に歌を書きたり。

（ウ） 名にたかきすぎぬるよはにてりまさるこよひの月を君は見じとや

筑前の内侍・伊予の内侍などのしわざにや、その使ひ、返事をとらで逃げ帰らむとしけるを、侍どもさとりて、門をさして出ださず。やがて紅の薄様に返しを書きてたまはせける。

（エ） いかでかは伏せ屋にとてもくまもなきこよひの月をながめざるべき

かくなむ書きて、もとのごとく紙屋紙にたてぶみて、使ひに返したびて「月をも御覧ぜで、御寝（よ）るなれば、この御文まゐらするにおよばず。もし急ぐことならば、あ

すもてまゐれ」といはせて返しければ、使ひしぶる気色ながらもて帰りにけり。

いと興あることなりかし。

（橘成季『古今著聞集』）

注

五更　寅の刻。午前三時から五時ごろ。

頭の亮　蔵人所の長官。藤原邦綱のこと。

紙屋紙　紙屋院という役所で漉（す）いた上質の紙。

たてぶみたる　立文にした、という意。立文は、包紙で縦に包んだ公式の書状。

紅の薄様　紅色で厚みの薄い紙。

設　問

（一）傍線〰〰〰a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　よし

1　理由　　2　趣旨　　3　手段　　4　縁故　　5　由緒

b　やがて

1　ともかく　　2　あわてて　　3　しばらくして　　4　あとで　　5　すぐに

【二十一】2018 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科

次の文章は、殺害された河津祐泰の遺体が、妻と二人の子（一萬、箱王）のいる自宅へ運ばれて三日後の場面から始まる。これを読んで、後の設問に答えよ。

黄泉幽冥の道は、一度さりて、二度とかへらぬならひなれば、力及ばず、泣く泣く送りいだし、夕べの煙となしにけり。女房、一つ煙とならんと、かなしみけり。伊東二郎申しけるは、「恩愛のわかれ、夫妻のなげき、[ア]いづれがおとるべきにはあらねども、うき世のならひ、力及ばずさうらふ。親におくれ、夫妻にわかるるたびごとに、命を失ふものならば、生老病死もあるべからず。わかれは人ごとの事なれども、思ひ過ぐれば、おのづから忘るる心のあるぞとよ。うきにつけても、身をまたくして、後生菩提をとぶらひたまへ」と、さまざまになぐさめければ、「[イ]まことにことわりなれども、さしあたりたるかなしさなれば」とて、もだえこがれけり。「夫のわかれは、昔も今もおもき所なり。わかれの涙、袂にとどまりてかわく間もなし。後先をも知らぬをさなき者どもにうちそへて、身さへただならず。様をかへんと思へども、尼の身にて産所の体も見ぐるし。又、淵川へしづまんと思ふにも、この身にて死しては、罪ふかかるべしときけば、とにもかくにも、女の身ほど心うきものはなし」とくどきたてて、おきふしに泣くよりほかの事ぞなき。一日片時も、ただしのぶべき身にてなかりしが、明けぬ暮れぬとする程に、五七日にもなりにけり。

父伊東二郎、さかさま事なれども、かの菩提をとぶらはんがために、出家して、六道にあてて三十六本の卒塔婆を造立供養したてまつる日、聴聞の貴賤男女、数をつくして来会する所に、五つになりける一萬が、父の墓目に鞭をとりそへて、「これは父の物」とてひつさげければ、母よびよせて、「亡き人の物をば持たぬ事ぞ。みなみなすてよ。[a]ゆく末はるかの者ぞかし。なんぢが父は、仏になりたまひて、極楽浄土にましますぞ。わらはもつひにはまゐるべし」といひければ、一萬よろこびて、「仏とは何ぞ。極楽とはいづくにあるぞや。いそぎましませ。われもゆかん」とせめければ、母は、いひやる方なくして卒塔婆の方に指をさし、「かれこそ、それよ」といひければ、一萬、弟の箱王が手をひき、「いざや、父のもとにまゐらん」といそぎけれども、箱王は三つになりければ、あゆむにはかもゆかず。いそぐ心に、弟をすて、卒塔婆の中を走りめぐり、むなしくかへりて、母の膝の上に倒れ伏して、「仏の中にも、わが父はましまさず」とて泣きければ、乳母も共に泣きゐたり。その日の説法の[b]みぎりより、一萬がふるまひにこそ、貴賤、袂をぬらしけれ。四十九日には、八塔を供養す。

（『曽我物語』）

注

黄泉幽冥　死後の世界。

伊東二郎　河津祐泰の父。

五七日　人の死後三十五日目。

六道　死後に人がおもむく六種の世界。

聴聞　僧の説法を聞くこと。

蟇目　犬追物や笠懸などの武技に用いる、対象を傷つけない鏑矢。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ゆく末

1　道程　　2　将来　　3　子孫　　4　浄土　　5　末路

b　みぎり

1　おり　　2　さわり　　3　くぎり　　4　はじまり　　5　おわり

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

親に隠して恋人の姫君を屋敷へ迎え入れていた中将は、親から右大臣の娘との結婚を命じられた。

中将、親の御前をば立ち給ひて、母屋の御簾のもとにて泣き明かし給ふ。いくほどもなき世に飽かぬ別れをいかにせん、夢に夢見る心地して我が御方へ帰り給ひぬ。姫君に寄り添ひて、「まかり出でし時は何とも候はざりつるが、胸の痛く候ふよ。押さへてたび候へ」とありければ、姫君[a]あさましげなる御気色にて、中将殿泣き給へば姫君も泣きむせみ給ふ。

中将涙を押し拭ひ、のたまふやう、「生死無常の習ひ、今に始めぬことなれば、[ア]もしこの胸大事にていかなることも候はんに、思ひや出で給ふべき」とのたまへば、姫君涙を押さへてのたまふやう、「十の年、二人の親に別れぬ。その時、乳母親子を頼みて十六になるまで育ちつれども、頼みし乳母にだにも離れぬ。今は御手に参る上はいかでか嘆かで候ふべき。親におくれし日よりして惜しからざりし黒髪を、このついでに剃り下ろし、深山、林に迷ひても御菩提をも祈り、父母も御身も我が身も、一つ蓮の身となりて、往生浄土の素懐をこそ祈り候はんずれ」とて泣き給へば、中将心の内におぼすやう、[イ]ただしのびたりとてもつひに隠れあるまじ、このこと知らせばやとおぼして、むせぶ涙を押しとどめ、「まことは胸の痛きにはあらず、親の召しつれば参りつるに、御前に召し据ゑて、『右大臣のもとへ行くべし』と仰せられければ、堪へぬ涙を押さふる袖に余れる、いかにせん」とぞのたまひける。その時、姫君、押さへ給へる胸をさし置きて、引き被きてぞ臥し給ふ。

やうやうありて起き直り涙の底にのたまふやう、「父にも母にもおくれぬ、頼みし乳母にも離れぬ。今は一円に頼み参らせて参り候ふ上は、神にも祈り仏にも申して、世に渡らせ給ひ候はんずることこそ嬉しくは候はんずれ。右大臣殿へ入らせ給はんずることはめでたきことなれば、つゆも恨み候はず。ただ我が身こそかほど果報なき身なれば、霜雪のやうに消えも失せたく候へども、雲を分けても上り得ず、さすがに淵の底にも沈まれず、かくてこそ候はんずれ。されば『御里に不思議のものあり』とて大臣殿の御咎め候ふとも、侍従とわらはと二人をば[b]さうなく追ひ出だし給ふなよ。いかならん片山里にも庵一つ結びて二人をば置かせ給へ。髪剃り下ろ

し墨染に身をやつし、亡き人の菩提をもとひ、また我が後世をも祈らばやと思ひ候ふ。御身は訪はせ給はずとも、居たらん所の庵を御形見と思はば、などかは慰まざるべき」と、かきくどき泣きしをれ給へば、中将殿これを聞き給ひて、御見目こそよからめ、御心ばへの優しさよ、惜しきかな惜しきかな、いくほどもなきこの世に物を思ふ悲しさよ、たちまちただ出家、遁世をもせばやとぞおぼしめしける。中将かくなん、

見つるより立ち離るべき方ぞなき身に添ふ影となりやしなまし

とのたまひければ、姫君泣く泣く、かくぞ、

別れても身に添ふ影はとまりなんいかなる山の奥に入るとも

（『しぐれ』）

注

一円に　ひたすら。

侍従　姫君に仕えている女性。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あさましげなる

1　みっともないような　　2　取り乱したような

3　嘆かわしいような　　4　思いがけないような

5　いじらしいような

b　さうなく

1　あてもなく

2　しかたなく

3　ためらいなく

4　あますところなく

5　ならびなく

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

唐の龍朔三年のころ、長安城のうち、通軌坊の三衛といふ官にあづかりける劉公信といふ人は、かくれもなき、軍法鍛錬したる人なり。その妻陳氏は、その母むなしくなりはべりしに、いたみ嘆くことといふばかりなし。かくて、病ひにとりむすび、陳氏にはか[A]に絶え入りたり。胸のほどいまだあたたかなりしかば、葬礼をば致さずして置きけり。陳氏は、すでに夢のごとくおぼえて、知らぬ道[1]におもむきけるに、一人の冥官来たりて陳氏を連れて地獄道に行き至る。もろもろの罪人内にありて、苦しみを受くるを見る。まことに心もことばも及ばれず。

かくのごとく、冥官ともろともに、ア[もろもろ]の地獄を見めぐるに、いづれも苦しみを受くることとりどりにして、たやすくおぼゆるばなし。ここ[2]にまた一つの地獄を見れば、石の大門固く閉ぢて鉄の扉はなはだ厳し。そのたけ一丈余りなる獄卒の鬼、すなはち門の両わきにあり。その形いふばかりなく恐ろしきが陳氏が来たれるを見て、目をいからかし、はたと睨んでいはく、「イ[汝いかなれば、この所へは来たりけるぞや]」と。かかりし所に、石の門扉おのづから開けたり。陳氏門の内を見入れたりければ、先立ちて死しける陳氏が母、この門の内にありて、さまざまの苦しみを受くることといふばかりなし。やうやく少しの間、炎しめり、罪人ども苦しみ少しゆるかせなり。陳氏この時、門に近づき母に会うて、物いふことを得たり。母泣く泣く娘に語りていはく、「汝、娑婆にかへり、必ず我がために法花経を写して、我に廻向して手向けよ。みづからつくる罪とがの報いとはいひながら、苦しみを受くることの悲しさよ」といふことばいまだ終はらざるに、石の門は閉ぢにけり。

それより冥官に連れられて、もとの道をめぐりかへるとおぼえてよみがへりぬ。人々喜ぶことかぎりなし。陳氏、涙とともに劉公信に向かつて、つぶさにこのことを語る。劉公信が妹の夫に超師子といふものを頼みて法花経を写さんとす。ここに一人の[a]手をよく書くものを雇ひけるに、このもの范良伯といふ人に頼まれて法花経一部書き写し、いまだ軸、表紙をつけず、まづこれを[b]参らすべきとて、銭二百文に売りけり。超師子、すなはち銭一貫文をもつて軸、表紙をつけて、劉公信に渡しけり。陳氏喜びて、僧を請じて母のために供養を述べて、これを手向けたり。陳氏また夢[3]に見けるやう、母来たりて娘陳氏に向かつて泣く泣く語りけるは、「すでに我がためにとて、法花経を求めて手向けたり。この経ゆゑに、我いよいよ大なる苦しみを受くるなり。獄卒の鬼、我を戒めていはく、『汝、何故にか范良伯が家に写し

供養すべき経をよこさま[4]に取りて我が物とする。これ[5]に何の功徳かあらん。その罪まことに少なからず』といひて、呵責して我が背中を打ち破る。汝このきずを見よ」とて、泣く泣くうしろを見せけるに、皮ただれ肉破れて膿（うみ）血流るるとおぼえて夢さめたり。陳氏悲しく思ひてさらに法花経を写す。かくて供養を遂げし夜の夢に母また来たりて、「汝我がために経を写せし功徳によりて、地獄を出でて天上に生まれたり。今こそ汝が大恩を被りけれ。この故に来たりてこのことを語る。汝ますます善根をいとなみ、信心厚くこの経を貴み行ずべし」とて、涙とともに別れて夢さめたり。

後につぶさに尋ね聞けば、范良伯があつらへて写せし経は、いまだその経を供養せざれども、功徳は先立ちて成就せり。これよこさまに買ひ求めし経なれば、かへつてそのとがを受けて功徳は得ざりけり。心よりしておこらざる善根は、その功徳の力少なしとおぼえたり。

（浅井了意『法花経利益物語』）

注

龍朔三年　西暦六六三年。

銭一貫文　銭一貫文は、一千文に相当する。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　手

1　美辞　　2　複製　　3　絵画　　4　漢詩　　5　文字

b　参らす

1　召し上げる　　2　参上する　　3　頂戴する　　4　差し上げる　　5　退出する

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

香炉の名、さまざまありといへども、和人、時の機転をもつて付けたることは信ずるに及ばず。さりながら、近代、都に「千鳥」といふ香炉あり。いみじう興あることにこそ侍れ。

六角貞頼、夜をこめて馬のすそを賀茂川にてひやさせけるが、舎人どもの申すやう、「寒風にさそはれて、いづくのかたの名香か、河原おもてに薫じけること、毎夜なる」よしいひけり。「さらば出でてきかむ」とて、明けぐれの折なりしに、小袖かづいてまかりけるが、げにも芝蘭の室に入るごとくなり。にほひしきりに近くなりぬるに、[a]おぼつかなげなるすがたしけるを、立ちより問ひけれども、いらへもせず。ァ「川風寒み」とうち詠じて、興にたへで前後もわかざりけるさまなり。「何人ぞ」と、しきりに問ひければ、うち驚きて、「大富と申す老翁なるが、夜々千鳥きくにこそ候へ。あまりさへ渡るゆゑに、香をもたき候ふ」よし語りけり。「[b]いみじきもののしわざや。明けなばわが館にきたれ」とて、貞頼はかへりけり。

明けければ、その日昼間も過ぎぬるに、かの館にまかりぬ。寄り付きの座より、これかれ色々の座敷を過ぎて、打橋、渡殿ゆきめぐり、厩(むまや)にまかりけるが、そこにある座敷の押板に、蕪(かぶら)一もと描きたる墨絵のありけるに、心をとめて、立ちかへることを忘れぬ。貞頼このよし聞きて、対面して、ィ「いかにして、上座の数軸の花鳥の名筆をばはやくうち過ぎて、この一軸に帰を忘じけるや」と、こころみしけるに、ほほゑみて、「申すにたえたり」とばかりにてありけり。「さらば昨夜の風情、古も今もきかざる興なり」と褒美して、「この絵は牧谿図なり。千貫を施すにこそ」とて出だしけり。翁喜びて、また懐中より、過ぎし夜、香たきし香炉を取り出でて、貞頼につかはしけり。「一軸は昨夜の興たり。これはまた千貫のあたへする天目なり」とて一つつみの茶をたてて、もてなしとしてとらせける。

それより、「香炉千貫、絵千貫、天目千貫、三千貫」と名を残して、末代の重宝となるといふ。

（一色直朝『月庵酔醒記』）

注

六角貞頼　戦国期の武将。　馬のすそ　馬の足。

芝蘭　香気の高い草。　寄り付きの座　玄関脇の入ってすぐの部屋。

押板　板張りの床の間。　牧谿　十三世紀後半の中国の高名な画家。

天目　抹茶茶碗の一種。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　おぼつかなげなる

1　じれったい　2　ぼんやりした　3　あやしい

4　気がかりな　5　うっとうしい

b　いみじき

1　すばらしい　2　いじらしい　3　あつかましい

4　高貴な　5　不快な

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

またこの頃、世にあさましきことのはべりしよ。上の御元服の御さだめとて、摂政殿、内に参らせたまふ。御よそほひ、ことにひきつくろはせたまひ、御前どももきらきらしうて、たそがれも過ぐるほどに出で立ちたまふ。大炊の御門、猪の隈のわたりに、思ひかけずあやしの者ども、ここら待ちうけたてまつりて、えもいはずむくつけき振る舞ひをしつつ、御供なる人々をいたくなやましきこえて、みだりがはしう追ひののしり、髻（もとどり）をさへ切りたるものか。ゆくりもなきことにて、用意すべくもあらず、誰も誰もあきれ惑ひたり。殿はただ恐ろしきに、ものも覚えたまはず、いみじきひたぶる心ある白波どもの立ち騒ぐにこそはとおぼいて、いとはしたなくむくつけうさへなりたまひ、御車のうちにひれふしたまふ。からうじて御前ども参り集まりしかど、ァいひしらず見苦しき姿なれば、今夜はびんなしとてかへらせたまふ。かう世づかぬことは、盗人などのしわざにはあらず、六波羅の入道のはからふこととて、資盛の侍従のつかうまつれるにや。

これは七月の頃、資盛の侍従、ものへまかりける道にて、イ殿に行きあひたてまつりしに、見知らぬさまに、かしこまりもおかずうち過ぐるを、殿の御前ども、なめげなりと咎め出でて、侍従を馬より引きおろし、いみじうののしりければ、からうじて逃げていにけり。この侍従は小松の重盛の次郎にて、六波羅の入道の孫なり。いつしかこのこと隠れなく、入道も伝へ聞きて、いと[a]ものしとおぼいたり。もとより心をさなくくねくねしき人なりければ、いかでその恥すすぐばかりのことをものして思ひ知らせたてまつらむと、あながちにあたみつつ、起きゐ心にかけわたりたまひけるを、殿にはつゆ知らせたまふべきならねば、ただいかさまなるしれ者にかとおぼされしに、かうなりけりと知りはてたまひては、今少しおぼしよらぬことにて、めづらかにもあさましうも、さまざまに御心もうごくべし。

やうやう世の中にも、あいなきことに言ひ出でければ、小松の大納言聞きたまひ、いはむかたなうあさましくて、いと[b]たいだいしきことなりと、むつかりけるが、やがて資盛の侍従をば、京にもあらせず、伊勢の方へつかはしたり。

この大納言は心おきて広く、あくまで用意深く、思ひやりもことにものしたまへば、入道の心のいちはやく、わづらはしきことのみ、折にふれて多かるを、よろづ

にいさめきこえたまふればなむ、おほやけ私めやすきさまにてぞ過ぎ行きける。

（荒木田麗女『月のゆくへ』）

注

上　高倉天皇。

摂政殿　藤原基房。

大炊の御門、猪の隈のわたり　大炊御門大路と猪隈小路の交差点。

白波　盗賊の別名。

六波羅の入道　平清盛。

資盛の侍従　平資盛。

小松の重盛の次男　平重盛の次男。

小松の大納言　平重盛。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ものし

1　軽率だ　　2　不快だ　　3　頼もしい　　4　つまらない

5　おとなげない

b　たいだいしき

1　重要な　　2　失礼な　　3　熱心でない　　4　関わりたくない

5　もってのほかの

次の文章は、江戸時代に、兼好の伝記を物語風に仕立てた『兼好諸国物語』の一節である。和歌を好む伊勢の国守に招かれて、兼好は桑名にある国守の家に住むようになった。これを読んで、後の設問に答えよ。

かの守の女、弁の君といふ、故宮の御方に仕へて都に侍りしが、宮かくれさせ給ひてのち、守の家に帰りて住み侍るに、月ごろ心地わづらひてやや。おこたりけるほど、ある有明の月のくまなき夜、その曹司（ざうし）の方に琴の調べの爪音けだかく聞こえければ、兼好、曹司のわたりにしのびよるに、ア放出（はなちいで）の小簾（こす）もる月にめでつるよしにて、格子みな上げて、内に火はほのかなり。

兼好、なほ間近くやをらよりてかいまみけるに、さぶらふ女房あまたなる奥の方に火影にそむきてうちある、この人なめり。いと白う、すこしおもやせてらうたげなるものから、琴を調べさして、月にあくがるるさまにて外を見いでたるまみの。にほひ、髪の末長くひきはへたる、えもいはずなまめいたり。兼好、いと心そらにうちまもられつつ、しばしやすらふに、足音の聞こゆめれば立ち去りて我が方に帰りぬ。

ねやに入りぬれど、かのおもかげのみつと添ひて忘るる間なく、思ひつづけてまどろみもやらず、はかなくて夜は明け過ぎけり。また暮れを待ちえてありしわたりにしのびよるに、いかなりけん、今宵は格子みな下ろしこめぬれば、むなしくて帰りぬ。なほ過ぎにし有明の空のみ忘れがたう、思ひ乱れてやる方もなくうちながめつつ、また月も明けにけり。

思ひ思ひあまりぬれば、つとめてかの方の女房の唐衣といへるに、しのびやかにいひよりて文書きてつく。

A　通ふべき心ならねばことのはをさりとも分かで人や聞くらん

と聞こえけり。唐衣、弁の君に人知れず聞こえて文を伝ふ。君、いとはぢらひて、すこしそむきざまにゐつついらへだにせず。イ唐衣、とさまかうさまに聞こゆれば、なほおもはゆげにうちわびつつ、かたへにありし硯を取りまさぐりて、筆のすさみに「いと思ひしもよらずなん」など書きて、

B　世の中にたえていつはりなかりせば頼みぬべくも見ゆるたまづさ

とありし、やがてやり捨てなんとするを、唐衣、取りて巻きつつものして、兼好に伝ふ。開き見るよりいみじうめでて、この文どもを常にしたためてぞふところに持たる。

さて後なん本意のごとく逢ひ初めて、折々みそかに通ひなれけり。

逢坂の関守る人のしげければ、あふさきるさにしのぶの乱れのみにてうち過ぎにしほどに、ものいひさがにくき世にしあれば、うき名のみことごとしう立ちそひて、主の守ももり聞きけんよし聞こゆめれば、兼好、住みにし方の屏風に、

しのぶ山またことかたに道もがなふりにしあとは人もこそ知れ

と書き捨てて、しのびやかに桑名の里を出でて都に帰り侍りにけり。

（閑寿『兼好諸国物語』）

注　かの守　伊勢の国守。　放出　母屋から張り出して作った部屋。

設　問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　おこたりける

1　退屈した　2　油断した　3　休息した　4　回復した　5　後退した

b　にほひ

1　余情　2　美しさ　3　色合い　4　香り　5　気配

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、上達部のまだ中将と申しける、内へ参り給ふ道に、法師をとらへてゐていきけるを、「こは、なに法師ぞ」と問はせければ、「年ごろ仕(つか)はれて候ふ主を殺して候ふ者なり」といひければ、「誠に罪重きわざしたるものにこそ。心憂きわざしける者かな」と、なにとなくうちいひて過ぎ給ひけるに、この法師、赤きまなこなる目のゆゆしくあしげなるして、にらみあげたりければ、ア[よしなき事をもいひてけるかなと、けうとく思して過ぎ給ひけるに]、又、男をからめていきけるを、「こは何事したる者ぞ」とa[こりずまに]問ひければ、「人の家に追ひ入れられて候ひつる。男は逃げてまかりぬれば、これをとらへてまかるなり」といひければ、「別の事もなき者にこそ」とて、そのとらへたる人を見知りたれば、乞ひ許してやり給ふ。

大かた、この心ざまして、人のかなしき目を見るにしたがひて、助け給ひける人にて、はじめの法師も、事よろしくは、乞ひ許さんとて、問ひ給ひけるに、罪の、ことの外に重ければ、さのたまひけるを、法師はやすからず思ひける。さて、ほどなく大赦のありければ、法師もゆりにけり。

さて、月明かりける夜、みな人はまかで、あるは寝入りなどしけるを、この中将、月に愛でて、たたずみ給ひけるほどに、ものの築地をこえておりけると見給ふほどに、うしろよりかきすくひて、飛ぶやうにして出でぬ。あきれまどひて、いかにも思しわかぬほどに、おそろしげなる者来つどひて、はるかなる山の、険しくおそろしき所へゐていきて、柴の編みたるやうなる物を、高くつくりたるにさし置きて、「b[さかしら]する人をばかくぞする。やすき事は、ひとへに罪重くいひなして、かなしきめ見せしかば、その答にあぶり殺さんずるぞ」とて、火を山のごとく焼きければ、夢などを見る心地して、若くきびはなるほどにてはあり、物おぼえ給はず、熱さはただ熱(あつ)になりて、ただ片時に死ぬべくおぼえ給ひけるに、山の上より、ゆゆしき鏑矢を射おこせければ、ある者ども、「こはいかに」とさわぎけるほどに、雨の降るやうに射ければ、これら、しばしはこなたよりも射けれど、あなたには人の数多く、イ[え射合ふべくもなかりけるにや]、火のゆくへも知らず、射散らされて逃げていにけり。

その折、男ひとり出で来て、「いかにおそろしく思し召しつらん。おのれは、その月のその日、からめられてまかりしを、御徳にゆるされて、よにうれしく、この

御恩むくひ参らせばやと思ひ候ひつるに、法師の事は悪しく仰せられたりとて、日ごろうかがひ参らせ候ひつるを見て候ふほどに、告げ参らせばやと思ひながら、我身かくて候へばと思ひ候ひつるほどに、あからさまに、きと立ち離れ参らせ候ひつるほどに、かく候ひつれば、築地をこえて出で候ひつるに、あひ参らせ候ひつれども、そこにて取り参らせ候はば、殿も御疵（きず）などもや候はんずらんと思ひて、ここにてかく射はらひて、取り参らせ候ひつるなり」とて、それより馬にかき乗せ申して、たしかにもとの所へ送り申してんげり。ほのぼのと明くるほどにぞ帰り給ひける。

（『宇治拾遺物語』）

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　こりずまに

1　失敗をおそれずに　　2　見過ごすこともできずに

3　感情をこらえきれずに　　4　反省もみられずに

5　好奇心をおさえられずに

b　さかしら

1　不公平な裁判　　2　賢い判断　　3　許しがたい不正

4　慈悲深い忠告　　5　差し出がましい行為

次の文章は、侍従の君が大納言の邸宅を訪れた際のものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

秋の中頃なるに、月のおもしろかりける夜、上達部、殿上人など、かの家にものし給ひて、遊び明かし給ふことあり。侍従の君も同じう参り給ひて、笛など吹き給ふ。御さかづき乱れあひたるほどに、忍びてこの娘君のおはします方に立ち寄り給ひつつ、築山の松の木隠れに逍遙し給ふ様にて、とばかりうかがひ給へれば、南の格子みな上げわたして、よきほどの女房四五人、をかしげなる童べなど、そよそよと身じろくけはひにて、いたうひきしぞきたれば、「あはれ、をかしき折ふしかな」と、心ときめきして、かしこの御簾の狭間まで分け入り給へば、わざとならぬ物の香り、艶なるほどに、さと漏り来たるより、ともし火のかすかにうちまたたきたる様、外に様変はり、心にくきけはひしたり。ア我、かやうにて下待たれ奉らん行く末のことも、心に浮かびて思ひ出でられつつ、なかなか忍びがたげに思さる。かうやうの隙もかたからんを、いかにせんと、[a]いられ給へど、「さすがにゆくりなくもてなし聞こえん人の御様にもおはせぬを、軽々しくあはつけきものに思しうとまれんこと。また、この北の方の漏り聞き給はんこともあらんに、ひたすらにかけ離れ、うとうとしき仲らひといふにはあらず」と、思し返して、せめて恋しき御かたちをだに見しを本意にてたち帰らんと思せば、奥ざまに行き交ふ人の後に立ちて、屏風一重のこなたまで入り給ひぬ。

イはかばかしく見付け奉るべき人もあらねば、少しうちとけ給ひて、かたはらなる小さき几帳のほころびより、西ざまに見通し給へば、御前には、若やかなる限り三四人、をかしき貝を覆ひつつ、「これか、かれか」など、あらそひ挑みたるを、うち見返りて添ひ臥し給へり。同じ丈だちにて、いづれも等しき小桂(こうちぎ)姿の、ささやかなれば、ほの暗き御火影どもは、いづれとも見分かれ給はず。「あやしう、心ゆかぬ御客人かな。たれにおはすらん。北の方の渡らせ給へるにや」と見給へど、「さらば、かく幼少(きびは)なる様にはおはせじ。かばかりのはらからさぶらふとは、かねて伝へ聞かざりしを、たれならん」と御心まどひて、真菰の中にと言ひけんやうに、さださだと見置き給はぬ御面影を、今さらいづれとも思し定めがたく、うち嘆きて見ゐ給へるに、奥の方より人来るけはひして、ねび過ぎたる御達の、「大君、渡らせ給へ。母上の、求めさせ給へる」など聞こゆれば、「寝殿のらうがはしさに、ここにさぶらはんと思ひしものを」など、おいらかにうちのたまひて、帰り給ふを見送りつつ、また、臥し給へば、「これや、あが君」と、まづ胸つぶれて目とどめ給へば、今、火などもかかげぬべし。いとさやかならねど、物の隈々残りなく見ゆ。紅

葉がさねの小袿に、紅の腰ひき結ひ給へるもてなし、ありさま、「久しう隔てて見給へしほどに、いとどしもねびまさり給へりけり」と思すにも、まづさし出づる御涙ぞ、ためらひがたき。ゆくりかにやともて鎮められし御心もさめて、室の八嶋の煙とも立ち出でましと思さるるに、人々御床の上にしとね参り、御ふすまなどまかなひたるに、何心なくおほとのごもりたる様の、[b]あえかに見え給ふを、ゆくりなく驚い給はんがいとほしけれど、みなまかり入りぬるひとまをはからひて、忍びやかなるけはひもしるくて、さし寄り給ふ。

（『しら露』）

注

この娘君　大納言の娘。実母は他界している。

北の方　大納言の妻で、娘君の継母。

御達　女房達。

室の八嶋の煙　「立つ」を導き出すための修辞。

真菰の中に　古歌を踏まえた表現。「真菰」は水草。

大君　大納言と北の方の養女。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　いられ

1　心にかけ　　2　気をもみ　　3　目にとめ　　4　色をうしない　　5　息をつき

b　あえかに

1　おとなしく

2　ぼんやりと

3　きよらかに

4　ほがらかに

5　かよわく

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

袴垂（はかまだれ）といふ盗人、ところどころおし入り、人を殺し物を盗むなりとて、都の辻々一町ごとに小屋つくりて、夜昼三人づつ守りてあれと、検非違使の庁よりふれ知らす。なほ番のもののおこたりもぞするとて、下司（したづかさ）昼夜見めぐらひて、番人の数をあらたむべきの定めになりける。これによりて下司に人あまた添へける中に、いみじく貧しき人召されて、この役にぞ加はりける。おほきに喜びて、ア昨日まではしたなめそしりけるものどもに、いきほひつきたるほどをも見せましなど、心にかまへゐたり。

さて見めぐり歩くには、従者三人ばかり具すべき例なるを、この人従者のなかりければ、にはかに人をやとひて引き連れて出でける。わが家の近きあたりに番の小屋ありけるを、近寄りて、「番人やある」と呼べど、いらへするものなし。いらちて大声に呼べば、向かひ[1]なる竹垣の門の中より老いかがまりたる翁出で来て、ついゐて[a]ぬかづく。「おのれ番人か」と言へば、「さにはべり」といらふ。「いかで小屋をあけて番せではあるぞ。おほやけの仰せごとを軽々に思ひてある、かろからぬ罪[2]なり。別当の庁に申して憂きめ見せてむ。おのれ誰ぞ、なのりせよ」と言へば、翁かしこまりて、「やつがれまことは番人にては候はず、向かひなる家の門守にてはべれど、ただいまのほどしばし小屋のあたり心つけ見てあれと頼まれてはべり。さるを名を問はせたまひて、おこたりを責めたまひなむには、まことの番人の出で来むを待ちたまひて問はせたまひね」と申す。「さらば、まことの番人はいづくにある」と問へば、「一人は風病おもきにたへで、親の家に帰りてはべり」と言ふ。「されど三人と定まりたる番人[3]なれば、いま両人はいかでここにはあらざる。いづくに行きたる」と言へど、翁ただおぢかしこまりたるのみにて、いらへせず。「イいかにや、おれ知らざるやうやある。言へ言へ」と責むれば、翁やうやうに頭をもたげて、「申すにつけてははばかり候へども、[b]せめて問はせたまへば告げたてまつる[4]なり。御供に具したまひて、御太刀持ちたる者と大傘持ちたる男こそ、ここの番人には候へ」と申せば、少しをかしくなりけれど念じて、「いかにまれ、番すべき者の小屋にあらざるこそ、ゆゆしきくせごと[5]なれ。ふたたびかかることあらば庁に申さむずるぞ」と言へば、太刀持ち、傘持ちと二人、ひたひ地にうちつけて、「こののちさることつかまつらじ。今日ばかりかくてはべりなむ」とぞ言ひける。

注

別当の庁　検非違使庁。

設問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ぬかづく

1　恐縮する　　2　参拝する　　3　追従する　　4　着座する

5　平伏する

b　せめて

1　勇敢に　　2　無理に　　3　少しでも　　4　理詰めで

5　恨みがましく

（石川雅望『しみのすみか物語』）

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

西行、それより関東へ心ざし給ひて、我が北の方、姫君のこと、思し召し出でて、「いかになりぬらん」と悲しく、「または有為無常の習ひ、もしまたはかなくなりてもあるやらん」と、「跡をもとぶらひ参らせん」と思ひ、鳥羽の方へ。ｅあこがれ行くに、いにしへ住み慣れし所を見るに、門はあれども扉なし。築地はあれども覆ひなし。庭には蓬まじりの浅茅原、軒は忍（しのぶ）まじり、忘れ草、桜、朝顔這ひかかり、道を隠すばかりなり。西行、館に差し入りて、ここかしこを見給へども、「誰そ」と咎むる人もなし。あはれに思し召し、「さても、七八年が間にかやうに荒れ果てつるや」と思ひ、「人々はいかがなり給ふらん」と、涙を流して、門を押し開き、会所殿、ここかしこを眺め給へども、「誰そ」と咎むる人もなし。

ややしばらくありて、昔の郎等、刑部といひけるが、時しも二十五日なりければ、御主の御行方を祈らんために、北野へ参詣申さんとて、主殿へ参り、「女房達やおはします」と、二三度呼ばはりけれども、音もせず。遥かに会所を見やりければ、いづくとも知らぬ修行者の、笠を着、草鞋を履きながら、ここかしこを眺め歩きけるを、刑部、「いかなる修行者なるぞ。斎料（ときりやう）のためならば台所へ回れ。何とて、姫君の御座ある主殿近く参るは。尾籠（びろう）なり。追ひ出ださばや」と思ひて、立ち向かひ、「いかに、修行者はいづくの人ぞ」と申しければ、西行、「これは西国修行の者なり。東国へ心ざしてまかり下る。ｆよしある所と見え申す間、一見申す」と仰せける。刑部、「それはともかくも候へかし。余りに狼藉（らうぜき）なり。笠、草鞋を脱がせ給へ」と言ひければ、西行聞きも入れ給はず、ここかしこを眺め給へば、刑部大きに腹を立て、走りかかりて、持ちたる鞭にて二三度打ち奉り、縁より下へ突き落としける。西行涙を流し、「譜代の下人に打たれけること、これ出家の習ひ、また、刑部がひがことにあらず。父御頭殿（ごふうのとの）の御杖と思ふべし」と思し召し、急ぎ笠を傾け、門外へ出で給ふ。

姫君簾中より出で給ひて、障子押し開け、「いかに、刑部はいづくへぞ」と問はせ給へば、刑部かしこまりて申しけるは、「御殿の御祈りのため、北野へ参り候ふ」と申せば、姫君、「心得ぬことつかまつる刑部かな。父のことを思へば、このころも修行者に情けをかけ申すぞかし。それを知りながら、西国修行と仰せ候ふほどに、父の御ことをも尋ね申さんと思ひしに、何のｂひがことのましませば、さやうに情けなく当たり奉るぞ。汝、ひとへに父を打ち奉ると思ふなり。恨めしの刑部が振る舞

ひや」とて、倒れ伏して泣き給ふ。刑部肝をつぶし、深く恐れをなし、「いかでか、これほどとは存じ申さず、ただ『姫君様の御座ある所へ、往来の人尾籠なること』と申したるばかりなり。御許し候へ」と口説き申せば、御前の女房達も、「これはひとへに刑部が姫君を思ひて申しつることなり。許させ給へ」と申し給へば、ィ「こ」とわり」と思し召し、「さらば、今の修行者を呼び返し申せ」と仰せければ、刑部、「飽かぬは主の仰せ」とて、直垂の稜（そば）を取り、門外へ走り出で、西行に追ひ付き奉り、「今の尾籠はひらに御許し候へ。姫君様、もつての外に御腹立にて候ふ。『呼び返し申せ』とのたまひ候ふ。御返り候へ」とて、御袖にすがりければ、西行、「返りたくはなけれども、もし返らずは怪しむべし」と思し召し、「さらば、御身は先へ」とて、中門に入り給ふ。笠をも脱がず、草鞋をも脱がせ給はで、雨落ちに立たせ給ふ。

（『西行』）

注

鳥羽　京都の地名。西行の住んでいた館があった場所。

二十五日　菅原道真の忌日による天神講の日。

斎料　食物や銭などの施し。

稜を取り　稜を引き上げ走りやすくして。稜は袴の左右のわきのあいている部分を縫い止めた所。

雨落ち　軒先。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あこがれ

1　興に乗って　　2　遠のいて　　3　夢見て　　4　家出して

5　心ひかれて

b　ひがこと

1　評判

2　誤解

3　落度

4　嫉妬

5　侮辱

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

姫君は、まま母からひどい仕打ちを受けて、都から住吉に逃れた。姫君を慕う中将は仏のお告げにより住吉に向かい、姫君を見出した。二人は再び都へ戻って暮らしていたが、姫君の父の中納言は一連の出来事を知らずにいた。

中納言は、月日のかさなるままに思ひまさりて、「いまひとたび、もとの姿にてあひ見むと思ふ心のつよさに、かくてのみ明かし暮らすことのなむ」とのたまふほどに、としのほどよりもことのほかに老いおとろへ給ひけり。まま母これを見て、「姫君は、たちぬる月とかや、ひんがし山にあやしき法師に具せられてこそおはしけるなれ。たしかに人のつげし」など聞こゆれば、中納言あはれげに、「ァいみじき人の子どもも、この君ほどは思はざりしに、いかにてもたひらかにて世にあらば、うれしきことにこそ。たれ人の言ひけるにや。尋ねあひて、生きたるをりいまひとたび見聞こえ、死出の山やすく越えむ。うれしくも聞かせ給ふものかな」とのたまひければ、いと[a]つれなげにて、「まこと、たれ人ぞや、思ひわすれて」など言ひければ、むくつけ女、「あの、なにとかや申しさぶらふ」など、そこはかとなく言ひければ、中納言、「あらよしなよしな、あみだぶあみだぶ」とぞのたまひける。

さても姫君は、「かくて侍るよし、中納言に聞こえたてまつらばや」とのたまひければ、中将、「まま母、世におそろしき人なれば、ィ心あはせてけりと思ひて、神仏にもおそろしきさまに祈り給はむずらむ。たがためにもよしなきことなり。つひにはあひ聞こえ給はむずれば、心やすくおぼしめすべし」とのたまへば、姫君、「父の嘆きおぼすらむことのかなしく、世にすむかひなくてこそ」などのたまへば、「まことにことわりながら、ただ申さむままに」とて、二条京極なるところにわたり給ひて、明かし暮らすほどに、姫君すぎにし十月よりただならずおはして、またの年の七月にいとうつくしきわか君うみ給へり。中将おぼしかしづき給ふことかぎりなし。

かくしつつ過ぎゆくほどに、中納言ねがはざるに大納言になりて、按察使（あぜち）かけ給へり。中将は中納言になりて、ほどなく左大将になり給ひけり。ともにうちにまゐりあひては、ものがたりのついでに、「ことのほかに老いおとろへてこそ見えさせ給へ」とのたまへば、大納言まづうち泣きて、「思ふことの深さは、これにて知らせ給へ。心にかなはぬものはいのちになむ。かくても生きめぐることの心憂く」とて、人目もつつみ給はざりければ、大将、「このついでにや聞こえまし」と思ひながら、なほ思ひかへしてぞ出で給ひける。

さて帰りて、姫君に「かく」と聞こえ給へば、姫君も侍従も、「親の思ふばかり子は思はぬと、つねにおほせられしことの末かな。かやうにこそおほくの年のつもりながら、かくとも聞こえたてまつらでおぼし嘆かせ給ふらむ、神仏いかに憎しとおぼしめすらむ。あはれ、をむなの身ほど心憂きものは」とて、つらげにのたまへば、大将、「まことにことわりなり。をさなきものもいできたれば、見せたてまつらまほしけれども、をさなき人のためまでもおそろしさにこそ。さりながらも、知らせ聞こえむこと近きほどなり。あひしのび給へ」とこしらへのたまひけり。

かくて過ぐるほどに、またひかるほどのをむな子いでき給ひけり。思ひのままなれば、おぼしかしづくことかぎりなし。

（『住吉物語』）

注

むくつけ女　ここでは、まま母の子の乳母を指す。

設　問

（一）　傍線a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　つれなげに

1　手持ち無沙汰な様子で　　2　悲しそうな様子で

3　困ったような様子で　　4　平然とした様子で

5　ただならぬ様子で

b　こしらへ

1　おどして　2　だまして　3　さそって　4　しかって

5　なだめて

次の文章は、筆者が女官として長年にわたって近侍し、寵愛を受けた堀河帝が死去した翌年のことである。これを読んで、後の設問に答えよ。

三月になりぬれば、ァ例の月に参りたれば、堀河院の花いとおもしろし。兼方、後三条院におくれまゐらせて、

いにしへに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

とよみけむ、ィげにとおぼえて、花はまことに色もかはらぬけしきなり。

昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月まではよひあかつきの例時絶えず、二十人の蔵人町・左近の陣など、僧坊になりたり。内裏にてありし所どもさびしげなる、見るにも、うせさせたまへりけむ院のうちの、ᵃひきかへかいすみさびしげなるを御覧じて、

かげだにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれかいひけむ

とよませたまひけむ、げにとぞおぼゆる。

宮の御かたに三十講をᵇおこなはせたまふとて、法華経を日に一品づつ講ぜさせたまふ。それ聞きに三位殿の参らせたまふに、具して参りて、講などはてて、御前近く三位殿をめせば、さぶらはる。宰相とてさぶらはるる人、「三位殿はいますこし近く参らせたまへ。典侍殿は、今ははづかし」といふを聞かせたまひて、「それしもこそ、こころざし見ゆれ。見だてなく思ひいでもなげに見ゆる所を、忘れず見ゆる」とおほせられもはてず、むせかへらせたまへる音の聞こゆるに、われもたへがたし。

暮れぬれば、まかでぬ。

（藤原長子『讃岐典侍日記』）

注

堀河院　堀河帝在位中の仮御所。

後三条院　堀河帝より二代前の天皇。

七月　堀河帝の命日のある月。

例時　時を定めておこなう勤行。

院のうち　一条院の御所の中。一条院は、堀河帝から七代前の天皇。

かいすみ　ひっそりとして。

「かげだにも」の和歌　一条帝の中宮彰子の和歌。

宮　堀河帝の中宮篤子内親王。

三十講　滅罪のため法華経を講義する法会。

三位殿　藤原長子の姉、藤原兼子。亡き堀河帝の乳母であった。

宰相　古くから仕えている中宮篤子付きの女房。

典侍殿　筆者、藤原長子のこと。

今ははづかし　今日のところは御遠慮ください。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ひきかへ

1　入れかわり　　2　反対に　　3　うってかわり

4　くりかえし　　5　もとに戻り

b　おこなはせたまふ

1　手伝われる

2　いとなまれる

3　しつらえられる

4　御覧になる

5　参加される

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

小山田太郎高家、遥かの山の上よりこれを見て、諸鐙（もろあぶみ）を合はせて馳せ参つて、おのれが馬に義貞を乗せたてまつりて、わが身歩立（かち）になつて、追つ懸くる敵を防きけるが、敵あまたに取り籠められてつひに討たれにけり。その間に義貞朝臣、御方の勢の中へ馳せ入つて、[a]虎口に害を遁れたまふ。

そもそも官軍の中に、義を知り命を軽んずる者多しといへども、事の急なるにのぞんで、大将の命にかはらんとする兵なかりけるに、遥かに隔たつたる小山田一人馬を引つ返して、義貞を乗せたてまつり、あまつさへわが身後（あと）にさがつて討死しけるその志を尋ぬれば、わづかの情けによつて百年の身を捨てけるなり。

去年義貞西国の討手を承つて、播磨に下着したまふ時、兵多くして糧とぼし。ア もし軍に法を置かずは、諸卒の狼藉（らうぜき）絶ゆべからずとて、一粒をも刈りとり民屋の一つをも追捕したらんずる者をば、すみやかにこれを誅せらるべき由を大札に書いて、道の辻々にぞ立てられける。これによつて農民耕作を捨てず、商人売買を快くしけるところに、この高家敵陣の近隣に行きて青麦をうち刈らせて、乗鞍に負うせてぞ帰りける。時の侍所長浜六郎左衛門尉これを見、ぢきに高家を召し寄せ、力なく法の下なればこれを誅せんとす。義貞これを聞きたまひて、「推量するに、イ この者青麦に身をかへんと思はんや。この所敵陣なればと思ひ誤りけるか、しからずは兵糧に術尽きて法の重きを忘れたるかのあひだなり。いかさま、かの役所を見よ」とて、使者を遣はして点検せられければ、馬、物具[b]さはやかにあつて、食物の類ひは一粒もなかりけり。使者帰つてこの由を申しければ、義貞大きに恥ぢしめる気色にて、「高家が法を犯す事は、戦ひのために罪を忘れたるべし。いかさま士卒先んじて疲れたるは大将の恥なり。勇士をば失ふべからず、法をば乱る事なかれ」とて、田の主には小袖二重ね与へて、高家には兵糧十石相添へて色代してぞ帰されける。

高家この情けを感じて忠義いよいよ心に染みければ、この時大将の命にかはり、たちまちに討死をばしたるなり。

（『太平記』）

注

諸鐙を合はせて　両方の鐙で馬の腹を同時に打つことで、馬を速く走らせて。

義貞　新田義貞。

役所　陣所。

色代して　ねぎらって。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　虎口

1　卑怯　　2　災難　　3　勇猛　　4　敏捷　　5　窮地

b　さはやかに

1　適当に　　2　豊かに　　3　細やかに　　4　鮮やかに　　5　質素に

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

鳥羽の宮、天王寺の別当にて、かの寺の五智光院に御座ありける時、鎌倉の前の右大将参ぜられたりけり。三浦十郎左衛門義連・梶原景時ぞ供には侍りける。御対面の後、退出の時、わう弱の尼ひとり出で来たり。右大将に向ひて、ふところより文書を一枚とり出だしていはく、「和泉の国に相伝の所領の候ふを、人に押し取られて候ふを、沙汰し候へども、身のわう弱に候ふによりて事ゆかず候ふ。たまたま君御上洛候へば、申し入れ候はむと仕り候へども、申しつぐ人も候はねば、ァただちきに見参に入り候はむとて参りて候ふ」とて、その文書を捧げたりければ、大将みづから取りて見たまひけり。「文書のごとく、ａ一定相伝の主にてあるか」と問はれければ、「ィいかでか偽りをば申しあげ候ふべき。御尋ね候はむに、さらにかくれあるまじ」と申しければ、義連に「硯尋ねて参れ」と仰せられて、尋ね出だして参りたりければ、墨押しすりて筆染めて、うち案じて、わが持ちたまひたりける扇に、一首の歌を書きたまひける。

いづみなる信太（しのだ）の杜のあまさぎはもとの古枝に立ちかへるべし

かく書きて、義連に「これに判加へて尼に取らせよ」とて、なげつかはしたりければ、義連、判加へて尼にたびてけり。年号月日にもおよばず、右大将殿自筆の御書下しなれば、ｂ子細にやおよぶ、もとのごとく、かの尼領知しけるとぞ。

その後、右大臣家の時、件の尼がむすめ、この扇の下し文をささげて沙汰に出でて侍りけるに、年号月日なきよし奉行いひけれども、かの自筆そのかくれなきによりて安堵しにけり。

件の扇、檜（ひ）の骨ばかりは彫（ゑ）りて、そのほかは細骨にてなむ侍りける。まさしく見たるとて、人の語り侍りしなり。

（橘成季『古今著聞集』）

注

鳥羽の宮　後白河天皇の子、僧定恵。　鎌倉の前の右大将　源頼朝。

わう弱　弱弱しいさま。　右大臣家の時　源実朝の治世。

設問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　一定

1　たしかに　2　おそらく　3　そもそも　4　ともかく　5　ずっと

b　子細

1　心得　2　理由　3　経緯　4　異論　5　真実

次の文章は、江戸時代に武家の妻が当時の歌人の様子について述べたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

今、いにしへの学び、はた歌詠む人とて[ア]月並にわざと人を集へ、世わたりめきて物する人かれこれあれど、秀でたるも聞こえず。かの得たる所得ぬ所たがひになんあるべけれど、さる人は大方思ひ上りてかたみに人をそしりあひ、おのれ世の中にいみじう思はれん事をはかるさまなれば、うはべのわざは雅びかにて、心のうらはきたなき人もまじりぬべし。

[イ]歌のさまもいにしへぶりとはいへども、まことの古き調べに詠む人はまれらにて、後の世めきたるぞ多き。さるはよろしき程の人、はた女などは、雲の上人のふりに習ひ、はたここなる北村の某など、公の歌人なれば、その口ぶりなど学ぶ人多かめれば、さるわたりなどへもゆきかふには古き調べのつきなければ、おのづからへつらひて詠めるゆゑなるべし。しかのみにもあらず、うつりこし世のありさまなれば初学びの人、はた女などに物せんには、耳遠き詞聞きなれぬ調べなど、心じらひすめるはさる事なるべし。

またかかる人々の著せる書どもいと多く、よろしきもあるべけれど、はたしからぬもありぬめり。古事学びは、昔よりの人々もあれど近き世にその名聞こえたる、真淵翁はた宣長てふ人、次いでくはしう古事をときあかし、歌の定まりどもをも、つばらにあげ、その外あまたの文どもを著しつれば、[ウ]今、いにしへ学びする人々、その文によらぬなんなき。しかるを、おのれさる人にも勝れたらんさまを世にしめさんとて、さる書どもの中にいささか誤りもし、はたいひ動かすべき事どものあなるを選りいでて、いみじき僻事とそしりあざけりなどしつつ、おのがはじめその書どもにより古事をも習ひ得て、さるわざして世をわたるめぐみを忘れつる人なん多かる。

それはた学びのわざは、たとへ師といはんからに、僻事あらんをば後より正し改むべきはさる事なれど、さらんにはいひざまもあるべく、かつは中々に僻事どももあめり。されど[エ]過ぎにし人はその答へもせざればさてあるを、さるたぐひの人どもの物争ひしたるを見るに、はじめの程こそいささかはその筋の事ども引き出で書きつつ、かたみにまけじ心にいへ、二度三度になりもてゆけば、たがひに腹立つままにいひつのり、はしたなうかたはらいたき事ども書きちらし、はてはては本の筋は

さておきて、ようなきかたへの事などののしりあひ、えもいはぬ悪口など怒れるままにいひ過ぐしたる、文の上なればこそあれ、ただに向かひたらんには、打ちあひもし、つかみもかかりぬべき筆の勢ひどもに、日ごろよげに見えつるはうはべにて、もとよりいやしきしたの心皆顕れて、いみじう人わろうあさましとはおろかなり。かかる人々の、天地にはじまりたる雅びかに[b]たへなる歌詠まん事は、いかがあらんとぞ思はる。

（『井関隆子日記』）

注

北村の某　北村季文。幕府の和歌所の歌人。

心じらひ　気を使うこと。

宣長　本居宣長。

真淵　賀茂真淵。

つばらに　詳細に。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　過ぎにし人

1　通りすがりの人　　2　懐かしい人　　3　亡くなった人

4　忘れた人　　5　縁を切った人

b　たへなる

1　途絶えた　　2　麗しい　　3　不可思議な

4　愛おしい　　5　受け継がれた

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

中務大輔なりけるは、手なむいみじう上手にものして、いにしへの佐理の大弐などにも、をさをさ劣らずとて、上も世にありがたきものにおぼしめされければ、殿上の若き公達、この人を師にて、本書かせなどしつつ習ひたまふ。大輔が近きゆかりなりける少将、いかで書き得むとあながちに心入りつるほどに、いつしかいみじうなりて、いとよう写し取りつるを、人もこよなしとめであへり。上も、「うるせきさまかな」とのたまはするを、いどみたまへる公達はねたがりたまふ。

大輔が家には、いとめでたき剣のありけるを、代々宝物にてもたり。少将せちに得まほしう思ひて、大輔にけしきばみ聞こゆるもわりなきさまにて、「代はりにはおのがもとにあらむもの、何も何もゆめ惜しみ聞こえじ」と、たびたび言へど、大輔いといたく惜しみて、聞きも入れずつれなきを、少将まめやかに心やましくて、「せちに思へることには、亡き影にだにかけはべるものを、まいて生きたらむ日、許したまはば、いかばかり深き志とか言はむ」とて、少将、

生ける日の心強さに秋の霜消えむ世までの恨み残らむ

とて、やりたり。大輔、

亡き人の形見の秋の霜とてぞあだに散らさむものとやは見る

とて対面の折、大輔、「まことにはなにがしが方にははべらず、母なる者のいたく秘め置きて、心安く見ることもかたくなむ」と聞こえたり。少将、そらごとにやとは思へども、やがて、母の方に文書くとて、大輔が手のそのままにて、「その太刀しばし預からむ」と聞こえつ。使ひにも大輔が方人（かたうど）だちてもてなすべう教へやり

つるに、母君ことに心もつかず、とみに取う出て使ひに遣はしぬ。少将いと嬉しくて、いたく秘めつつ、深く隠して時々見などしけり。

日ごろ経て大輔、母の文とてあるを、驚きつつ見れば、「ありつる太刀、いと久しうなりぬるを、今は返したまへ」とあるに、いぶかしう胸うち騒ぎておぼゆるものから、急ぎ詣でて、「いかさまなる御ことか」と問ふに、母君、「かうかうのことにて、そこの使ひになむものしつ」とて、文取う出て見せつるを、大輔いと世づかぬわざかなと思ひつつ見るに、我が手のやうなれど、いとしるく少将のなりと見なしつるものか。つねに人のけぢめ分きがたくするをよすがに、かかるたばかりをもしつるならむと、あさましうをこの心ある主かなと、まめやかに心づきなう、また疎からぬあはひにて、かくも後ろめたきことありなむやと、うちうめかれて、母にも、「しかじかなむ。あの少将のしわざにはべり。日ごろあながちに聞こえしことを、なにがしが受け引きはべらぬに聞こえわびて、かうあやなき心構へをなむものしはべるなり。いとたいだいしうははべれど、おのが思ふところもはべり。しばし人にも知らせで、bおいらかにおはしませ。今ただ今、思ひ知るばかりのこともしはべりなむ」と、母にも口固めてまかでぬ。

（荒木田麗女『怪世談』）

注

佐理の大弐　藤原佐理。平安時代の能書家。

亡き影にだにかけはべる　自分の名剣をほしがっていた人の墓のそばにある木に、その剣を掛けてささげたという故事を踏まえる。

秋の霜　刀剣。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　わりなき

1　強引な　　2　利口な　　3　得意そうな

b おいらかに

1 素直に

2 慎重に

3 ひそかに

4 けなげに

5 おだやかに

4 理由もない

5 分け隔てがない

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、某（なにがし）院の天皇の御代に、夏ごろ殿上人あまた涼みせむがために大極殿に行きけり。その供に滝口所の衆あまたありけり。

涼みはてて返るに、八省の北の廊を行くほどに、にはかに空くもりて夕立す。されば、今や晴る、晴ると、立ちて待つ間に、あるいは笠持て来る人もあり、持て来ぬ人もあり。されば君達は多くて笠は少なければ、笠持て来るを待つとて立ちたるほどに、官掌某（なにがし）の得任といふ者あり。家は西の京にありければ、陣にまゐりてまかり出でけるが、にはかに夕立にあひて、束帯したる者の、袖をかづきて西の京ざまに走りて行くを、かく殿上人のあまた立ちたる前を渡るに、滝口所の衆もあまたゐたり。

そのなかに滝口の忠兼は、まことにはこの得任が子なり。それを烏藤太某（なにがし）といふ者の、児なりける時より取りて養ひて、烏藤太もわがまことの子なりといひ、忠兼もしか名乗りて、得任が子といふことをば、人あらはしてもいはずして、ささやきてのみありけるに、忠兼、滝口どものある内にてこの八省の廊の北面にゐなみたるに、かく得任が夕立にあひて、沓（くつ）、襪（したうづ）をば手に取りて、袖をかづきてぬれて走り行くを、忠兼見てまどひて、袴のくくりを上げて、笠を取りて走り寄りて、得任にさし隠して行くを見て、殿上人より始めて、滝口所の衆みなこれを見て、笑はずしてあるいは泣きにけり。

「いみじき誰なりといふとも、さばかり争ひ立ちて、親にもあらずと名乗りて、よき親を持たらむに、更に笠さして多くの人の見るに、送らむことはあらじ。せめての有心（うしん）には立ちてぞ隠れむ。それに、かく笠をさして送るは、あはれに[a]ありがたき者の心なり」といひて、親ある人も親なき人も泣くなるべし。

得任は、隠すことぞと知りたれば、忠兼が滝口の中にゐたるを見て、これが見る前にかくて渡るを恥づかしと思ひて、知らぬ顔にて行くを、身ながらも心うしと思ふに、忠兼が笠をさして走り来てさし隠せば、「これはいかにせしめたまふぞ」といひて、顔を見れば忠兼がさしたるなりけり。得任これを見て、目より涙を落として、「あな、かたじけな、かたじけな」と。忠兼、「ア いかにか、かたじけなく候はむ。いかでか」といひて、イ たしかに西の京の家に送りつけてぞ、内に返りまゐり

たりける。

殿上人ども、みな内に返りまゐりて、関白殿の御宿所にまゐりて、このことを語り申しければ、殿聞こし召して、いみじくあはれがらせたまひて、内にも申させたまひてけり。それより後、忠兼おぼえ増さりて、上より始めてよろづの人にほめられなむしける。

また、忠兼を知りたりける智（さとり）あるbやむごとなき僧、このことを聞きて、忠兼にいひけるやうは、「なんぢが孝養の心極めてたふとし。塔寺を建て仏経を写さむにもまさりたり。これもろもろの仏菩薩もほめたまひ、諸天も守りたまふことなり。Aたとひ人ありて無量の善根をつくるといへども、不孝の者はその益を得ず」と教へければ、忠兼、これを信じていよいよ孝養しけりとなむ、語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』）

注

滝口所の衆　清涼殿に詰める警備の武士。

八省　八省院。中央政府の役人が政務をとる所。大極殿はその正殿。

官掌　雑役をつとめる太政官の下級官僚。

陣　宮中の詰所。

褪　正装の時にはく足袋。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ありがたき

1　正直な　　2　奇特な　　3　有能な　　4　親切な　　5　風流な

b　やむごとなき

1　ひときわ尊い

2　たいそう忙しい

3　とりわけ有名な

4　はなはだ裕福な

5　きわめて美しい

次の文章は、母を亡くした三人姉妹と婿たちが、三十五日目の仏事を行う直前の様子を描いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

三十五日、中納言殿より仏経供養じ奉り給ふに、大納言とくおはして御覧ずれば、いまだ今日の仏は渡し聞こえず、昨日のは送り給ひて、取り払ひて人もなし。仏の御方より通ふ二間の障子細めに開きたるよりうちを見給へば、奥の方に女房の声聞こゆ。引き開けてア歩み入り給へど、とがむる人もなし。西面に小さき仏あまた据ゑたる、「持仏堂ならん」とそなたの屏風に伝ひ入りて見給へば、三人ながらこなたにおはす。女房は長押(なげし)の下に居たり。

我が上は、白き衣どもに薄鈍(うすにび)なる衣に帯うちかけて、黒き数珠持(も)給へる手つき、今はじめて見つけたらんやうに、うつくしさ、何のつくろひもなきしも、けだかう愛敬づき、らうたくうつくしき御さまは、いく世を経て見るとも飽く世あるまじ。

三の君は、細くささやかに、愛敬づきうつくしくて、黒き御衣にかかりたる御髪のこちたく見所多きに、[a]かたなりなるしも、めづらしくらうたげなり。

中納言の上は少し退きて、仏の御前近くて、同じ色の御衣に帯うちかけて、浅縹(あさはなだ)の経を机に置きて読み居給へり。[A]いつしなれ給ひけん、いととげに繰り返し給ふ。盛りに匂ひ多き人のイ面痩せたるはしもなまめかしく、はえなき御衣の色も、着給へる人がらに、綺羅(きら)もつやもなべてならぬ心地して、はなばなとうつくしげなり。「かの雪の朝ウ見つけ聞こえしには、似るものなくこそありし。なほその折よりは[b]ねびまさり給へるは、たぐひなかりけりな」。されど、なほけだかう匂ひやかなる方は我が御方強う見なし給ふにも、「[B]中納言見ましかば、なほ匂ひこぼるるならんかし。かつは見なしがらなりけり」とほほゑまれ給ふ。

中の御方の中将の君、「方便品の尊く覚えて習ひ奉れども、御忌は末になりぬ。経はいまだ半らにもならぬこと」と侘ぶれば、こなたの小中将の君、「こよなかりけるは。まろは心経をだに習ひ侍るが、覚えず」と言へば、姉の新宰相、「思し召し沈みたる御さまども、慰め参らせんとてのたまふか。世の人一文字読まば、その間に一切経は読み給ひてん」と言へば、姫君の御方の大納言、「いさ、あなたの方便品は［　　］、心経はまことに言へり。師は、ここになんつかうまつる」とのどかに言ひ出でたるにぞ、人々も笑ふ。君たちも少しうち笑み給へる、うつくしう愛敬づきて、「[C]この君たち、おろかにいかなる人か思ひ聞こえん。中納言の、鳥の音聞こえぬ山道求めけんもことわりにこそ」と思し続くるに、頭の中将歩みおはする音するに、あなたへおはしぬ。「嬉しき折をも見ける」と思す。

注

今日の仏　中納言が主催する今日の法事で、供養する予定の仏像。

三人ながら　三人姉妹が揃って。

三の君　三人姉妹の三女。

中の御方の中将の君　次女に仕える女房。

小中将の君　長女に仕える女房。

姉の新宰相　長女に仕える女房。小中将の君の姉にあたる。

一切経　仏教聖典を集大成したもの。

鳥の音聞こえぬ山道求めけん　出家しようとまで考えたという過去を指す。

我が上　三人姉妹の長女。

中納言の上　三人姉妹の次女。

方便品　法華経全二十八品のうちの第二。

心経　般若心経。経典としては三百字足らずと短い。

姫君の御方の大納言　三女に仕える女房。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　かたなりなる

1　冷淡である　　2　無礼である　　3　未熟である　　4　頑固である

5　潔癖である

b　ねびまさり

（『海人の刈藻』）

1　甘やかされて気位が高くなり

2　修行して物事に動じなくなり

3　年老いて穏やかになり

4　経験を積んで賢くなり

5　成長して立派になり

【三十九】2015 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科

次の文章は、筆者のもとへ兼好法師が訪れた際の様子を描いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

同じころ、兼好法師が玉津島に詣で給へるとて、たづねおはせしに、いにしへ深く契りし仲なりければ、いとうれしくて、むかし今のものがたりしけるに、「故法皇の和歌の道にふかくおぼし入らせ、御なさけのあさからせ給はで、[a]かしこき御影とならせ給ひしかなしさのままに、世にながらふべき心地もあらざりけらし。せめてのやるかたなさに、御後の世をもと思ひ給ふるままに、かかる姿となり侍れども、露の命のきえがたくて、かからん世をまのあたりに見侍ることよ」と、袖をしぼられけるに、「我も先帝の御なさけのわすれがたくて、[ア]御跡をもしたはまほしく思ひ給へけれども、さすがに思ひかへし侍りて、柴の戸ぼそには侍れども、心はうき雲の風にただよふらんさまして、はかなき夢路には、ふるさとの空にもかよひ、思ひとぢむれば、西の御空にもあこがれ、春の朝には、吉野の花のこずゑにやどり、秋の夕べのあはれを思ひつづけては、[b]さやけき月の影をもくもらせ、もろくも落つる木の葉を見ては、はかなき世を思ひめぐらす袖の時雨となりて、染めにし墨の衣もむなしく、旅行く人を思ひ送りては、まだ見ぬみねをも越ゆるにこそ、いかなる縁にふれ侍りて、[イ]人目絶えなん山深きいはほのほらにも、をさまらでとこそ、嘆きて過ぐし侍りぬれ」といへば、「まことにさには候へども、我一とせ木曽の御坂のあたりにさすらひ侍りし時、山のたたずまひ、川のきよき流れに、心とまり侍りしかば、ここにぞ思ひとどまりぬべき所にこそ侍れ、とて、

思ひたつ木曽のあさぎぬあさくのみそめてやむべき袖の色かは

と詠じて、庵を引き結びて、しばし候ひしに、国の守の鷹狩りに、人あまた具し給うて、山深き庵のほとりまでいまして、狩りし給ふさまのあさましく堪へがたかりければ、

ここもまたうき世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな

とながめ捨てて出で侍りき。それよりいづかたへ心とむべくもあらずと思ひとりて、ふるさとに立ち帰りて侍れば、世の中のみだれけるほどに、和歌をともなひとして、心をすまし侍らんよりほかはあらじと、思ひ侍るにこそ」と、のたまはせしに、「まことに世をそむく心は、ひとしくこそありけれ」と、そぞろに袖をしぼり侍りき。

（『吉野拾遺』）

注

同じころ　後醍醐天皇が延元四年（一三三九）に亡くなった後、後村上天皇が即位した時期。

玉津島　和歌山にある玉津島神社。

故法皇　元亨四年（一三二四）に他界した後宇多法皇。

先帝　後醍醐天皇。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　かしこき

1　幸薄い　　2　むなしい　　3　畏れ多い　　4　おぼつかない

5　才智に富む

b　さやけき

1　皎々(こうこう)とした

2　朦朧(もうろう)とした

3　暗澹(あんたん)とした

4　凄然(せいぜん)とした

5　渺々(びょうびょう)とした

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

君は、これよりやがて御馬にて伏見へおはするにも、さすが住みなれにし都のほとりを、今はかぎりにわかれ給ふ御心の中のあはれはさまざまにて、山路わけ入り給ふままに、[a]よもの山風、声はげしく吹きまよひて、木枯らしかたふりにしあとばかりむらぎえたる雪の、いく夜つもりにけるにか、しみこほりたへがたげなるを、駒の足にまかせつつ、行先の山もわかぬ心地するに、すさまじき古りたる師走の月[1]しも、心ぼそさのたぐひもなく澄み返りたる。

あか月がたに、伏見の里と言ひながらに、人音もせず。いにしへたれもおはしけるかたざまも、みな堂に移されたれば、仏のみ住みかはり給へるも、見ぬ世の昔のおもかげなれど、なにとなくものあはれにて、

いにしへのこれや伏見の里ならん見るも涙のふるの山里

まいて、かの母院の御山をさ[2]してまゐり給ひつつ、捨てはつる暇(いとま)聞こえ給ふほどの御心地など、言へばえに悲しく、さすがアこの世にものし給はんを見捨てては、うしとても、ひたすらそむきやらざらましと思ふは、うれしきかたにもなりぬべけれと、げにおぼしなる。ちぎりにて、あとなき道芝の露の名残にとまりはてて、よもぎがそまに涙をつくしつつ、なにのうれへもかな[3]しびも聞こえあはするかたなく、こたふる物とてはむなしき風の音ばかりにて、[A]思ひ出づべきおもかげをだに、身にとめずなりおきにけると、今さら心うく、つくづくとおぼしつづくるに、涙のみせきがたきを、ためらひ給ひつつ出で給ふに、たかきよりをちの山もとに、人かげのするを、たれぞと寄りて見給ふに、やがて御袖をひかへつつ、

ちぎれどもさばかりこそはいとひ[4]しを慕ふ心も浅からぬかな

と言ひかくるは、権中納言なりける。「あなおそろし」とて、

なほざりに世のことぐさと思ひしに今こそ深き心をも知れ

昨日の消息に、かすめたりし[b]すぢをよく心得けるもをかしう、まことにいかなる山の奥までも、わが身のきはにひとしく、同じ心なるべき人ばかり、うれしかるべきともにやはあらん。たれも都になれしそのころは、親はらからにすぎてむつまじうも思はざりしを、[ィ]かうまで深かりけるちぎりのほど、あはれさ、なのめにやおぼし知られん。

いざさらばうき世の中をよそに見てよ[5]しやよし野の山に入りなん

と、うち語らひ給ひつつ、御馬どもにめして、よし野の山をさして入り給ひぬるぞ、あはれなる事にこそ、そのころは聞き侍りけめ。

（『いはでしのぶ物語』）

注

伏見の里　伏見の里は、和歌において荒れた場所としてしばしば歌われた。

たれもおはしける　母院、伯父、その伯父の娘たちが伏見に住んでいた。

よもぎがそま　雑草が生い茂っている様子。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a よもの

1 夜通しの　2 まさかの　3 あまりの　4 あたり一帯の　5 世間一般の

b すぢ

1 事柄　2 道理　3 趣向　4 血統　5 方角

次の文章は、中将が中納言を訪ねてきて、話し出したところから始まる。これを読んで、後の設問に答えよ。

「まことは、あやしきことの侍るを、聞こえあはせんとて。この過ぎぬるころ、思ひかけぬ者の、大夫の乳母のもとに、いとらうたき児をうち捨てて侍りければ、かこつべきゆゑやあらんとて、ア置きて侍るとイ聞きて侍るに、『これなん母の形見とて添へたるものの侍るが、笛にて侍る』と申ししを、あやしくて、一日取り寄せて見候ひしかば、見し心地のし侍る。まことや、もしさることも思し寄る」とのたまふに、あやしく、御心にかかる笛のことなれば、「思ひ分くことは侍らねど、たづねまほしき笛になん侍る。かれを見候はばや。児はいくつばかりにA侍るらん」とのたまふに、「十月ばかりとかやぞ申し侍りし」「いま、笛のしるしまことならば、聞こえさせ侍らん。かへすがへすゆかしくなん」とのたまへば、たち返り参らすべきよしのたまひて、出で給ひぬ。

B心もとなく待ち給ふに、やがて奉り給へり。見給へば、まがふべくもなきそれなり。まぎらはしたる色紙の手習ひ、絵なんどの、筆の流れ、墨つきまで、なべてにはありがたきさまなり。あやしき家の軒端に荻あり、夕月夜の空をながむる女房描きたるところに、

Cとへとしも思はぬ荻の上風ぞことしもあればまづ答へける

夕暮れは蓬がもとの白露にたれとふべしとまつ虫ぞ鳴く

また、悩ましげにてふしたるところに、笛を手まさぐりにてふしつつ、涙を払ひたるところに、

笛竹の憂きひとふしを形見にてこのよはながくねぞ絶えにける

古きも、かやうなる筋のみ、書き消ち書き消ちせられたり。つくづくと見るに、涙は滝の音のやうにこぼれ給ひけり。見はじめたりしに、夜を隔てんも苦しくおぼえしほどの形見にとどめし笛を、今日わが形見に見るべかりける。世にはあるかなきかをたづぬべきたよりもなし。児の生まれける月日も書きつけたり。十月十日とぞある。ありし方違へのころより、まがふべくもなし。

笛竹のひとよの節をとどめずはわがこのねともいかで知らまし

とぞ書き添へ給ふ。

暮れぬれば、やがて中将のもとにおはして、対面し給ひて、「まがふべくも侍らず。[a]うちつけなる心地に、ゆかしくてなん、今日を過ぐさず参り侍る」と聞こえ給へば、「行方知らぬことなん侍れば。いと無礼ならん」とて、抱き出だし給へる、乳母のさまなんど、[b]ゆゑなからず。灯台近く居寄りて見給へば、なれたるやうにて、わが御鏡の影にもまがふべくもあらず見え給ふ。

（『浅茅が露』）

注

大夫の乳母　中将の父に仕えて中将の身の回りの世話をしている女房。

古き　古歌。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a うちつけなる

1 確実な

2 軽率な

3 自然な

4 率直な

5 唐突な

b ゆゑ

1 真情

2 正常

3 道理

4 風情

5 理由

次の文章は、馬術の名人であった本間資氏に関するものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

天下の人こぞりて本間をたつとび習ひつとむるといへども、つひに資氏が心にかなはず。いかんとなれば、かのいはゆる、一より五六に飛び、その次をのぞきて十にいたらんことをねがふによってなり。

門弟の中、ある者、一日、本間に申しけるは「およそ貴方の御奥義何か条候ふや。さだめて千万の秘術も御座(ござ)候はん」といふに、本間につこと笑ひて「そのことなり。千万の術は一をよくすれば、その外は自然に満足す。第一の大事といふは、懸け橋を乗るに口伝あり。これを習ひ得れば、のこるところはすべてこころざしにしたがふものなり。しかれどもこの故実たやすく伝へがたし」といへば、この者、すはやと思ひていまだ十のうち一二もいたらずして、はや千万の奥蔵を遂げまく思ひて「ぜひともぜひとも御師伝にあづかり候はん。たとへ一朝に命をまゐらすといふとも可ならん」と手をあはせて懇望しける間、本間も[a]ぜひなくして「さらば師伝申すべし。このところにては伝へがたし。[b]すなはち山谷に行きて伝ふべし。まゐられよ」と、師弟相ともに誘引して道のほど三里ばかりも行きつれ、ある谷川の上に懸け橋あり。

本間は先に乗り、弟子は後につづきて乗りけるが、かの懸け橋のもとにて、本間ゆらりと馬より飛びおり「このところ大事に候ふ。よくよく御覧あれ」といひて、馬の口を引きしづしづと懸け橋を渡し、さてまたその馬に乗りてけり。弟子これを見て希有の思ひをなし「さていかなるふるまひにて候ふぞや」と問へば「そのことなり。『[ア]をこの高名はせぬにしかず』といふ本文あり。この懸け橋なくとも一鞭あてたらんに五間三間の谷合はたやすく飛びこえさすべし。[イ]いはんや懸け橋の上を乗らんをや。もし我乗りてみせんに、貴方はやそれに心をかたぶけ、毎々かやうのわざを好まば、これすなはちあやふきを教ふる張本なり。道は不得心にして、大事はさへぎりて懇望あり。これ無用の第一なり。懸け橋に限らずあやふきところの高名はせぬものなり。ひつきやう大事といふは身を全うするところをいふ。もしやむことを得ずして敵大勢おそひかかり、不意に取りまきなば、すみやかに死すべきこと肝要なり。懸け橋の外、軒端渡し、貫木通(くわんぬき)し、その外のわざは皆人の目をよろこばしむるのみなり。相かまへて今より以後このことをつつしみて、無用の軽わざを好み給ふな」と教へけるとぞ。

まことにこの者、馬道の長者なれば、弟子に示すところいはれなきにあらず。もつともをかしきふるまひと云々。

（『塵塚物語』）

注

奥蔵　ここでは、奥義に同じ。

軒端渡し、貫木通し　それぞれ馬術の技の名。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ぜひなく

1　この上なく　　2　そっけなく　　3　しかたがなく

4　いうまでもなく　　5　気がねなく

b　すなはち

1　すぐに　　2　かならず　　3　つまり　　4　もはや

5　すべて

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

大殿・小殿とて聞こえある強盗の棟梁ありけり。大殿は、後鳥羽院の御時からめられけり。小殿、高倉の判官章久がもとへ行きていひけるは、「日来年来からめかねて、あなぐり求められ候ふ小殿と申す強盗こそおもふやうありて参りて候へ。はやく受け取らせ給へ」といふ。章久まことしからずおぼえながら、[a]おろおろ子細を問へば、小殿いはく、「[ア]御不審候ふこと、もつともそのいはれ候へども、まづおぼしめし候へ。ただのしら人が強盗とみづから名乗りて、命をまかせまゐらせてなにのせんか候ふべき」といへば、げにもことわりにて、くはしく問答するに、小殿がいふやう、「年来西国のかたにて海賊をし、東国にては山立(やまだち)をし、京都にては強盗をし、辺土にてはひきはぎをしてすぎきつるなり。かかる重罪の身をうけ候ひぬれば、この世にてもやすき心候はず。夜もやすくもねず、ひるも心うちくつろぐことなし。世のおそろしく、人のつつましきこと、かなしき苦患(くげん)にて候ふなり。[A]さても一期ことなくてあるべき身にても候はず。つひにはさだめてからめいだされて恥をさらし、かなしき目をこそ見候はんずれば、人手にかからんよりは、心と参りて、かつは年来の罪をもむくはんがために、頸をのべて参りて候ふなん」といへば、章久あはれにおぼえて、[b]左右なくも受け取るべけれども、その儀なくして、答へけるは、「いまは使庁の庁務停止したるなり。かつは聞きもおよぶらん。年来つくりおける[B]牢どもみなうちやぶりて仏所につくりなどして、一向庁務をとどめて、後世のことをいとなむなり。徳大寺殿に伺候の源の判官康仲こそ当時ことに高名をたてんとする人なれ。かしこに行きてこの子細をいはば、さだめて悦びおもはんずらん」といへば、「さ候はば、御文をたまはり候ひて、源の判官殿へ参り候はん」といへば、「それはやすきことなり」とて、文書きとらせければ、すなはち持ちて康仲がもとへゆきて、章久がもとにていひつるがごとくにいひて、「もし万が一、命をいけて、めしもつかはれ候はば、別の奉公には、余党その数おほく候ふを、一々にからめさせまゐらせん」といへば、康仲興あることに思ひて、受け取りてつかひけり。

給物三十石をとらせて朝夕めしつかふに、ことおきてかひがひしく大切のことどもおほかりければ、大納言家にこのやうを内々申し入れたりけるに、「いと興あることにこそ。さやうの者は、中々さるかたもあるなり。我に得させよ。めしつかはん」と仰せられければ、参らせてけり。侍ひゆるされてめしつかひけり。康仲が恩

のうへに、五十石の給物をたまはせたりければ、小殿よろこびて、「今はかくて一期身やすくてやみなんずれば、おもふこと候はず。伺候のあひだには、いかにも御所中ならびに御近辺には狼藉のことあらすまじく候」とて、一向に御とのゐして奉公をいたしければ、誠にかひがひしくそのあたりには夜の恐れなかりけり。

（『古今著聞集』）

注

山立　山賊。

使庁　検非違使庁。

徳大寺殿・大納言家　いずれも藤原実基。

設　問

（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　おろおろ

1　じっくりと　　2　あたふたと　　3　おびえて　　4　おおざっぱに

5　ひそかに

b　左右なく

1　決着をつけず　　2　躊躇せず　　3　区別なく

4　根拠なく　　5　本意でなく

次の文章は、弟の春宮と姉の姫宮、それぞれの結婚生活の様子を描いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

春宮は姫宮に一年が御弟なるに、また殿の姫君、その年の四月に参り給ふ。御局、宣耀殿なり。御仲らひ、またおろかならんや。御元服のころより候ひ給ふ殿の御兄の太政大臣の御女、麗景殿と聞こゆる、ことに御おぼえおろかなる[1]に、これはわれながらけしからぬまでの御心ざしなり。上の、中宮を思ひきこえさせ給へるに、限りあれば、いかにとかはまさるべきならぬを、上は、限なうおはしまして、采女(うねめ)が[a]きぬまでも、かたちをかしきをば御覧じすぐさず。御方々もあまた候ひ給ふを、いづれも御なさけありてァもてなさせ給ひて、その上に后の宮の御心ざしはたぐひなければこそ、もののはえにてもめでたきを、これは、御心をも散らさず、Aなほなほ参り給ふべき人々おはすれど、御あひしらひだになければ、みなおぼしも立たず。

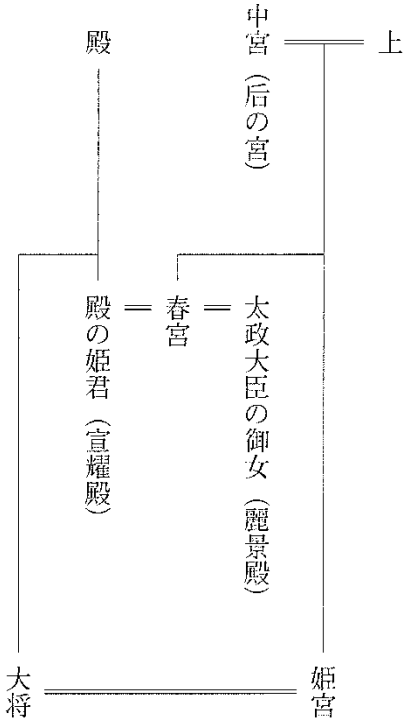
一品の宮、夏ごろより、いつしか契り浅からぬ御心地に悩ませ給へば、殿のうち磨きしつらひて、出だしきこえ給ふ。大将もうれしくおぼしたり。かくすぐれぬる人は、必ず心づくしをもととしてこそ、艶にあはれにおもしろうもあるを、さこそあれ、さやうの乱れも御心の底よりなし。Bなにかはさしもあだなる世に、あながち心づくしなることもあるべき。さるべき[2]にまかなひおかれたる女宮の御さまの、なにごとこそ飽かずとおぼゆることもなし。さればとて、春宮の御仲らひのやうは、けしからぬまではあらず、おほかたなにごとにも静まりたる御心癖にて、限りなうあはれに、おろかならずはィ思ひきこえ給へり。さこそあれ、世をも隔てそばめたる御ことのまじらぬぞ、あらまほしう、念なきとも言ひつべき。

さるは、少しも立ち出で給ふたびには、御方々の戸口もやすからず、御袖の褄(つま)、御下襲(したがさね)の裾をひかへつつ、「鶯の音に鳴きつべき」と[b]かこち、「宿にふすぶる蚊遣り火の下燃え」を憂へ、「尾花にまじり咲く花の色にや恋ひん」と嘆き、「降る白雪の下消えて」消え返りつつ、時をりふし[3]につけては、やすき空なきを、恐ろしうさへゥおぼえ給ひて、限々しき方をば通らじとさへぞし給ふ。御随身などには、いろいろの色紙・薄様、大き[4]に小さく、一度の御歩きには一つかみづつ参らするを、さすがほほ笑みて、女宮とぞ御覧ずる。おのづから、さ[5]にやと知らるるふしも交じるらめど、おほかたさる岩木に身をなしてぞ過ぐし給ふ。

（『風に紅葉』）

注

春宮・姫宮（一品の宮・女宮）・殿の姫君（宣耀殿）・太政大臣の御女（麗景殿）・上・中宮（后の宮）・大将については、次記の系図参照。



殿のうち　大将の父、殿の邸の中。この時まで、姫宮と大将は宮中に住んでいた。

「鶯の音に鳴きつべき」　「わが園の梅のほつえに鶯の音に鳴きぬべき恋もするかな」（『古今和歌集』）に依拠した表現。

「宿にふすぶる蚊遣り火の下燃え」　「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下燃えをせん」（『古今和歌集』）に依拠した表現。

「尾花にまじり咲く花の色にや恋ひん」　「秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや恋ひん逢ふよしをなみ」（『古今和歌集』）に依拠した表現。

「降る白雪の下消えて」　「かきくらし降る白雪の下消えに消えてもの思ふころにもあるかな」（『古今和歌集』）に依拠した表現。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a きは

1 器量　2 身分　3 最期　4 遠縁　5 才能

b かこち

1 虚言を見抜き　2 面目を施し　3 恨み言を言い　4 体裁を繕い　5 言い分を聞き

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今の上は、はやうより、西園寺の入道大臣実兼の末の御女、兼季の大納言の一つ御腹にものし給ふを、忍びて盗み給ひて、Aわくかたなき御思ひ、年にそへてやむごとなうおはしつれば、[a]いつしか女御の宣旨などきこゆ。程もなく、やがて八月に后だちあれば、入道殿も、齢の末にいとかしこくめでたしと思す。北山にまかで給へるころ、行幸あり。八月十五日の夜、名をえたる月もことに光をそへたる所がら折からおもしろく、めでたきことども花やかなるに、御姉の永福門院より、今の后の御方へ、御消息きこえ給ふ。

Bこよひしも雲井の月も光そふ秋のみ山を思ひこそやれ

御返しは、「まろきこえん」とのたまはせて、内の上、

むかし見し秋のみ山の月影を思ひいでてや思ひやるらん

御門のおなじ御腹の前斎宮も、皇后宮に立たせ給ふ。御母准后も院号ありて、談天門院とぞきこゆめる。よろづ花やかにめでたきことどもしげうきこゆ。

内には、万里小路大納言入道師重といひし女、大納言の典侍(すけ)とて、いみじう時めく人あるを、堀川の春宮権大夫具親の君、いと忍びて見そめられけるにや、かの女、かき消ち失せぬとて、①求めたづねさせ給ふ。二、三日こそあれ、程なくその人とあらはれぬれば、上いとめざましく憎しと思す。やむごとなき際にはあらねど、御[b]おぼえの時なれば、厳しくとがめさせ給ひて、げに須磨の浦へもつかはさまほしきまで思されけれども、さすがにて、つかさみなとどめて、いみじう勘(かう)ぜさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山庄にこもりゐぬ。花の盛りにおもしろきをながめて、

Cうきことも花にはしばし忘られて春の心ぞむかしなりける

典侍の君はかへりまゐれるを、「つらしと思すものから、うきにまぎれぬ恋しさ」とや、いよいよらうたがらせ給ふを、さしもあらず正身(さうじみ)はなほ好き心ぞたえずありけんかし。

たえはつる契りをひとり忘れぬもうきもわが身の心なりけり

とて、②ひとりごたれける。

（『増鏡』）

注

今の上・内の上・御門・内・上　すべて後醍醐天皇。

北山　平安京北西部の地名。西園寺家の邸宅があった。

皇后宮　ここでは、天皇の近親者を優遇する尊称。

岩倉　平安京北東部の地名。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　いつしか

1　しばしば　　2　ようやく　　3　いつであったか

4　いつになっても　　5　はやくも

b　おぼえ

1　評判　　2　情趣　　3　寵愛　　4　記憶　　5　自信

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

この御時に元興寺に智光頼光といふ二人の僧ありき。をさなくよりおなじところにて学問をす。頼光、身にするつとめもなく、また人にあひてものなど言ふこともなし。ただ、いたづらにして月日をすぐす。智光あやしみをなして、ア「いかにいたづらにておはするぞ」と問へども、ふつといらふることなし。

かくておほくの年をへて頼光うせにき。智光なげきて、「[a]とじごろの友なりき。いかなるところにか生まれぬらん。おこなひすることもなく、ものをだにもはかばかしく言はざりつれば、後の世のありさまいとおぼつかなし」と思ひて、二三月のほど、「頼光がありどころ知らせ給へ」と仏に祈り申ししほどに、智光、夢に頼光がゐたるところへゆきて見れば、たとへんかたなくめでたし。智光、「これはいかなるところぞ」と問へば、頼光、「これは極楽なり。[A]なんぢあながちに祈りつれば、わが生まれたるところを見するなり。なんぢがあるべきところにあらず。とく帰り[B]ね」と言ふに、智光、「われ浄土を願ふ身なり。いかでか帰らん」と言ふ。頼光、「イなんぢ、させるおこなひをせず。しばしもいかでかこのところにとどまらん」と言ふ。智光、「なんぢ、世にありし時、させるおこなひもし給はざりき。いかにしてこのところには生まれ給へるぞ」と言ふ。頼光、「いかでか知り給はん。昔、経論を見給へしに極楽に生まれんことといとかたくおぼえしかば、ひとへに世のことを捨て、もの言ふことをとどめて、心の中に弥陀の相好、浄土の荘厳を観じておほくの年をつもりてわづかに生まれてはべるなり。なんぢ心乱れ善根少なくて、浄土へ参るべきほどにいまだ至らず」と言ふを、智光聞きて泣き悲しびて、「いかにしてか決定して往生すべき」と問ひしかば、頼光、「仏に問ひ奉れ」とて、智光を[b]あひぐして仏の御前に参りぬ。智光、仏を礼拝し奉りて、「いかなることをしてかこのところに参るべき」と申しき。仏、智光につげてのたまはく、「仏の相好、浄土の荘厳を観ずべし」と。智光、「この土の荘厳心もまなこもおよばず。凡夫はいかでかこれを観ずべき」と申ししかば、仏、右の御手をささげ給ひてたなごころのうちに小さき浄土をあらはし給ひき。智光、夢さめてこの浄土のありさまをうつしかかせて、朝夕にこれを観じてつひに極楽へ参りにき。

かかれば仏道はただ心によるべきことにはべり。

（『水鏡』）

注

この御時　孝徳天皇の御世。

設　問

（一）　傍線═══a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　としごろ

1　適齢　　2　年配　　3　長年　　4　ここ数年　　5　束の間

b　あひぐして

1　責め立てて　　2　だまして　　3　促して　　4　諭して　　5　伴って

次の文章は、江戸時代の紀行文の一節である。筆者は、明石の浦（今の兵庫県南部）をのぞみながら西へ向かっている。これを読んで、後の設問に答えよ。

阿波の鳴戸は西南にあたりてここら遠きにあらず。「かかる潮どろみとかいふものは、[a]かまへて空のここちかはるものになん」と、馴れたる人々はあやふがりて、「室の津はいづら。あらあやし」などいひあへるに、ほどなく波いかめしく立ちきて、風は思ふかたに吹かず、高東風（たかこち）といふものになりて、舟は横ざまにあらそひ走す。とかくするほどに、雨吹きまじりて紀の山々も雲に隠れ、尾上の鐘は思ひもよらで、ただ岩のみ鳴り響いて、舟をくつがへし人をのまんといかり来る波、なからん洞を見せ峰を作りておどろかしゆくも、舟子はことともせず立ちあがりて、櫓拍子をそろへ差し向かへば、さすがに波はさと別れて、「西北にものこそ見ゆれ。あはれ漕ぎつかん」とあせるを聞けば、江島・倉掛とかいふなるよし、ここらいとむつかしき灘なるゆゑに、越えなばことなかるべしと、命をあわの軽きに[b]たぐへて、笠も着ずしぶきに向かひ、高潮をしのぐなるべし。我はかねて「かかるべし」と思へば、おそろしきことにおぼえず。馴れたる人々は身をそば立てて天にいのり、「かしこの浦につけ給へ」と手を作りて拝みもするに、「はや、かなふまじき」などいふ声に、「[A]さあるものかは」と思ひて、苦より四方のけしきを見れば、舟はただ空に浮かみて波は八重立つ山のごとく、いづこの浦ともおぼえねど、[B]「あなたぶと、命は拾ひぬ」といふを聞くに、これなん江島の湊といふなるよし。うちおどろかれて起き出でたれば、乗り合ひの人「なめげなり」といふに、「[C]我ほどものおぢするものもなく、日ごろは狸のわざするといふことだにも語らず。舟はいかならんと思ひゐたるに、我ながらおそれはべらず」といへば、老いたる人ありて、「誠に道を知るものはおそるといへり。我々はよく知りさむらふ。吾子がこの舟における、三歳の芥児（がいじ）に似たり」とて笑ふ。

荒れし野分のあしたのごとく、いたう濡れたる舟どもの、この湊にいくつもかかりて、おのがじしさへづりあへり。けふは殊更に吹く風の、雲の足おどろしく、ここらのあたり漕ぎはなれず。「さてはあやふかりしものを」と、誠にけさはおどろかれぬる。

さりや氷いはふ日とて、干せる餅飯などとり出でて朝茶こころよく群れてのむ。

あらし聞く舟やこころの氷室守（ひむろもり）

注

鳴戸　淡路島と四国の間にある鳴門海峡。

潮どろみ　潮がよどんだ状態。

室の津　今の兵庫県南部の瀬戸内海に面した港。

尾上の鐘　「高砂の尾上の鐘の音すなり暁かけて霜や置くらん」（『千載和歌集』）などに詠まれた鐘。

江島・倉掛　ともに瀬戸内海の島。

なめげなり　ここでは、呆れたの意。

氷いはふ日　六月一日の賜氷節。朝廷に氷室から氷を献上する日。

（建部綾足『紀行』）

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　かまへて

1　たまに　　2　決して　　3　用心して　　4　一瞬で　　5　きっと

b　たぐへて

1　競って　　2　ともなって　　3　ひっぱって　　4　なぞらえて　　5　結んで

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

朝倉や木のまろ殿に我居れば名のりをしつつ行くはたがこぞ

この歌は、むかし、天智天皇、太子にておはしましける時、筑前の国に朝倉といへる所に、ァしのびて住み給ひけり。その屋をことさらに、Aよろづのものをまろに作りておはしけるにより、木のまろ殿とはいひそめたりけるなり。Bぃ世につつみ給へることありて、都にはえおはせで、さるはるかなる所におはしけるなり。さて、つつみ給へるが故に入りくる人に、「必ず問はぬさきに、名のりをして出で入れ」と、起請を仰せられたりければ、必ず出で入る人の、名のりをしたるとぞ申し伝へたる。この歌を本体にして、木のまろ殿に名のりをして詠むなり。

大斎院と申しける斎院の御時に、蔵人惟規、女房に物申さむとて、しのびて夜、参りたりけるに、侍どもみつけてあやしがりて、「いかなる人ぞ」と、問ひ尋ねければ、①隠れそめてえ誰ともいはざりければ、御門をさしてとどめたりけるに、かたらひける女房、院に、「cかかる事なむ侍る」と申しければ、「あれは、歌詠む者とこそ聞け。とく、ゆるしやれ」と、②仰せられければ、ゆるされて③まかり出づとて詠める歌、

神垣は木のまろ殿にあらねども名のりをせねば人とがめけり

と詠めるを、斎院聞こし召して、あはれがらせ給ひて、「この木のまろ殿といへる事は、我こそ聞きし事なれ」とて、仰せられける事を、女房ィうけたまはりて、この惟規に語りければ、「この事、詠みながら、くはしくも知らざりつる事なり」とて、「この事のわびしかりつれば、この事をよくうけたまはらむとて、ありける事なりけり」とて、よろこびけるとぞ、盛房語りし。その惟規が先祖にて、よく④聞き伝へたるとぞ。

（『俊頼髄脳』）

注

院　大斎院のこと。

盛房語りし　惟規の子孫である盛房が筆者に語った。

設　問

（一）　傍線――ア・イの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア　しのびて

1　訴えて　　2　隠れて　　3　渡って　　4　慕って　　5　讃えて

イ　うけたまはりて

1　拝見して　　2　申しあげて　　3　お引き受けして

4　参上して　　5　お聞きして

次の文章は、松陰大臣の娘である女御が、帝の御子を出産する直前の様子を描いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

女御の御産の頃も近づかせ給ひければ、「松陰殿に渡り給ひなん」とのたまはすれども、一夜がほども隔て給はんことをただに思して添ひおはしましければ、「内裏にては忌むなることを」とて、南殿の御会におはしましけるままに、人々はかりて御車に奉らす。

四条京極あたりを過ぐさせ給ひけるほどに、御簾の下よりあやしき風の吹き入りけるに、御心地の乱りがはしくならせ給ひて、いといたうなやませ給ひけるに、御供のかぎり、足をそらにして慌て迷ふ。「されど、ここもとにてはいかがはせ[1]ん。御車を急ぎて」と、言ひののしる。からうしてァ入れ奉るに、大臣も門の外まで出で給うて、「こはいかにせん」とて、共に御心も乱るるほどに思すれど、降ろし奉りて、御枕を離れ給はねども、我かの御気色のいとまさらせ給へば、「上に奏し奉らんも、さこそ御気色のおはしますらん」と、恐れ給へらるれども、「Aさてやは、やまん」とて、告げさせ給ひければ、「さればよ。御名残のつきすまじきにてありつるは、かかることにてこそあらめ」など、その際を知らせて、「B誰がはからひにかありつる。我も行かではえあるまじけれ」と、おどろおどろしく騒がせ給へれど、「軽々しき行幸は、世の人の思は[2]んことも候ふなれば」とて、世に数へらるるほどの尊き僧たち、陰陽の司、御宝の剣などを遣はさる。夜も昼も御使ひの行き交ふさまは、いとあわただし。

御修法の声、絶ゆる間もなく、護摩の煙の立ちさらでも、いささかの御験だに見えさせ給はねば、島より伴ひ給ひし阿闍梨の、須磨より帰り給はんとのたまへるを、「ここまでいまして、故郷を見給はぬことやある」と相具し給へるを、賀茂川の御堂に据ゑさせてありけるを召し給ひて、かかる御悩みに見るめも暗くなりて、C共に絶え果つべき心地のし給ふなり。さもおはせば、御後の世までも心の闇に迷ひぬべければ、灯火となりぬべき御わざのことまでィ沙汰しのたまひて、御涙ぐませ給へば、阿闍梨も「よよ」と泣き給うて、「aただならぬ御身の上には、物の怪などの付き添ふためしのいと多く候ふなり。さあら[3]んには、尊き僧たちのあまたましまさんには、やがてそれと知られ給はんものを、日にそひてbあつしく悩ませ給ふら[4]んこそ心得られね。いかにしふねき魂なりとも、名告(なの)りをせんほどのしるしはありな[5]ん。

されども、世に数まへられぬ身の、やんごとなき中に出でまじらはんも、目立つべかめれば、物を隔てて御声をだに聞かましかば」とのたまはすれば、「何かは」とてウ召し具し給うて、御屏風を隔て据ゑさせ給ひけるに、あやしき御声の折々うち咳かせ給へれば、「されば よ」と思す。

（『松陰中納言』）

注

松陰殿　女御の父、松陰大臣の邸。

内裏にては忌むなること　宮中での出産は穢れとしてはばかられた。

南殿の御会　宮中の紫宸殿で行われる宴。

御宝の剣　安産守護のための剣。

島より伴ひ給ひし阿闍梨　松陰大臣が、隠岐島から連れてきた高徳の僧。

心の闇　「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」（『後撰集』）に依拠した表現。

灯火となりぬべき御わざのこと　死んでしまった時の葬儀の準備。

設問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ただならぬ

1　身分の高い　　2　妊娠している

3　里帰りしている　　4　悲しみに暮れている

5　うらやましがられている

b　あつしく

1　情愛が深く

2　信仰心が強く

3　気温が高く

4　動揺が激しく

5　容態が重く

次の文章は、後白河院の自伝的文章『梁塵秘抄口伝集』の一節である。この箇所では、年老いてから院の今様(平安時代末の流行歌謡)の師匠となった乙前の昔語りを記している。これを読んで、後の設問に答えよ。

この乙前は、疾く入り籠りにければ、伝へたる弟子どものなかりけり。

中納言家成卿の、「ささ浪に歌教へよ」とて、家へ遣られければ、足柄・黒鳥子・伊地古・旧河・旧古柳・田歌など教へたりしかど、あまり車立てながらあまた歌を習ひ候ひしかば、たがふ節も候ひしかど、ₐあながちに徹して教へむとも思ひ候はで、ことに直すことも候はず、みなも教へ候はざりしかば、伝ふるにはおよび候はざりき。

と、乙前申しき。ₑそれにあはせて聞きあはせしに、振も似ず、たがふ節もおほかりき。このささ浪は、船三郎が子にて、その様を習ひて歌ひたれば、振はその振にて似ぬにや。ₐおほかたは、歌ふなりけり。さしては教へたる弟子もなし。

「忉利・初声、みなわが弟子と人は知りて候へど、ひがごとに候ふ。清経ぞ教へ侍りしか。あやまりて、目井に『さもあらむ秘歌、疾う疾う教へよ』と清経が申し候ひしをᵢ『それば、さらでありなん』とわが申し候ひしかば、みな、さ心得たり」と目井申しき。忉利・初声を、あまりに明け暮れ責ためてぞ歌はせける。夜はあまり眠たしとᵇわびしがりて、忉利は外へ立ち出でて、水に目を洗ひ、まつ毛を抜きなどしけれど、なほ眠たがりてぞありける。あまり夜ごとに明かして、夜明くれど蔀しあげで歌ひければ、乙前、「世の常ならぬことかな。夜明くれば蔀はあげ、暮るればおろすこそ、常のことにてはあれ。いまいましく、またかしがましさよ。ᴮ時々はさなき折もあれかし。むつかしく」など言ひければ、清経、「などかく歌をば憎むぞ。若からん時こそ、かやうにてもあらめ、年老いて目たつる人もなからむ折は、世絶えせぬものなれば、歌好ませたまふ上臈もおはしまして、歌の節のおぼつかなからむには、それがしこそ知りたらめとて尋ね来る人もあらむに、歌を知りてこそ、老いの末にはさやうにてもあらめ」と申し候ひしが、よく申し候ひけるとおぼゆ。

と、我に歌教へ候ひし折、乙前申しき。

（『梁塵秘抄口伝集』）

注　中納言家成卿　藤原家成。ささ浪の庇護者。

ささ浪　今様の歌い手である女性芸能者の名。

足柄・黒鳥子・伊地古・旧河・旧古柳・田歌　いずれも今様の種類。

振　今様の曲調。

船三郎、忉利・初声　いずれも今様の歌い手である女性芸能者の名。

清経　源清経。目井の庇護者。

目井　乙前に今様を教えた女性芸能者の名。

我　後白河院を指す。

設　問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　あながちに

1　勝手に　　2　無理に　　3　遠慮がちに　　4　穏便に

5　不用意に

b　わびしがりて

1　残念がって　　2　恥ずかしがって　　3　さびしがって

4　つらがって　　5　不安がって

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

わが庵(いほ)は三輪(みわ)の山もと恋しくばとぶらひ来ませ杉立てる門(かど)

古今十八にあり。昔、伊勢の国あふぎの郡にはべりける人の深き山に入りて、鹿待ちはべりけるほどに、風吹き雨降り、気色ただならずして来るものあり。形黒くして、たけ高し。目は照れる星のごとくにして、稲妻の光に似たり。猟師これを射てあてつ。Aどどまらずして、なほきたりむかふ。また、射てあつ。そのたび風雨やみて①帰りぬ。夜の明くるままに、血のあとにつきて尋ね至る。遥かなる山中に、すこしァはれて野の中に塚あり。その中に入れり。塚の前に神女ありて、この猟師を招く。Bすなはち弓に矢をはげてすすみよる。神女恐るる気色なくて曰く、「なんぢが射たりつるものは、この塚に住む鬼なり。我この鬼にとられて年ごろ、この塚に住めり。なんぢ、この鬼を殺すべし」。ここに猟師、柴を刈りて、その塚の口に入れて火をつけて焼き殺しつ。その後この神女を具して家に帰りぬ。

あひ住むこと三年になり、猟師富み栄えぬ。また児ひとりを生ましめたり。その時この男ィあからさまにあるきけり。そのまにこの女うせぬ。帰り来てみるに女はなくて、児ひとりあり。泣き悲しみて②尋ねありけど行方を知らず。しばらくありて、この児またうせたり。いよいよ泣き悲しむほどに、この女つねに居たりけるところを③見るに、「三輪の山もと杉立てる門」とばかり書き付けたり。これによりて大和の国に尋ね至りて、三輪明神の社に参りて、この女にあふべきよしを祈り申すほどに、その社の御戸を押し開きて④見えたまふ。児も同じく見ゆ。この男の志、切なることを⑥見て、共に誓ひて神になれりと見えたり。

Cこれによりてその神の祭をば、伊勢の国あふぎの郡の人おこなふなり。それよりしるしの杉とは言ふなるべし。諺に曰く、鬼に神とらると言ふはこれなり。

（藤原範兼『和歌童蒙抄』）

注

三輪の山　奈良県にある山。

古今十八にあり　「わが庵は」の歌は『古今和歌集』巻第十八に収められている。

設　問

（一）　傍線――ア・イの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア　はれて

1　視界が開けて　　2　人里を離れて　　3　天気が回復して

4　山を切り開いて　　5　心がさわやかで

イ　あからさまに

1　むなしく　　2　あらわに　　3　こっそり　　4　あちらこちら

5　ほんのしばらく

次の文章は、明恵上人の伝記の一部であり、現在の京都市にある高雄山神護寺で九歳で出家した後のことを記している。これを読んで、後の設問に答えよ。

十二歳の時、思ふやう、真正の知識を求めて、正路を聞かずんば、徒らに心の隙のみ費して、得道の益あるべからず。大なる損なるべし。いはんやまた[A]生死速やかなり。後を期すべきにあらず。急ぎ正知識を求めて、なほ山深き幽閑に閉ぢ籠りて修行せんと思ひて、[a]すでに高雄山を出でんと思ひぬ。よりて薬師堂に詣でて暇を申し、また鎮守八幡大菩薩にも暇を申して、暁、罷り出でんと寝たる夜の夢に、すでに高雄を出でて、三日坂まで下りたれば、路に大蛇、頭を捧げて横たはり向かふ。また、八幡大菩薩の御使とて、大きなる蜂の四、五寸ばかりなる、飛び来りて言はく、「なんぢ、この山を去るべからず。もし[b]おして去らば、前に難に遇ふべし。未だその時節到来せざるが故に、道行また成ずべからず」と言ふと思ひて、夢覚めぬ。さては子細こそあらめと思ひしかば、このたびは思ひ止まりぬ。

十三歳の時、心に思はく、今ははや十三になりぬ。すでに年老いたり。死なんこと近づきぬらん。老少不定の習ひに、今まで生きたるこそ不思議なれ。古人も学道は火を鑽るがごとくなれとこそ言ふに、悠々として過ぐべきにあらずと、自ら鞭を打ちて、昼夜不退に道行を励ます。ある時は後ろの山の、木の空に木の葉深く積もれる上に常に行きて座し、ある時は見解おこるやう、かかる五蘊の身のあればこそ、若干の煩ひ苦しみもあれ。[B]帰寂したらんにはしかずと思ひて、いかなる狗狼・野干にも食はれんと思ひ、三昧原へ行きて臥したるに、夜更けて犬ども多く来りて、傍なる死人なんどを食ふ音してからめけども、我をばよくよく嗅ぎて見て、食ひもせずして、犬ども帰りぬ。恐ろしさは限りなし。このやうを見るに、さてはいかに身を捨てんと思ふとも、定業ならずは死すまじきことにてありけりと知りて、その後は思ひ止まりぬ。「おとなしくなりて後、このことを思ふに、その時の見解にて死にたらましかば、あさましきことにてありなまし。はかなかりけることかな」とて、自ら笑ひたまひけり。

（『明恵上人伝記』）

注

真正の知識・正知識　ものごとを正しく分別する方法。

正路　人として守るべき道理。　得道の益　仏教の修得に役立つこと。

薬師堂・八幡大菩薩　神護寺は、本尊の薬師如来を薬師堂に安置し、境内に守護神として八幡大菩薩を祀っていた。

火を鑽る　棒や石を擦り合わせて火をおこすこと。敏捷に作業を進める必要がある。

見解　洞察。　五蘊　人間を形成しているという、肉体・感覚など五つの要素。

狗狼・野干　犬、狼、狐など。　三昧原　墓地。

からめけども　からからと鳴り響くが。　定業　前世の善・悪の行いの結果として現世の楽・苦が定まっていること。

設問

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　すでに

1　すぐにも　2　すべて　3　とっくに　4　まぎれもなく

5　すんでのところで

b　おして

1　静かに　2　気ままに　3　一緒に　4　即座に

5　無理に

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

中ごろ、播磨の国に、堕ちたる僧、ゆきとまりてをるありけり。するわざもなければ、朝夕もなげかしくて、田をつくりてなむ身をすぐしける。秋刈り冬納むるわざも、おもふほどもえなかりけるなめり。所の長なりけるもの、なすべきものに未進ありとて、とらへて牢にこめたりけり。ァさすがにほどある事なれば、つひにはいでにけるなるべし。

さて、帰りて、妻子にいふやう、「いまは我にいとまくれよ。ゆるぎなく思ひかためたるなり」とて、ある山寺にのぼりぬ。ことわざなく一すぢに念仏をぞ申しける。人々みなあはれみて、「要用の事はのたまはせかけよ」と、我も我もといふ。

さて、しばしはさるほどの御料を、日に二たび食ひけるが、後には一日に一合の御料を一たびなむ食ひける。

さて、三年といふに、おのが庵のまへに札を書きて立てたり。なにわざを[a]愁へたる札ぞと見れば、「ひさしく世にありても、その用なく侍れば、心と命を捨ててむと思ひ侍るなり。このうへの山に、見おきたる岩屋の侍るにまかりなむこもりぬる。もし我を我とおぼさば、ものさわがしくたづねとぶらひ給ふ事なかれ」とぞ書きたる。人みなあはれみて、たづねとふ事もなし。

さて、おのづから日ごろにもなりにければ、心ある人々少々たづねありきけるに、西むきにありける岩屋に、生きたるやうにて、手をあはせ西にむかひて死にたりけり。時の人、いみじくあはれがりけり。その名をば発心房とぞいひける。

いとあはれなりける事かな。げにいたづらにあけくれて、つひに病にとりこめられなむのちには、身もよわく心もおぼれて、ィ思ひのごとくもなくてをはりをとらむ事、本意なくぞ侍るべき。わが心のたがはぬとき、仏の誓ひをあふぎて、命を捨ててむ事、かしこかるべし。

誰をあはれまむと誓ひ給へる仏なればか、さばかり惜しうする命をたてまつらむ人を見すぐし給ふべき。手足の指を焼きて仏に供養ずるをば、「法花経」にもうへなき功徳とほめたり。「梵網経」等にもあまたすすめたり。いはむや、この命をみな仏にたてまつりて、この功徳をささげて、うき世をいづる種とせむとねがはむは、

ᵇゆゆしき心ざしなるべし。

また、求道の、寒きたり木の実つきて、山をいでて里にむかふに、山にすむ大蛇の、いまより後、経のこゑをきかざらむ事をかなしみて、眼に血の涙をながして、高き木にのぼりて、はるかに見おくるに、やうやうとほくなりつつ、つひに見えずなりぬれば、罪のほどをかなしみて、さまざまの善心をおこして、木のうへより身を投げたりけるが、都率天に生まれて、昔のかばねを供養ず、など経には侍るぞかし。唐土の伝には、釈の恵猛高岸より身を投げて死ぬるに、いまだなかばのほどにて、紫雲、身を纏ふとも侍り。また、明安といふ尼、江のほとりに身を投ぐるに、金色の光ありて水のなかにいるとも侍るめるは、いみじく貴くこそ侍れ。

しかはあれど、かやうの事、昔より今にいたるまで、とかくさまざまに一かたならずいふ人もあるべし。詮は、ただわが心にはからひて、すすみもしりぞきもすべきにこそ。善導和尚、あまねく勧め、義浄三蔵はひろくいましめ給へり。これみな機をはかりてのたまふなるべし。よくよくおもふべし。

（『閑居友』）

注

求道　求道者。

昔のかばね　蛇身であったときの屍。

善導和尚・義浄三蔵　ともに中国の唐代の高僧。

都率天　弥勒菩薩の住む浄土。

紫雲　紫色の雲。浄土に往生できるしるしの一つ。

設　問

（一）　傍線═══a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　愁へ

1　訴え　　2　悲しみ　　3　知らせ　　4　恨み　　5　頼り

b　ゆゆしき

1　理由のある

2　忌まわしい

3　立派な

4　あきれた

5　みやびな

次の文章は、飛鳥井雅有の日記の弘安三年（一二八〇年）三月七日の部分である。前日には、宮中で催された蹴鞠の後、女房たちと男たちが車を繰り出し花見に出かけたことが記されている。これを読んで、後の設問に答えよ。

七日。花山院右府入道の粟田口の山荘へ新院御幸なるとて、御鞠あるべし、まゐるべしとて、入道のもとよりも、また奉行重清がもとよりも使あり。足を損じてまゐらず。「今日は殊に風荒し。明日とも頼まれぬ風の前の花なり。昨夜の名残も堪へがたし。限りの梢ゆかし」など、女房の中より申し出ださるれば、昨夜なかりし殿上人ども、「今日見ざらむには、この春はさてこそは」とて、Aこの翁一人を何の故となく責めゐたり。「今日は、御人少なり。なまかりそ」とて、御連句の座に能き発の尉を召し置けとて、捉へられて伺候したり。残りの者ども、季顕朝臣、業顕等、「いかがして」とやうやうに申す。雅藤、職事（しきじ）なれど、aすき心殊にある者にて、御連句に候ふもb心そらなり。俊光も執筆（しゅひつ）するそらもなし。

やうやうにして逃げ出でて、女房にこの翁の車をぅまゐらす。隆氏朝臣車に込み乗りて、千本へ行く。暮るる程の花の色いとおもしろし。さる程に、雨おびたたしく降る。いづくよりか尋ね出でたりけむ、傘を一つ求め出でたり。ィ「濡るとも花の陰にこそ」とて、なほ去らず。しばしこそあれ、あまりなれば濡れじと、「傘の下に隠れむ」と言ひて走り入りぬ。その後、人々みなかがまり立てり。雨止みげもなく降れば、長廊のもとへ女房車遣り入れて、降ろしつ。

晴れ間待つ程、「いざ念仏申させて聴かむ」とて、僧どもそそのかして、釈迦念仏一時、礼讃一時申さす。その程にぞ晴れぬる。

「この雨は、花のためは憂けれど、菩提の種とはなるらむ」など、女房も興に入りて申さる。思ひ出でなるべし。

帰りざまに、尾張守仲綱入道、もとより籠りゐて侍りしがもとへ、駆けて逃げ侍りし。

Bくれぬとて今日来ざりせば山桜雨より先の色を見ましや

みなみな人々は道よりあかれぬ。今、ただ雅藤、業顕ばかりにて帰りまゐりぬ。なほ雨降る。さらばとて、この人々を引き連れて、帰りて夜もすがら物語してぞ遊びぬる。

（『春のみやまぢ』）

注　花山院右府入道　藤原定雅。前の右大臣で、康元元年（一二五六年）出家。
粟田口　平安京東南部の郊外の地名。
新院　亀山院。
奉行　蹴鞠の会の責任者。
発の尉　連句（連歌）の発句に長じた老人。
職事　連句の座の責任者。
千本　平安京北西部の地名。
釈迦念仏　釈迦の涅槃（ねはん）図を懸けて「南無釈迦牟尼仏」を唱えること。
礼讃　三宝（仏・法・僧）を礼拝しその功徳を称える経を唱えること。

設　問　（一）　傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　すき心

1　好奇心　　2　同情心　　3　よこしまな心

4　みやびな心　　5　好色な心

b　心そらなり

1　気がはやっている　　2　気が立っている　　3　気を落としている

4　気に病んでいる　　5　気もそぞろである

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、奈良の京に一人の僧ありけり。妻子を具せりといへども、日夜に方広経を読誦す。しかるに、この僧、銭を貯へて人に貸して員を倍して返し得るをもちて、妻子を養ひ世を渡りけり。またこの僧、一人の娘あり。夫に嫁ぎて同じ家に住む。

安倍の天皇の御代に、かの娘の夫、陸奥国の掾に任ぜり。しかるに、舅の僧の銭二十貫を借用してかの国に下りぬ。一年を経るに、借れるところの銭一倍しぬ。返り上りてアわづかにもとの員を返して、一倍せるところの銭を償はず。年月を経るに随ひて、僧、聟にこれを責め乞ふ。聟返すべき力なくして心に思はく、ひそかに舅を殺してむと思ふ間、聟、遠国に行かむとすることを謀りて、舅に語りていはく、「かの国に行きて、この銭を償はむと思ふ。さればともに具して行け」と。

舅、聟のいふに随ひて行く間、相ともに同じ船に乗れり。その時に聟、船人に心を合せて、舅の僧を捕へて、四つの枝を縛りて海のなかに落とし入れつ。返りて娘に告げていはく、「なんぢが父の大徳は、途中にして船より海に落ち入りて死にき。救ひ取らむとせしかども、力及ばざりき。われも、ほとほとしきほどにて生きたるなり。されば、われともにかの国に下らずして返れり」と。娘これを聞きて大きに泣きかなしびていはく、「かなしいかな、再び親の貌を見ずなりぬること。われ、いかでかの海の底に入りて空しき骸を見む」と泣きかなしぶこと限りなし。

しかるに僧は海の底に入れりといへども、海の水、浮かび漂ふあたりによらずして、僧、方広経を誦す。二日二夜を経るに、船に乗りたる人この所を過ぐるに、船人の見るに、海のなかに波に随ひて浮きて漂ふ者あり。これを引き上げて見れば、縛られたる僧なり。貌の色、替らずして、衰へたる気色なし。船人、大きにあやしみて、「何人ぞ、かくは縛られたるは」と問へば、「われはしかじかの者なり。盗人にあひて縛られて落とし入れられたるなり」と答ふ。また問ひていはく、「なんぢ、いかなる勤めありてか、海に入るといへども死なざる」と。僧のいはく、「われイさせる勤めなし。ただ日夜に方広大乗経を誦し持つ。定めてその力なるべし」と。但しA前のことをば語らずして、もとの里に返らむことを願ふ。船人これを聞きて、あはれんで家に送りつ。

しかる間、聟、その家にして、舅の僧の後世をとぶらはむがために、僧供をまうけて自ら捧げて僧に分かつ。しかる間、舅、家に至りて、面を隠して僧のなかに交りて僧供を請く。聟、ほのかにその貌を見つけて、驚き怖れて隠れにけり。B舅これを怨まずして遂に顕さざりけり。命を生くこと、偏に方広大乗の力なりと知りて、いよいよ誦すること怠らず。

これを思ふに、聟の殺すも邪見なるべし、また舅の銭を責むるも不善のことなりとぞ、聞く人いひ謗りけるとなむ、語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』）

注

一倍しぬ　利息が元金と同額になった。

四つの枝　左右の手足。

邪見　因果の道理を無視する誤った考え。

設　問

（一）傍線――ア・イの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア　わづかに

1　すぐに　　2　きちんと　　3　少なめに　　4　かろうじて

5　あきらめて

イ　させる

1　強いられた　　2　ものにした　　3　やり残した　　4　まかされた

5　これといった

次の文章は、帝が、寵愛する後涼殿女御の局で、隠してあった恋文を見つけ、ひそかに持ち帰った後の様子を描いたものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

いつしか引き開けさせ給へれば、何にてかはあらむ、手はその人とも見えず、御覧じ知らぬにはあらねど、ことのさま・筆のゆくち、「権中納言の書きかへたるなめり」と見ゆるを、うち返し「僻目(ひがめ)ならむ」と御覧ずるに、まづ憂きはさしおかれて、「よしなきものを①取りてけるかな。見つけていかにはしたなく思さむ」と、いとほしきにうちぞ泣かれさせ[　　]。

さるは心の通ひけるとも見えず。「一行(ひとくだり)の返りごとをだに見ず」とは見えたり。「こはいかにありけることぞ」とぞあさましううち返し御胸ふたがりて、久しうながめおはします。

「手をだにさだかに見てしがな。いかにもいみじうをかしげに書きたるを、さば右大将にや」など、御覧じ知らぬあまりに、この人々の歌など書きたるを取り出でて御覧じ合はすれど、わざとそれといふばかりはあらず。権中納言にはいとよう覚えたり。「この人々ならで、かばかりは誰かは」など思しめぐらすもいとぞおぼつかなきや。「知りけりとも知られぬわざもがな」とさへわびしう思し召さるれど、これを御覧じわびても、いとおぼつかなければ、しばしえさし置かせ給はず。

上帰りおはしまして後、宰相、さし寄りてけしきばみかい探りて去ぬれば、女御は「取りつるなめり」と思す。宰相は「よく隠し給ひてけり」と思へば、誰もそよとうなづき合はすることこそ何ごとも晴るくれ、いとほしきことも知らず。

上は、御覧じつくるより、「よろづのことは忘れて、ただひまなくもてなすばかり」とのみ思し召し取れば、これにしも御[a]心ざしまさるべし。されど、皇后の宮のおはしますほどは、重き方の御おぼえこよなきに、夜を経てしも②まうのぼり給はぬは、ましてうしろめたうぞ思し召し明かすべき。「いかでなほいぶせさ晴るけやる方もがな」と、人にはのたまはせ出づべきやうなければ、御心ひとつを悩ませ給ふもあぢきなし。

権中納言は、臥して思ひ起きて思ひ、身を砕き給ふ果て果ては、まめやかに心地も悩ましうせむ方なくのみ覚ゆれば、禊(みそぎ)もせまほしう、果て果ては「いかで思ひやむわざもがな」と思ふあまりに、神の御験(しるし)やと、にはかに熊野詣で急ぎたち給ふを、宮も母宮も、「こは何ごとの御[b]心おきてぞ。近きほどだに、あまり物詣でなど

にすすみぬる人は、かへりて軽き方にいはるるものを、さる遠道にだにあやしきさまにて出で立ち給はむよ」と、あさましう思したれど、せめて思し立ちぬればいかがはせむ。

内には、けしきもゆかしう思し召しわたるに、久しう悩ましきよし③奏して参り給はぬ果て果ては、かやうの山踏みし給ふを、「なほさなりけり」と思し召し合はすべし。

（『我が身にたどる姫君』）

注　筆のゆくち　文字が書かれている様子。

宰相　宰相の君。後涼殿女御付きの女房。

皇后の宮　後宮の女人のひとり。後涼殿女御より先に入内した。

禊　身を洗い清めること。ここでは、今後いっさい恋をしないという誓いを表す。

設　問

（一）傍線――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　心ざし

1　愛情　　2　感謝　　3　嫉妬　　4　信仰　　5　性格

b　心おきて

1　心あたり　　2　心がわり　　3　心くばり　　4　心づもり

5　心まかせ

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いにしへ、野干を神の体としたる社のほとりにて、きつねを射たる者ありけり。この者、とがありなしの事、陣の定めに及びて、諸卿さまざまに申しける中に、帥大納言経信卿申していはく、「白龍之魚勢、懸二預諸之密網一」とばかりうちいひてゐられたりけり。いみじき神なりとても、きつねのすがたにてはしり出でたらんを射たらんは、なにのとがかあらんといふ心なり。この事は、龍の魚のすがたになりて、浪にたはぶれてうかび出でたりけるほどに、預諸といふ者の網をひきけるにかかりてかなしきめを見て、大海にかへりて龍王に訴へければ、龍王ａことわりていはく、「ア なにしにか魚のすがたとはなりける。さればこそ網にはかかれ。今より後、さる事をすまじきなり」といひけり。今かくいふはこの事なり。

またある人申していはく、「射たりといふとも、その野干まさしく死にたるを見ずは、とがおもからず」と申す。この日の定文は、宰相中将隆綱ぞ書きける。Ａこの人のかたちを書くに、「雖レ聞二飲羽之号一、未レ見二首丘之実一」といふ秀句は出でくるなり。後三条院は、この定文を御覧じて、あまりに感ぜさせ給ひて、「ィ 隆綱が宰相中将を過分におもひけるは、ゆゆしき僻事なりけり。伊勢大神宮、正八幡宮いかがおぼしめしけん」とぞ仰せられける。

隆綱は、才智はありけれども、心ばへすこしあどなかりけり。雑色のこはき装束して晴れわたるを、よにうらやましき事にいひて、宇治の離宮の祭に、雑色の装束を一具儲(まう)けて、卿相の床下につきたりけるが、にはかにたちてかたかたによりて、はたと装束(しやうぞ)きて、馬長のともに、かちにてゆゆしくねりてわたりたりければ、もとよりみめよき人にてありければ、見物の者どもこれを見て、「ゆゆしき雑色かな」といひｂののしれども、すべて見知る人なし。おのづからぞ、「ゆゆしく宰相中将殿に似たるものかな」といふ者ありけれども、Ｂあまりに思ひよらぬ事なれば、いくほどなくしてことすぎにけり。このもしき事は、かなしくしえてけり。

（『続古事談』）

注

野干　きつね。

陣の定め　公卿の会議。

定文　帝に奏聞する文書。

飲羽之号　矢羽根が隠れるほど矢が深く刺さった時の叫び声。

首丘之実　首を丘に向けて死んだという事実。きつねはもとすんでいた丘に首を向けて死ぬという。

正八幡宮　石清水八幡宮。

設問

（一）傍線═══a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　ことわりて

1　返答して　　2　辞退して　　3　詰問して　　4　判定して　　5　釈明して

b　ののしれども

1　茶化したが　　2　けなしたが　　3　無視したが　　4　とがめたが

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

筆者は失恋の痛手から衝動的に都を離れ、しばらく遠江に滞在していたが、乳母が病気であるという知らせを受けて再び都に戻ることにした。

このたびはいと人少なに心細けれど、都をうしろにて来し折の心地にはこよなく、日数のすぐるも恋しき心地するぞあやにくに、わが心より思ひ立ちて出でぬれど、われながら定めなく、旅のほども思ひ知られざれど、いとはずに、日数もうららかにて、とどこほる所もなかりけるを、不破の関になりて、雪ただ降りに降りくるに、風さへまじりて吹きゆくも、かきくれぬれば関屋近くたちやすらひたるに、関守の懐かしからぬ面もちとりにくく、A何をがなとどめんと見出したるけしきもいと恐ろしくて、

かきくらす雪間をしばし待つほどにやがてとどむる不破の関守

京に入る日しも雨降り出でて、鏡の山もくもりて見ゆるを、下りし折も、このほどにては雨降り出でたりしぞかしと思ひ出でて、

このたびはくもらばくもれ鏡山人をみやこのはるかならねば

かく思ひつづくれど、まことにかの人をみやこは近き心のみばかりにて、いつを限りにと思ひかへすぞ、またかきくらす心地しける。ァ日たくるままに雨ゆゆしく晴れて、白き雲多かる山多かれば、「いづくにか」と尋ぬれば、「比良の高嶺や比叡の山などに侍る」といふを聞くに、はかなき雲さへ懐かしくなりぬ。

君もさはよそのながめや通ふらん都の山にかかる白雲

暮れ果つるほどに行き着きたれば、思ひなしにや、ここもかしこもなほ荒れまさりたる心地して、所々漏りぬれたるさまなど、何に心とどまるべくもあらぬを見やるも、いと離れまうきあばら屋の軒ならんと、ィそぞろに見るもあはれなり。老人(おいびと)はうち見えて、Bこよなくおこたりざまに見ゆるも、憂き身を誰ばかりかうまで慕はんと、Cあはれも浅からず。

（阿仏尼『うたたね』）

注

不破の関　岐阜県関ケ原にあった関所。　鏡の山　滋賀県の鏡山。歌枕。

離れまうき　離れがたい。　老人　年老いた乳母。

設問

（一）傍線――ア・イの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア　日たくる

1　日が変わる　2　日が隠れる　3　日が沈む　4　日が経つ

5　日が高くなる

イ　そぞろに

1　しみじみと　2　なんとはなしに　3　むやみに

4　さびしげに　5　じろじろと

次の文章は、本居宣長の紀行文の一節で、宣長一行が大和の国（現在の奈良県）膳夫村（かしわで）にある荒神の社に到着した場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

この社は、今ものする道のすこし北にて、この辺（わた）り天の香具山の北の麓なり。この山いと小さく低き山なれど、いにしへより名はいみじう高く聞こえて、天の下に知らぬ者なく、ましていにしへを偲ぶ輩は、書（ふみ）見るたびにも思ひおこせつつ、年ごろゆかしう思ひわたりし所なりければ、このたびはいかでとく登りてみんと、ア心もとなかりつるを、いとうれしくて、

いつしかと思ひかけしもひさかたの天の香具山今日ぞ分け入る

みな人も同じ心に急ぎ登る。坂路にかかりて左の方に、一町ばかりの池あり。いにしへの埴安（はにやす）の池思ひ出でらる。されどその名残など言ふべき所のさまにはあらず。いとしも高からぬ山は、程もなく登り果てて、峰にやや平らなる所もあるに、この近きあたりの者どもと見ゆる五、六人、芝の上に円居して酒など飲み居るは、わざと登りて見る人もまたありけり。さては蕨（わらび）採るとて、里の娘、嫗などやうの者二、三人、そのあたりあさり歩くも見ゆ。山はすべて若木の細枝原（しもとはら）にて、年ふりたる木などは、をさをさ見えず。峰はうち晴れて、つゆさはる所もなく、いづ方もいづ方もいとよく見渡さるる中に、東の方は、畝尾（うねを）長く続きて、木立も繁ければ、Aすこしさはりて、異方（ことかた）のやうにはあらず。この峰に、竜王の社とて小さき祠のある前に、いと大きなる松の木の枯れて朽ち残れるが立てる下に、しばし休みて、餉（かれいひ）など食ひつつ、四方の山々里々をうち見やりたる景色、言はんかたなくおもしろきに、「登りたち国見をすれば国原は」など、声をかしうて、若き人々のうちイ誦（ず）したる。さしあたりては、ましていにしへ偲ばしく、見ぬ世の面影さへ立ち添ふ心地して、

ももしきの大宮人の遊びけむ香具山見ればいにしへ思ほゆ

かの酒飲みゐたりし里人どもも、ここに来て、「国はいづくにかおはする」など問ひつつ、この山の古事（ふること）どもなど語り出づる。いとゆかしくて、耳留めて聞けば、大かたここによしなき神代のことのみにて、Bさもと覚ゆる節も混じらねば、なほざりに聞き過ぐしぬ。されど、見えわたる所々を、そこかしこと問ひ聞くには、よき博士なりけり。

まづ西の方に畝傍山、物にも続かず、一つ離れて近う見ゆ。ここより一里ありと言へど、さばかりも隔たらじとぞ思ふ。なほ西には金剛山、いと高くはるかに見ゆ。その北に並びて、同じほどなる山のいささか低きをなん、葛城山と今は言ふなれど、いにしへはこの二つながら葛城山にてありけんを、金剛山とは、寺建てて後にぞ付けつらん。すべて山も何も、後の世には、唐めきたる名をのみ言ひ習ひて、いにしへのは失せゆきつつ、人も知らず成りぬるこそ口惜しけれ。されど、またいにしへの名どもの、寺にしも遺れるが多きはいとよしかし。またその北にやや隔たりて、二上山、峰二つ並びて見ゆ。これも今は二上が岳と、例の文字の声に言ひなせるこそ憎けれ。

（本居宣長『菅笠日記』）

注　埴安の池　香具山の麓にあったとされる池。　畝尾　うねっている小高い所。

「登りたち国見をすれば国原は」　『万葉集』に収録されている、舒明天皇が香具山に登ってうたった長歌の一節。

設　問

（一）傍線――――ア・イの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア　心もとなかりつる

1　気ぜわしかった　　2　気がかりだった　　3　ぼんやりしていた

4　勇み立った　　5　待ち遠しかった

イ　誦したる

1　祈っている　　2　ささやいている　　3　叫んでいる

4　詠じている　　5　興じている

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

家隆は、四十以後、はじめて作者の[a]名を得たり。それより前もいかほどか歌を詠みしかども、名誉せらるることは、四十以後なりしなり。頓阿は、六十以後、この道に名を得たるなり。かやうに、昔の先達も、初心から名誉はなかりしなり。稽古、数寄、劫積りて、名望ありけるなり。

今の時分の人、いまだ、歌ならば一、二百首詠みて、やがて定家、家隆の歌を似せむと思ひ侍ること、[b]をかしきことなり。定家も「行かずして長途にいたることなし」と書きたり。[A]坂東、鎮西のかたへは、日を経てこそいたるべきに、ただ思ひ立ち一足にいたらむとするがごとしと云々。

ただ、数寄の心深くして、昼夜の修行おこたらず、まづなびなびと口がろに詠みつけなば、自然と求めざるに興ある所へ行き着くべきなり。

ただし、後京極摂政殿は、三十七にて薨じ給ひしが、生得の上手にておはしまして、殊勝のものどもあそばしき。[B]もし八十、九十の老年までおはしましたらば、いかになほ重宝どもあそばされむずらむと申し侍りし。[C]宮内卿は、二十よりうちになくなりしかば、いつのほどに稽古も修行もあるべきぞなれども、名誉ありしは生得の上手にてあるゆゑなり。生得の堪能にいたりては、初発心の時、便成正覚なれば、修行を待つところにあらず。

しからざらむ輩は、ただ不断の修行をはげまして年月を送るは、つひに自得発明の期あるべきなり。ただ、数寄に越えたる重宝も肝要もなきなり。上代にも、数寄の人びとは、古今の大事をも許し、勅撰にも入れられ侍り。まことの数寄だにあらば、などか発明の期なからむ。

（『正徹物語』）

注

なびなびと　のびのびと。

初発心の時、便成正覚　悟りを求めようと初めて思ったときに、すでに仏としての悟りが完成していること。『華厳経』による。

発明　真理を悟ること。

古今の大事　『古今和歌集』をめぐる歌道の秘事。

（一）傍線――――a・bの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a　名

1　雅号　　2　声望　　3　面識　　4　秀でた技能

5　名簿に載ること

b　をかしき

1　すばらしい　　2　おくゆかしい　　3　興味深い

4　適切である　　5　滑稽である

【解答一】2021 同志社大学 2/5,全学部(文系) 神 文 社会 法 経済 商 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化

(一) a 5 b 3

《出典》荒木田麗女「桐の葉」

【解答二】2021 同志社大学 2/6,学部個別 文 経済

(一) a 5 b 4

《出典》「藤の衣物語絵巻」

【解答三】2021 同志社大学 2/7,学部個別 政策 文化情報 スポーツ健康科

(一) a 1 b 3

《出典》今川了俊「道ゆきぶり」

【解答四】2021 同志社大学 2/8,学部個別 法 グローバル・コミュニケーション

(一) a 2 b 4

《出典》「増鏡」

【解答五】2021 同志社大学 2/9,学部個別 神 商 心理 グローバル地域文化

(一) a 5 b 2

《出典》清水浜臣「泊洒筆話」

【解答六】2021 同志社大学 2/10,学部個別 社会

(一) a 2 b 1

《出典》「今昔物語集」

【解答七】2020 同志社大学 2/5,全学部(文系) 神 文 社会 法 経済 商 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化

(一) a 3 b 4

《出典》「今昔物語集」

【解答八】2020 同志社大学 2/6,学部個別 文 経済

(一) a 3 b 1

《出典》心敬「ささめごと」

【解答九】2020 同志社大学 2/7,学部個別 政策 文化情報 スポーツ健康科

(一) a 5 b 2

《出典》「明徳記」

【解答十】2020 同志社大学 2/8,学部個別 法 グローバル・コミュニケーション

（一）　a　3　　b　3
《出典》三浦茂正「慶長見聞集」

【解答十一】2020 同志社大学 2/9, 学部個別 神　商　心理　グローバル地域文化
（一）　a　4　　b　1
《出典》「今昔物語集」／虎関師錬「元亨釈書」

【解答十二】2020 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会
（一）　a　5　　b　3
《出典》「聖徳太子伝」

【解答十三】2019 同志社大学 2/5, 全学部（文系） 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化
（一）　a　1　　b　5
《出典》無住「雑談集」

【解答十四】2019 同志社大学 2/6, 学部個別日程 文　経済
（一）　a　4　　b　2
《出典》橘成季「古今著聞集」

【解答十五】2019 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策　文化情報　スポーツ健康科
（一）　a　1　　b　5
《出典》「吉備大臣入唐絵巻」

【解答十六】2019 同志社大学 2/8, 学部個別日程 法　グローバル・コミュニケーション
（一）　a　1　　b　4
《出典》「今昔物語集」

【解答十七】2019 同志社大学 2/9, 学部個別日程 神　商　心理　グローバル地域文化
（一）　a　2　　b　1
《出典》「阿仏東くだり」

【解答十八】2019 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会
（一）　a　5　　b　3
《出典》「藤篋冊子」／注「新古今集 恋一」

【解答十九】2018 同志社大学 2/5, 全学部（文系） 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化
（一）　a　5　　b　4

《出典》「今昔物語集」

【解答二十】2018 同志社大学 2/6, 学部個別日程 文 経済
（一） a 2 b 5
《出典》橘成季「古今著聞集」

【解答二十一】2018 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科
（一） a 2 b 1
《出典》「曽我物語」

【解答二十二】2018 同志社大学 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション
（一） a 4 b 3
《出典》「しぐれ」

【解答二十三】2018 同志社大学 2/9, 学部個別日程 神 商 心理 グローバル地域文化
（一） a 5 b 4
《出典》浅井了意「法花経利益物語」

【解答二十四】2018 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会
（一） a 2 b 1
《出典》一色直朝「月庵酔醒記」

【解答二十五】2017 同志社大学 2/5, 全学部（文系） 神 文 社会 法 経済 商 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化
（一） a 2 b 5
《出典》荒木田麗女「月のゆくへ」

【解答二十六】2017 同志社大学 2/6, 学部個別日程 文 経済
（一） a 4 b 2
《出典》閑寿「兼好諸国物語」

【解答二十七】2017 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科
（一） a 4 b 5
《出典》「宇治拾遺物語」

【解答二十八】2017 同志社大学 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション
（一） a 2 b 5
《出典》「しら露」

【解答二十九】2017 同志社大学 2/9, 学部個別日程 神　商　心理　グローバル地域文化
（一）　a　5　　b　2
《出典》石川雅望「しみのすみか物語」

【解答三十】2017 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会
（一）　a　5　　b　3
《出典》「西行」

【解答三十一】2016 同志社大学 2/5, 全学部（文系） 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化
（一）　a　4　　b　5
《出典》「住吉物語」／「大和物語」／「土佐日記」／「宇津保物語」

【解答三十二】2016 同志社大学 2/6, 学部個別 文　経済
（一）　a　3　　b　2
《出典》藤原長子「讃岐典侍日記」

【解答三十三】2016 同志社大学 2/7, 学部個別 政策　文化情報　スポーツ健康科
（一）　a　5　　b　4
《出典》「太平記」

【解答三十四】2016 同志社大学 2/8, 学部個別 法　グローバル・コミュニケーション
（一）　a　1　　b　4
《出典》橘成季「古今著聞集」／紫式部「源氏物語」／「古今和歌集」／「栄花物語」／「万葉集」

【解答三十五】2016 同志社大学 2/9, 学部個別 神　商　心理　グローバル地域文化
（一）　a　3　　b　2
《出典》井関隆子「井関隆子日記」

【解答三十六】2016 同志社大学 2/10, 学部個別 社会
（一）　a　1　　b　5
《出典》荒木田麗女「怪世談」

【解答三十七】2015 同志社大学 2/5, 全学部日程（文系） 神　文　社会　法　経済　商　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化
（一）　a　2　　b　1
《出典》「今昔物語集」

【解答三十八】2015 同志社大学 2/6, 学部個別日程 文　経済

（一）　a　3　　b　5
《出典》「海人の刈藻」

【解答三十九】2015 同志社大学 2/7, 学部個別日程　政策　文化情報　スポーツ健康科
（一）　a　3　　b　1
《出典》「吉野拾遺」

【解答四十】2015 同志社大学 2/8, 学部個別日程　法　グローバル・コミュニケーション
（一）　a　4　　b　1
《出典》「いはでしのぶ物語」

【解答四十一】2015 同志社大学 2/9, 学部個別日程　神　商　心理　グローバル地域文化
（一）　a　5　　b　4
《出典》「浅茅が露」

【解答四十二】2015 同志社大学 2/10, 学部個別日程　社会
（一）　a　3　　b　1
《出典》「塵塚物語」

【解答四十三】2014 同志社大学 2/5, 全学部日程（文系）神　文　社会　法　経済　商―商学総合（昼主）　商――フレックス複合（昼夜）　政策　文化情報　理工　スポーツ健康科　心理　グローバル・コミュニケーション　グローバル地域文化
（一）　a　4　　b　2
《出典》「古今著聞集」

【解答四十四】2014 同志社大学 2/6, 学部個別日程　文　経済
（一）　a　2　　b　3
《出典》「風に紅葉」／「古今和歌集」

【解答四十五】2014 同志社大学 2/7, 学部個別日程　政策　文化情報　スポーツ健康科
（一）　a　5　　b　3
《出典》「増鏡」

【解答四十六】2014 同志社大学 2/8, 学部個別日程　法　グローバル・コミュニケーション
（一）　a　3　　b　5
《出典》「水鏡」

【解答四十七】2014 同志社大学 2/9, 学部個別日程　神　商―商学総合（昼主）　商―フレックス複合（昼夜）　心理　グローバル地域文化
（一）　a　5　　b　4
《出典》建部綾足「紀行」／「千載和歌集」

【解答四十】2014 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会

（八一）ア 2　イ 5

《出典》「俊頼髄脳」

【解答四十九】2013 同志社大学 2/5, 全学部日程（文系）神 文 社会 法 経済 商 ー商学総合（昼主） 商――フレックス複合（昼夜） 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション グローバル地域文化

（一）a 2　b 5

《出典》「松陰中納言」

【解答五十】2013 同志社大学 2/6, 学部個別日程 文 経済

（一）a 2　b 4

《出典》後白河院「梁塵秘抄口伝集」

【解答五十一】2013 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科

（一）ア 1　イ 5

《出典》藤原範兼「和歌童蒙抄」

【解答五十二】2013 同志社大学 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション

（一）a 1　b 5

《出典》明恵上人「明恵上人伝記」

【解答五十三】2013 同志社大学 2/9, 学部個別日程 神 商―商学総合（昼主） 商――フレックス複合（昼夜） 心理 グローバル地域文化

（一）a 1　b 3

《出典》「閑居友」

【解答五十四】2013 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会

（一）a 4　b 5

《出典》飛鳥井雅有「春のみやまぢ」

【解答五十五】2012 同志社大学 2/5, 全学部日程（文系）神 文 社会 法 経済 商――フレックスA（昼主） 商―フレックスB（昼夜） 政策 文化情報 理工 スポーツ健康科 心理 グローバル・コミュニケーション

（一）ア 4　イ 5

《出典》「今昔物語集」

【解答五十六】2012 同志社大学 2/6, 学部個別日程 文 経済

（一）a 1　b 4

《出典》「我が身にたどる姫君」

【解答五十七】2012 同志社大学 2/7, 学部個別日程 政策 文化情報 スポーツ健康科

（一） a 4 b 5

《出典》「続古事談」

【解答五十八】2012 同志社大学 2/8, 学部個別日程 法 グローバル・コミュニケーション

（一） ア 5 イ 2

《出典》阿仏尼「うたたね」

【解答五十九】2012 同志社大学 2/9, 学部個別日程 神 商――フレックスA（昼主） 商―フレックスB（昼夜） 心理

（一） ア 5 イ 4

《出典》本居宣長「菅笠日記」

【解答六十】2012 同志社大学 2/10, 学部個別日程 社会

（一） a 2 b 5

《出典》「正徹物語」